大町遺跡
小金森ヘイナイメ遺跡

県営ほ場整備事業余喜地区
埋蔵文化財発掘調査報告

1995．3

石川県立埋蔵文化財センター

大町遺跡
小金森ヘイナイメ遺跡

県営ほ場整備事業余喜地区
埋蔵文化財発掘調査報告

1995．3

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は県営ほ場整備事業余喜地区に係る埋蔵文化財（大町(C)遺跡、小金森ヘイナイメ(A・B)遺跡）発掘調査報告書である、調査地は羽咋市大町地内と鹿島郡鹿島町小金森地内にあたる。

2．調査は県農林水産部耕地整備課（羽咋土地改良事務所）の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査に係る費用は県耕地整備課が負担した他、一部文化庁補助金の交付を受けた。

3．現地調査は平成３年度（大町遺跡）と平成４年度（小金森ヘイナイメ遺跡）に実施した。

4．出土品の整理は、平成６年度に社石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。

5．本書の編集は中島が担当し、以下のように分担執筆した。

第１章～第２章　川畑　　誠

第３章　　中島　俊一

6．挿図中に指示する方位は公共座標系による。また断面図中の水平基準に示す数値は標高（単位ｍ）である。

7．本調査で出土した埋蔵文化財および記録資料は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

本　文　目　次

第1章　位 置 と 環 境 …… 1

第1節　地理的環境

第2節　歴史的環境

第2章　大町(C)遺跡 …… 5

第1節　調査の経過

第2節　調査の概要と土層層序

第3節　遺　　構

第4節　出 土 遺 物

第5節　小　　結

第3章　小金森ヘイナイメ(A・B)遺跡 …… 31

第1節　調査の概要

第2節　ヘイナイメA遺跡の遺構と遺物

(1)　調査区の概要

(2)　遺構と遺物

第3節　ヘイナイメB遺跡の遺構と遺物

(1)　調査区の概要と出土遺物

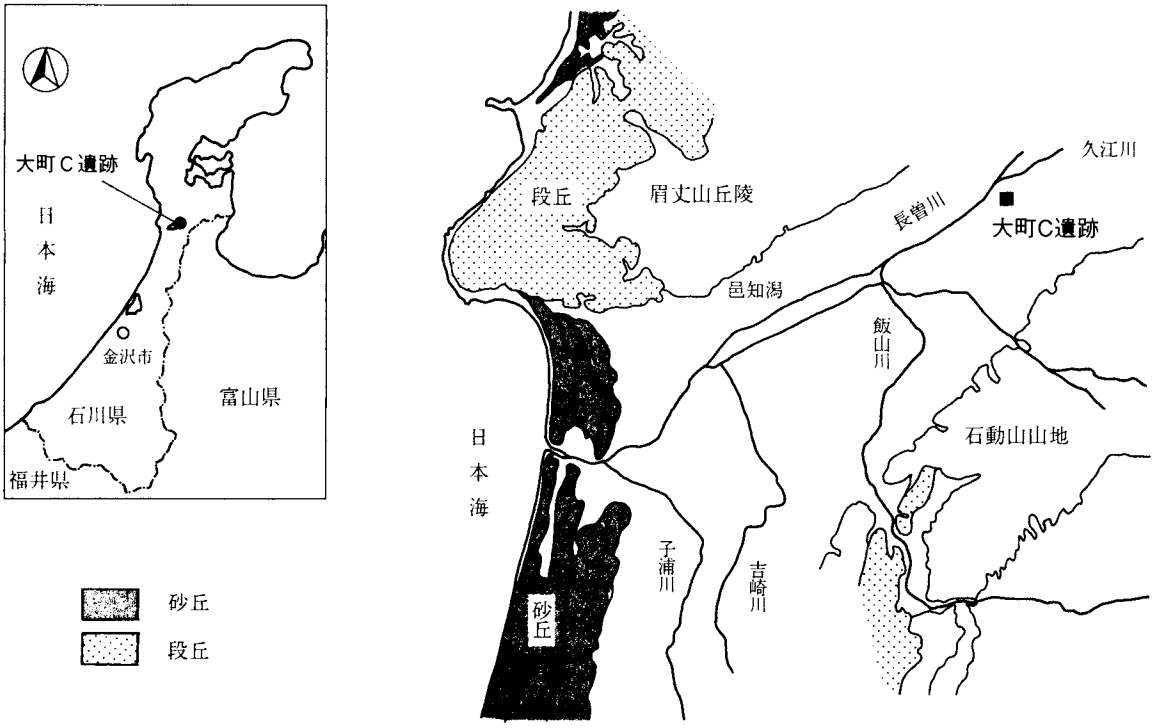
第1章　位置と環境

第1節　地理的環境

今回調査を実施した大町(C)遺跡、小金森ヘイナイメ(B)遺跡は石川県羽咋市大町に所在する。

羽咋市は日本海に突出する能登半島の基部、いわゆる口能登地方に位置し、面積約77.1㎢、東西に約10km、南北に約12kmの、やや矩形に近い地域を占める。本地域の地形的特徴として、南西から北東方向に走る邑知地溝帯によって、東側の石動山山地、西側の眉丈丘陵に分かれ、さらに日本海に面した海岸部には千里浜砂丘が発達していることがあげられる（第1図)。標高400m以上を測る石動山山地は、礫質砂岩のような粗い粒子より成る岩石が分布するため斜面は急峻で、地滑りの多発地帯となっている。また邑知地溝帯に流れ下る小河川により、同山地前縁部には小規模な扇状地形が不明瞭ながら確認できる。邑知地溝帯は、併走する二条の断層によって切断された土地が沈降してできた低地で、その幅1～4kmを測る。そして、海岸砂丘によりせき止められた南部には邑知潟が存在する。邑知潟は周囲14.5km、水面面積約4.6㎢を測り、水深約1mと沼に近い様相を呈する。現在は昭和21(1946)年から実施された干拓事業により、その一部が残存するのみである。眉丈山丘陵は標高50～120mを測り、高低差が少ない緩やかな形状をなし、西端部から海岸部には段丘が発達している。その南側に存在する千里浜砂丘は、幅1～1.5kmの間に内列・中列・外列の都合三列の砂丘が併走し、内列砂丘は最高30m前後の高さに達する。

両遺跡の存在する大町は、羽咋市の北東部に位置する。地形的にみれば邑知潟北東縁部、邑知潟に注ぐ久江、長曽川の東岸に位置する。本地域は、羽咋方面から鹿島・七尾方面を最短距離で結ぶルート上にあり、現在でも陸上交通の要衝にあたる。また水上交通に関しては、邑知潟および河川を利用して古来より重要な位置を占めていたことは想像に難くない。両遺跡周辺の集落には「浜」を付した小字が多数分布することから、水田・畑作などの農業とともに、邑知潟での内水面漁業が生活に深く結びついていたと考えられる。



第1図　遺跡の位置と周辺の地形

第2節　歴史的環境

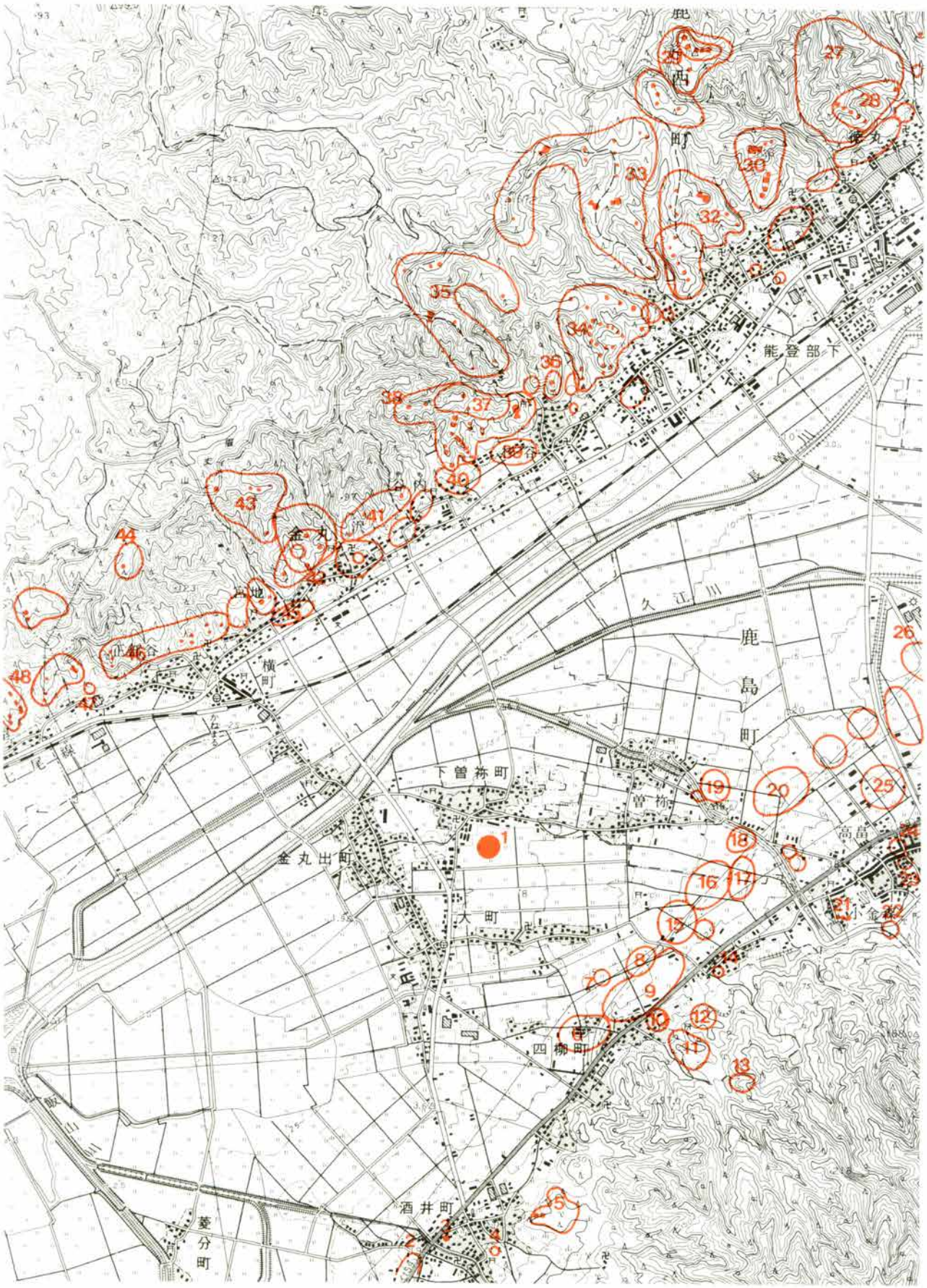
両遺跡の所在する邑知地溝帯は県内でも有数の遺跡稠密地帯として知られている。そして第2図でも明らかなとおり、邑知潟周辺地域の大部分は低地であり、集落遺跡は丘陵や山地の前縁に展開する微高地、小扇状地上に等高線に沿うように帯状に分布する特徴をもつ。そのため、県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した谷内ブンガヤチ遺跡で縄文時代～江戸時代までの集落が継起的に営まれた例をみるように、同一箇所に複数の時代の集落が営まれ、かつ現在の集落域も重複することから実態の解明が遅れている。一方、低地の集落は一時的に存在するようで、弥生時代後期後半、奈良・平安時代が主なものとなる。この低地への本格的な進出は中世以降と考えられる。

縄文時代では、杉谷チャノバタケ遺跡（早期末～前期初頭）、四柳貝塚（中期～後期初頭）、四柳中の堂遺跡（中期）、高畠ケカッチョ遺跡、小金森ヘイナイメB遺跡（晩期）などが確認できるのみである。そのうち四柳貝塚（中期主体）は標高30～40ｍの段丘上に立地、現在は四柳神社境内となっている。範囲確認・小規模な発掘調査により東西100ｍ、南北50ｍの範囲にヤマトシジミの貝層の存在が確認されている。また今回調査を実施した小金森ヘイナイメB遺跡からは甕棺と考えられる2個の深鉢が出土している。

本地域への弥生文化の波及・定着は、県内でも早い段階に属すると考えられている。例えば邑知潟南岸に立地する吉崎・次場遺跡は、広域流通の一翼を担うような中核的集落と考えられ、前期には集落が成立している。現在までの調査で多種多様な遺構群を検出するとともに、石剣・磨製石器、鏡片、金属器、玉造関係遺物、木製農具などの注目すべき遺物が出土している。続く弥生時代後期～末には、県内の他地域と同様に遺跡数は急増する。今回の調査でも小金森ヘイナイメB遺跡で同時期の遺物が出土した他、周辺には四柳貝塚、四柳白山下遺跡、曽祢弥生遺跡、曽祢遺跡、谷内ブンガヤチ遺跡、金丸杉谷川遺跡などが確認できる。いずれも丘陵縁辺部に位置し、低地への進出は認められない。また県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した杉谷チャノバタケ遺跡では、後期後半に属する高地性集落が営まれたことが判明している。

古墳時代になると、本地域の集落の動向は不鮮明になる一方、古墳群は前出の海岸段丘と砂丘、および眉丈山丘陵で特に活発に築造される。前二者のうちには、後に「国造本紀」記載の羽咋地域の首長である「羽咋君」の奥津域を含むと考えられている。また眉丈山丘陵の尾根線上には、正部谷古墳群（10基）、沢古墳群（9基）、谷内古墳群（3基）、杉谷古墳群（33基）、宿屋D古墳群（9基）などが濃密に分布する。それに対して、石動山山地では古墳の築造が比較的低調で、わずかに曽禰1～3号古墳（1号墳は金銅製双竜式環頭太刀を出土、7世紀前葉）、高畠経塚古墳（金銅製圭頭太刀・銅椀出土、7世紀前後）の他、酒井古墳、酒井東古墳群（2基以上）、大町横穴群（2基）、四柳1号横穴が確認できるのみである。この状況は本地域の相対的地位の低さを示すのか、未確認の古墳が存在するのかの判断は現段階ではできない。集落遺跡では小金森ヘイナイメB遺跡、金丸宮地遺跡（中期）、酒井国道遺跡、曽祢遺跡、能登部小学校遺跡、曽祢C遺跡などが知られているが、詳細は不明といわざるをえない。その中で県埋蔵文化財保存協会が調査を実施した曽祢C遺跡では、7世紀前半の掘立柱建物を規則的に配した集落が確認でき、比較的上位の集団の居住域と考えられている。また生産遺跡としては、眉丈山からのびる段丘上に県内でも最も古い段階の須恵器生産窯跡（柳田ウワノ1号窯）が確認されている。この段丘上には比較的小規模ながら8世紀中頃まで継続的に須恵器生産がおこなわれている。

奈良・平安時代は本地域は能登郡（もしくは羽咋郡）に属し、養老2（718)年に越前国から分離、能登国となる。しかし天平13（741)年に越中国に併合、天平勝宝9（757)年に能登国として再立国するという過程をとる。本地域は交通の要衝という地理的特性から、石動山縁辺部には鹿島（七尾）に向かう古代北陸道の支道が存在したと考えられる。集落遺跡としては小金森ヘイナイメB遺跡、四柳白山下遺跡や吉崎・次場遺跡、金丸宮地遺跡などが存在する。うち発掘調査が実施された四柳白山下遺跡では、7世紀末～10世紀初頭の多数の掘立柱建物を



第２図　周辺の遺跡（S＝1/25,000）

第１表　周辺遺跡地名表

番号	県番号	遺　跡　名	時　代	所　在　地
1	07125	大町Ｃ遺跡	平安	羽咋市大町
2	07037	酒井国道遺跡	古墳	羽咋市酒井町
3	07109	酒井古墳	古墳	〃
4	07110	酒井中世墓群	中世	〃
5	07111	酒井東古墳群（２基～）	古墳	〃
6	07112	四柳やちだ遺跡	古墳	羽咋市四柳町
7	07118	四柳宮の腰古銭遺跡	中世	〃
8	07119	四柳ミッコ遺跡	弥生・古墳	〃
9	07117	四柳白山下遺跡	弥生～中世	〃
10	07113	四柳貝塚	縄文	〃
11	07114	四柳中の堂遺跡	縄文・古墳	〃
12	07116	四柳横穴群（７基）	古墳	〃
13	07115	四柳中世墓群	中世	〃
14	07120	大町横穴群（２基～）	古墳	羽咋市大町上野
15	07121	大町ダイジングウ遺跡	中世	羽咋市大町
16	07124	大町ゴンジョガリ遺跡	古墳	〃
17	07123	小金森ヘイナイメＢ遺跡	奈良・平安	羽咋市大町他
18	34001	小金森ヘイナイメＡ遺跡	縄文	鹿島町小金森
19	34004	曽禰堂田遺跡	弥生	鹿島町曽禰
20	34005	曽祢Ｃ遺跡	古墳	鹿島町曽祢
21	34008	曽禰１～３号墳	古墳	鹿島町曽禰
22	34009	高畠ケカッチョ遺跡	縄文	鹿島町高畠
23	34010	高畠経塚古墳	古墳	〃
24	34012	高畠弥生遺跡	弥生	〃
25	34013	高畠遺跡	古墳	鹿島町高畠
26	34016	高畠テラダ遺跡	奈良～中世	鹿島町藤井・高畠
27	36050	徳丸城跡	鎌倉	鹿西町徳丸他
28	36049	徳丸古墳群（６基～）	古墳	鹿西町徳丸
29	36045	テンジクダイラ古墳群	古墳	鹿西町能登部上
30	36043	鷹王山１～７号墳	古墳	〃
31	36042	能登部小学校遺跡	縄文～古墳	鹿西町能登部下
32	36040	薬師山・丸山古墳群	古墳	〃
33	36038	天神１～18号墳	古墳	〃
34	36034	能登部姫塚１～25号墳	古墳	〃
35	36029	杉谷Ｂ古墳群（９基）	古墳	鹿西町金丸杉谷
36	36030	杉谷Ｃ古墳群（２基）	古墳	〃
37	36026	杉谷チャノバタケ遺跡	縄文～近世	〃
38	36028	杉谷Ａ古墳群（22基）	古墳	〃
39	36025	金丸杉谷遺跡	弥生～中世	〃
40	36024	谷内ブンガヤチ遺跡	縄文～近世	〃
41	36021	谷内古墳群（３基）	古墳	鹿西町金丸谷内
42	36018	沢Ｂ古墳群（４基）	古墳	鹿西町金丸沢
43	36017	沢Ａ古墳群（５基）	古墳	〃
44	36010	正部谷Ａ古墳群（１基）	古墳	鹿西町金丸正部谷
45	36014	金丸宮地遺跡	古墳～奈良	鹿西町金丸宮地
46	36011	正部谷Ｂ古墳群（９基）	古墳	鹿西町金丸正部谷
47	36008	金丸正部谷横穴	古墳	〃
48	07108	宿屋Ｄ１～９号墳	古墳	羽咋市鹿島路町

検出、木沓、帯金具、「寺」、「上家」、「下家」などの墨書土器が出土している。また小金森ヘイナイメＢ遺跡からは、掘立柱建物や県内初例となる方形の溝を伴う鍛冶関連遺構が検出されている。

平安時代に入ると、今回調査を実施した大町Ｃ遺跡、吉崎・次場遺跡などが確認できる。ともに９世紀代に成立し、官衙的性格を有する遺跡と考えられる。ちょうど加賀国府の置かれたとされる河北潟沿岸地域でも、当期以降に官衙的な性格を有する遺跡が成立、その立地・性格の共通性が注目される。なお吉崎・次場遺跡では小規模調査ながら「三宅」、「三家」などの墨書土器、帯金具、和銅開珎などが出土している。また県埋蔵文化財センターが実施した曹洞宗永光寺周辺の発掘調査では、平安時代中期の遺物が出土し、山岳宗教に関連する遺跡の存在が指摘されている。

鎌倉時代になると、承久３（1221）年の能登国田数注文に大町保の公田数１町７反との記載があり、文献上で初めて「大町」の地名があらわれる。今回の大町Ｃ遺跡の調査で出土した墨書土器の中に「大町」の文字があり、地名とすれば平安時代前期には、本地域周辺が既に「大町」と呼称されていたことになる。また鎌倉時代後期から室町時代前期には邑知潟縁辺の村々の産土神勧請伝承が集中し、開発のひとつのピークがあると考えられている。

引用・参考文献

『羽咋市史』原始・古代編　1973　羽咋市
『角川日本地名大辞典』　1981　角川書店
『図説　石川県の歴史』　1988　河出書房新社
『四柳白山下遺跡Ⅰ』　1990　羽咋市教育委員会

第2章　大町（C）遺跡

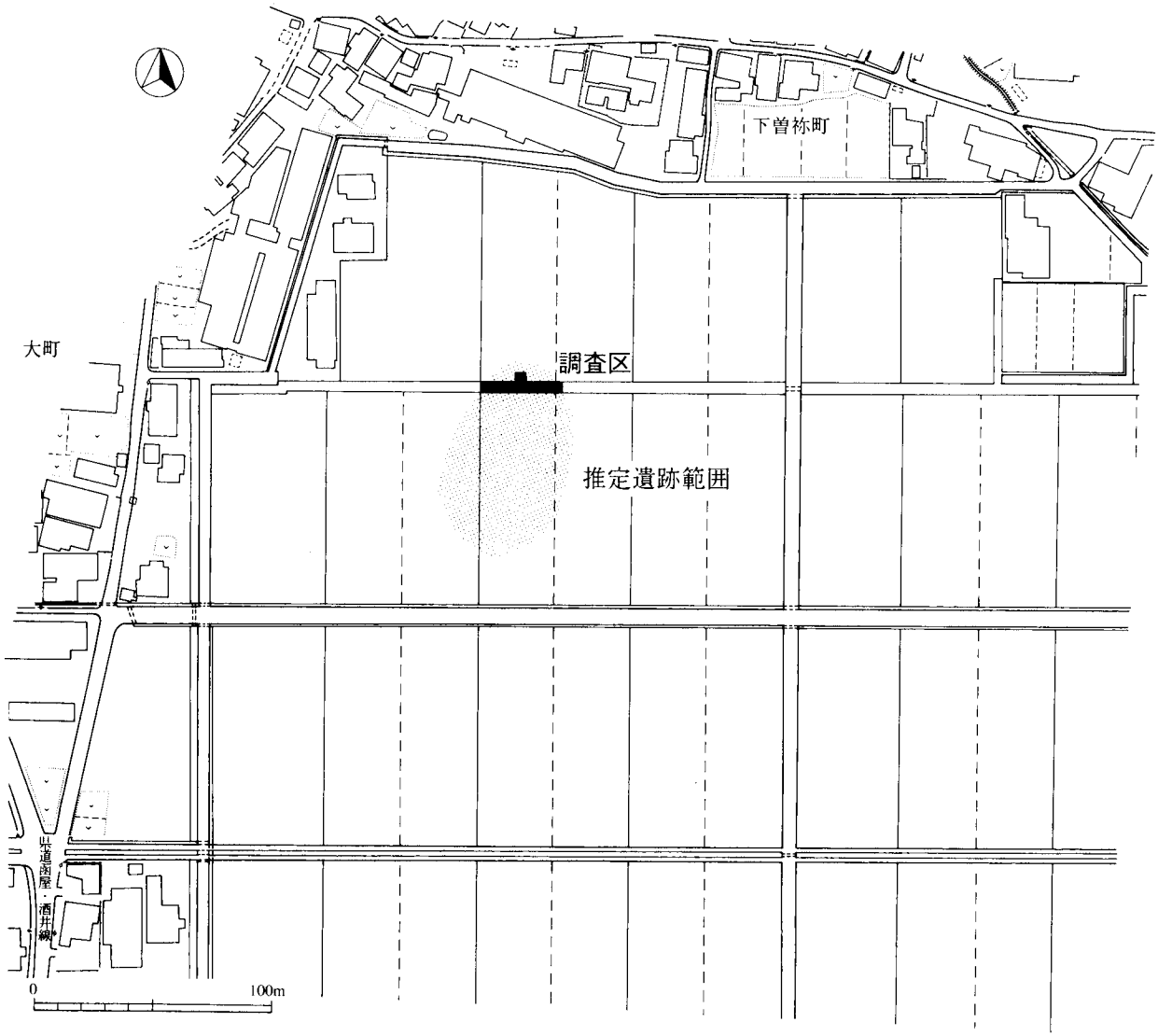
第1節　調査の経過

大町C遺跡は石川県羽咋市大町地内、現在の集落城南側の水田中に位置する奈良・平安時代の村落遺跡である。

本遺跡の発掘調査は、県排地整備課、羽咋土地改良事務所主管の県営ほ場整備事業余喜地区大町工区（対象面積約18ha、平成6年度事業終了）の施工に伴う事前の調査として実施されたものである。

現地調査は、平成2年度に県耕地整備課の依頼を受け、県立埋蔵文化財センター企画調整課が実施した分布調査で得られた遺跡が損壊を受ける箇所を対象として、平成3年4月30日～5月15日に実施した。当初は排水路敷設箇所のみ（延長約40m）に対して調査を実施する予定であったが、調査途中で第①図のとおり調査区北側に隣接して井戸を確認、事業実施により損壊する可能性が高いと判断、井戸周辺部分も調査区に加えている。

その後、平成6年度に出土遺物整理作業を社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託実施の後、写真撮影作業、図版作成作業などを経て、本発掘調査報告書を刊行するものである。



第3図　調査区の位置（S＝1/3,000）

以下、現地調査参加者、現地調査日誌抄を記す。

現地調査参加者

調査第一課　中島俊一主査、垣内光次郎主事、川畑　誠主事、安　英樹主事、
田畑　弘調査補助員、松田英博調査員（いずれの役職も平成３年度当時）

現地調査日誌抄

４月30日　発掘調査機材搬入。重機による表土除去作業を実施した後、遺構検出作業をおこなう。調査区北半は遺物包含層、遺構とも明瞭に把握できない。

５月１日　遺構検出作業、遺構掘り下げ作業を実施。「大町」と墨書された須恵器杯蓋が出土する。

５月２日　遺構掘り下げ作業の後、写真撮影作業、図面作成作業をおこなう。北壁土層柱状図作成中、井戸枠の一部を確認、その取り扱いについて協議をおこなう。

５月８日　重機により井戸確認箇所周辺に対して調査区を拡張する。遺構検出作業の後、井戸の掘り下げ作業をおこなう。

５月９日～13日　引き続き遺構検出、遺構掘り下げ作業を実施する。１号井戸の図面作成作業と掘り下げ作業、写真撮影作業を並行して実施する。羽咋市教育委員会職員３名来跡。

５月14日　井戸枠を取り上げながら、検出困難だった井戸堀方の検出・掘り下げ作業を実施する。

５月15日　井戸枠取り上げ作業、図面作成作業を完了。発掘調査機材を撤収し、現地調査を終了する。

第２節　調査の概要と土層層序

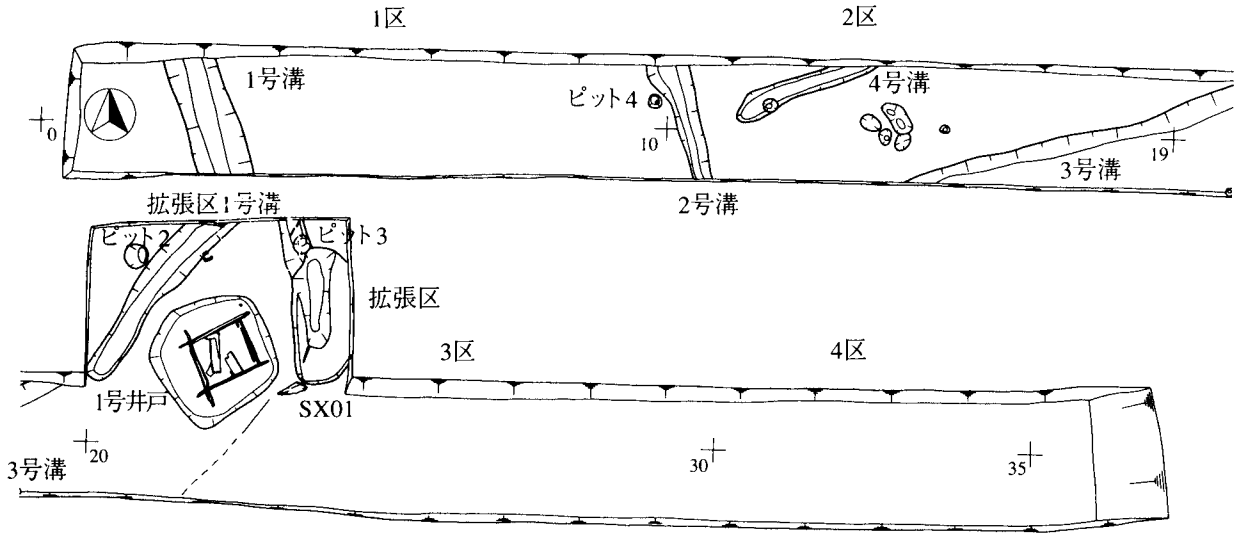
ａ．調査の概要

調査は排水路敷設箇所（延長約40ｍ×幅約２ｍ）を主な対象とし、面積は約80㎡を測る。

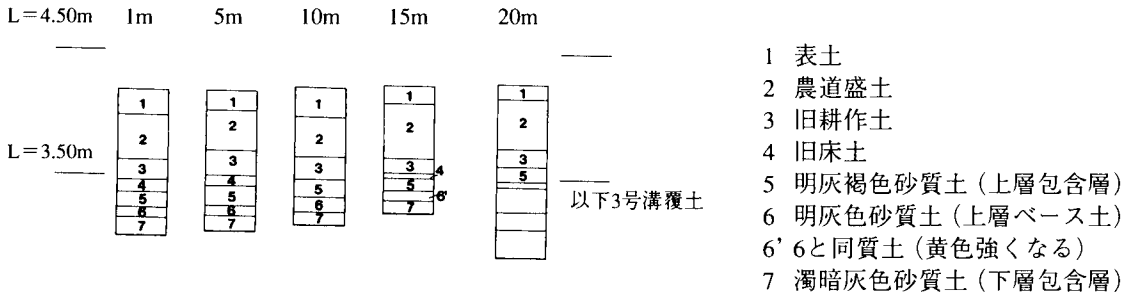
調査区の主軸方位は計画排水路中心線（Ｎ-90°）と一致する。調査区の起点は任意に設定、第②図のように西側より10ｍごとに１～４区と、また調査途中で拡張した箇所は拡張区と呼称している。

調査の結果、１区～３区西半部で奈良時代後半～平安時代前期の溝５条、おちこみ２ケ所、井戸１基などを検出した。３区東半部以東では包含層、遺構とも明確に把握できず、本遺跡の北東端に近い部分と考えられる。これらの遺構は、後述するように間層の堆積は一様でないものの、基本的に明灰色砂質土の間層をはさんで上下２層にわかれる。上層遺構には拡張区１号溝、１号井戸、１、２号おちこみが、また下層遺構には１～３号溝が属する。うち１号井戸は厚手の材を使用した相欠き仕口横板組みの井戸枠をもつ。この井戸枠の組み方をもつ井戸の存在は、当該時期の一般集落にはあまり確認できないことから、本遺跡の性格を考える上で重要な要素の一つといえる。また溝の主軸方位は一定の規則性を有し、土地利用の関係から注目される。

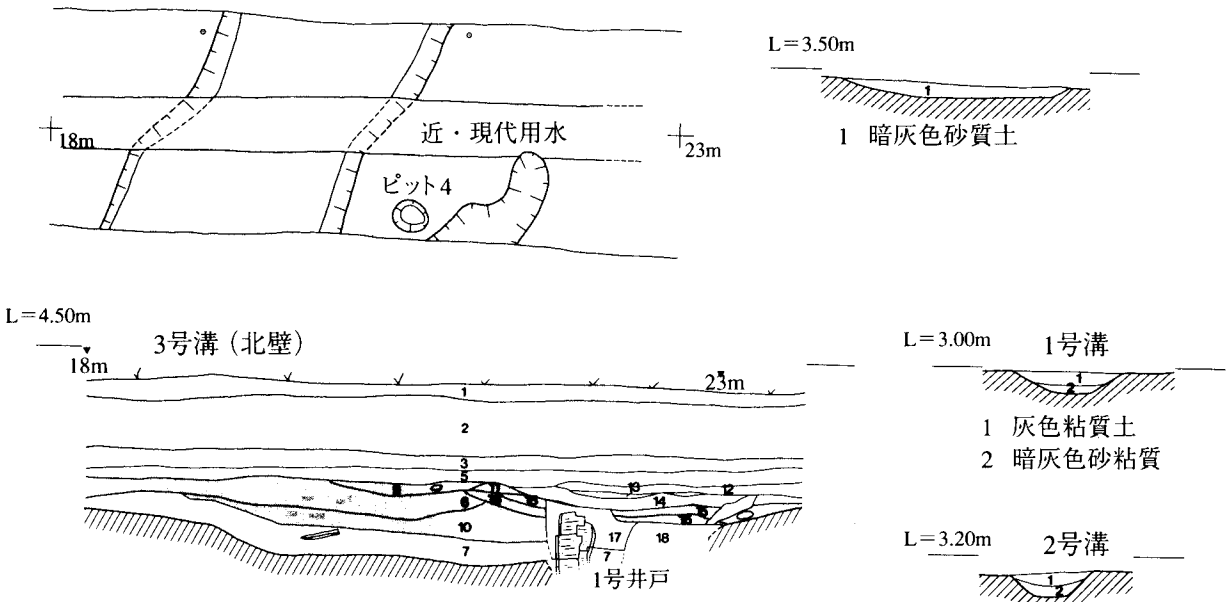
遺物はコンテナバット９箱を数え、当該時期の須恵器、土師器、土師質脚部、土師質土錘、製塩土器、井戸枠、木製品などが出土している。須恵器、土師器供膳具の中に「大町」、「宅」、「前宅」、「稲」、「万呂」、「廣成」などの文字を含む墨書土器片32点を含む。小規模調査のため即断は謹むべきであるが、前述の井戸の存在や存続期間・盛期を加味すれば、一般的集落とはかなり異なる要素が強い遺跡と考えられる。なお分布調査の結果では、本遺跡は第 1図のとおり南北方向約90ｍ、東西方向約60ｍの規模をもつ。現地調査時に併せて周辺水田部の遺物表面採集を実施したところ、調査区南東側約100ｍの範囲まで奈良～平安時代の土器が確認できた。このことから本遺跡は東南側に規模が拡大する可能性が指摘できる。



第４図　下層遺構配置図（S＝1/120）



第５図　北壁土層柱状図（S＝1/60）



第６図　下層遺構土層実測図（S＝1/60）

b．土層層序

調査区周辺は、長曽川のつくる自然堤防上に立地する現集落南側の低地となり、邑知潟の存在する西側に向けて、ゆるやかに傾斜する。現水田面の標高は調査区東端で約4.20ｍ、同西端で約3.70ｍを測る。また遺構検出面は調査区西端で約2.95ｍ、東端で約2.90ｍを測る。

２区以西の基本土層層序は第５図のとおり、上層より表土・農道盛土（現代）、旧耕作土・旧床土、上層包含層（明灰褐色砂質土）、上層ベース土（明灰色砂質土）、下層包含層（濁暗灰色砂質土）、下層ベース土（青灰色粗砂）となる。うち上層ベース土は固くしまり、厚さ８～12cmを測るが、堆積状況は一様とはいえず、ほとんど存在しない箇所も存在した。また上層ベース土をはさんだ上下の包含層間での土器片の接合も認められる。このことから、上層ベース土は洪水などの作用で一度に堆積した可能性が高く、かつ集落は上層ベース土の堆積期間を挟んで継続して営まれたと考えられる。３区以東の基本的な土層層序も一致すると考えられるものの、上層包含層・ベース土、下層包含層とも次第に不鮮明となり、かつ遺物の出土も少なくなる。

第３節　遺　　構

１号溝

１区で検出した下層遺構で、北側やや西（N-17°-W）にふれて流下する。調査区北壁で幅82cm、深さ26cmを測り、覆土は上層より灰色粘質土、暗灰色砂質土となる。遺物は出土していない。

２号溝

２区で検出した下層遺構である。１号溝とは約7.5ｍの距離を隔てて、ほぼ並行して流れる（N-13°-W）。調査区北壁で幅72cm、深さ22cmを測り、覆土は上層より灰色粘質土、明灰色粘質土となる。遺物は出土していない。

３号溝

２、３区で検出した下層遺構で、拡張区では明瞭に検出できなかった。１、２号溝とほぼ直交する位置関係にある（N-74°-E）。調査区北壁で幅約410cm、深さ約35cmを測り、覆土は包含層と同質の濁暗灰色砂質土の単層である。第11図45の土師器有台皿など定量の遺物が出土している。

４号溝

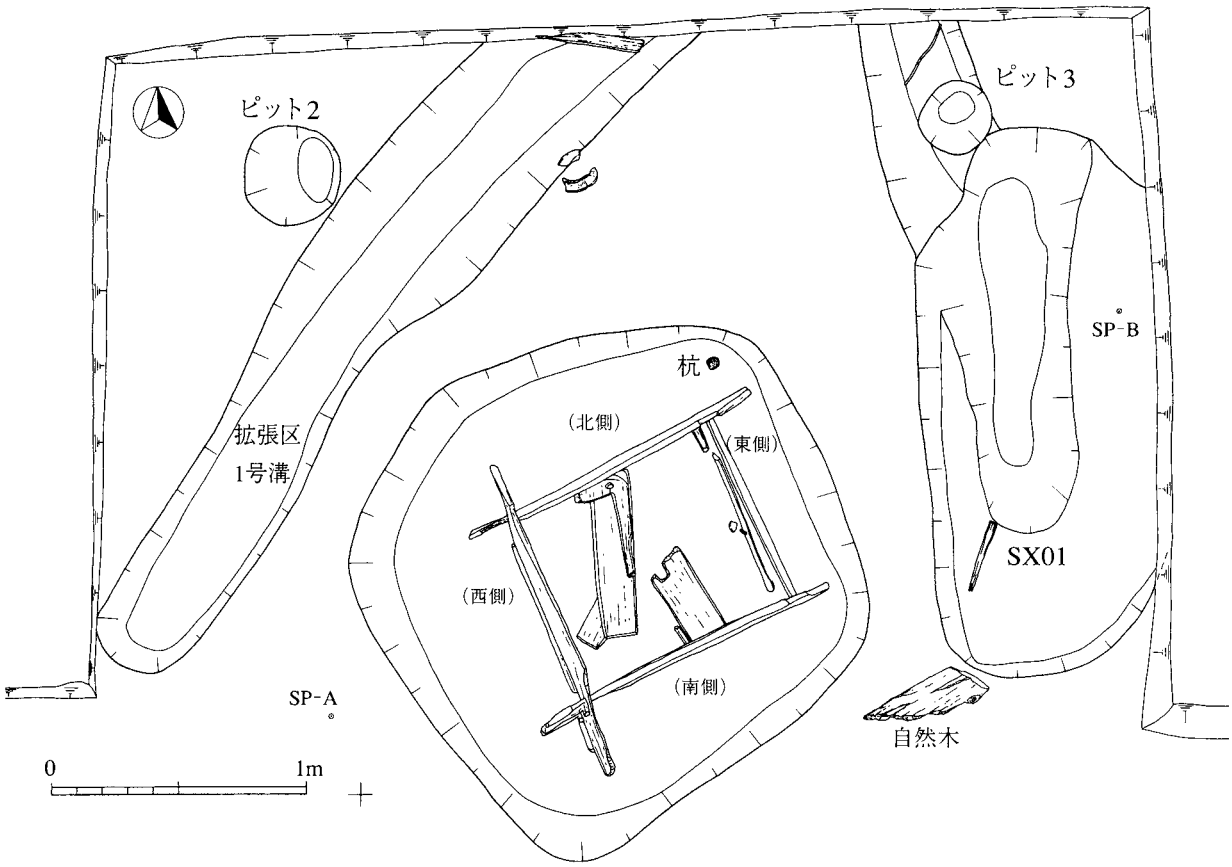
２区で検出し、１、２号溝とほぼ直交する。幅45cm、深さ６cmを測り、覆土は包含層と同質の濁暗灰色砂質土である。遺物は出土していない。

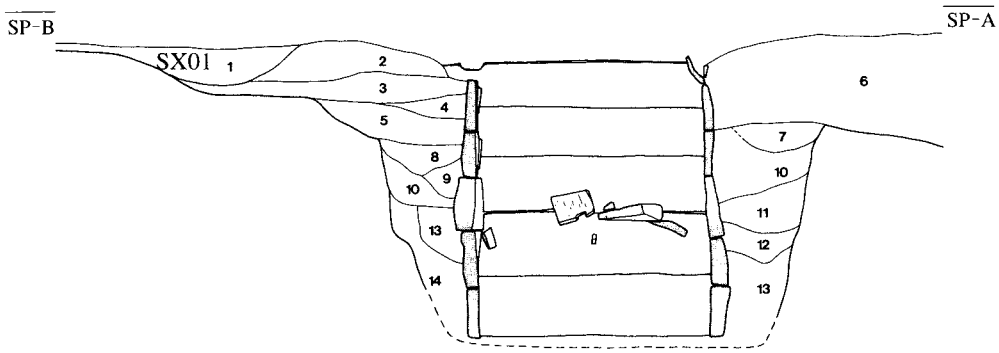
拡張区１号溝

上層遺構に属すると考えられ、３号溝とつながる位置関係にある。幅約40～70cm、深さ12cmを測り、覆土は濁暗灰色砂質土である。また図化できなかったが、非常に薄い木の板（長さ約120cm、幅約５cm）を南東側約20cm離れた位置に平行して据え、数本の杭で固定してあった。おそらく土止めと考えられる。覆土中より「前宅」と記された墨書土器を含む第10図29～32の土器や木製品が出土している。

１号井戸

上層遺構に属し、３号溝を切る。井戸の主軸方位は北西－南東方向にあるが、現地調査時は第７図のように北西側の辺を北側の辺、南西側の辺を西側の辺、南東側の辺を南側の辺、北東側の辺を東側の辺と便宜上呼称して、遺物・井戸枠横板の取り上げをおこなっている。以下の説明にも現地調査時の呼称を使用する。掘方は、やや崩れた隅丸方形を呈し、北－南方向186cm、東－西方向184cm、深さ約115cmを測る。土圧で若干内側に傾斜した井戸枠は、横板の両端近くを上下から切り込んでつくった仕口を交互に組み合わせて積み上げる相欠き仕口横板組の形式（黒崎1955）に属する。井戸枠内法は北－南方向89cm、東－西方向87cmを測り、本来は正方形を呈していたと考えられる。横板は北・南・東側が５段、西側が６段残存し、西側最上段の横板に仕口の痕跡が残ることか





1 暗褐色砂質土（黒褐色土ブロック状に混じる）
2 明灰褐色粗砂
3 淡灰緑色粗砂
4 暗灰色粗砂
5 黒灰色粗砂
6 明灰色砂質土
7 黒灰色砂質土
8 暗灰褐色砂質土（細砂粒混じる）
9 灰色粘質土（細砂粒混じる）
10 暗灰色砂質土
11 濁暗褐色粘質土（5cm大円礫混じる）
12 濁青灰色砂質土
13 濁暗灰色砂質土
14 暗灰色砂質土

第７図　１号井戸周辺遺構実測図（Ｓ＝1/30）

ら、さらに西側は１段以上組まれていたと考えられる。井戸枠の据え付け方は、まず上部にのみ深い仕口を切り込んだ南・北側の横板を据え付けた後、上下に切れ込みを入れた東・西側の横板、上下に切れ込みを入れた南・北側の横板、上下に切れ込みを入れた東・西側の横板、・・という順序で組み上げている。また上下の仕口は同じ深さとはせず、第13～19図でみるように切れ込みの深さを違わせる。なお第７図のように、北側の井戸枠に近接した位置に径約４㎝の表皮の残る杭が打ち込まれていたが、用途は判然としない。また上屋となるような柱穴は確認できなかった。

井戸枠内覆土は上層より第１層：暗灰色弱粘質土、第２層：粗砂を含む暗灰緑色粘質土、第３層暗褐色土（植物遺体を含む)、第４層：暗褐色土と砂礫の混合土、第５層：上層ベース土と同質の明灰色砂礫土、第６層：固くしまった明灰色砂礫土となり、第１～３層が自然埋没土、第４層が人工的な埋土、第５・６層が使用時の自然堆積土と考えられる。また各土層の厚さは略測だが、第１～３層までが約50㎝、第４層が約20㎝、第５層が15㎝、第６層が約30㎝を測る。図化した土器は、第10図27の土師器舞台椀（第１、２層)、同図28の土師器有台椀（第５層）が、また第４層からは一度に投機したと考えられる木製品（第20図～22図）が出土している。

１号おちこみ

２区で検出した上層遺構で、調査時はおちこみとしたが肩部のはっきりとしない浅い溝と考えられる。一部は後世の攪乱を受ける。幅160～180㎝、深さ６～８㎝を測り、覆土は暗灰色砂質土の単層である。主軸方位はＮ-約30°-Ｅをとる。覆土中より第８図１～５、７～９が出土、中には４（「宅」)、５（判読不能）の墨書土器を含む。

２号おちこみ

１号井戸と西側で隣接する上層遺構で、他の遺構とは異なり主軸方位は北側を指向する。やや崩れた隅丸長方形を呈し、長軸約220㎝、短軸100㎝以上、深さ18㎝を測る。覆土は黒褐色土がブロック状に混じる暗褐色砂質土である。覆土中より第10図33の須恵器無台杯や木製品が出土している。なお２号おちこみは、現地調査・整理作業時はＳＸ01と称している。

ピット１

平面円形を呈し、径約40㎝、深さ10㎝を測る。覆土は暗褐色砂質土で、出土遺物はない。

ピット２

上層遺構に属し、平面円形を呈する。径26～28㎝、深さ20㎝を測り、覆土は暗褐色砂質土である。出土遺物はない。

ピット３

２号溝の西側に隣接する。平面円形を呈し、径24㎝、深さ23㎝を測る。径９㎝、残存長15㎝の柱根が残っていたが、腐食が著しく取り上げることはできなかった。出土遺物はない。

第４節　出　土　遺　物

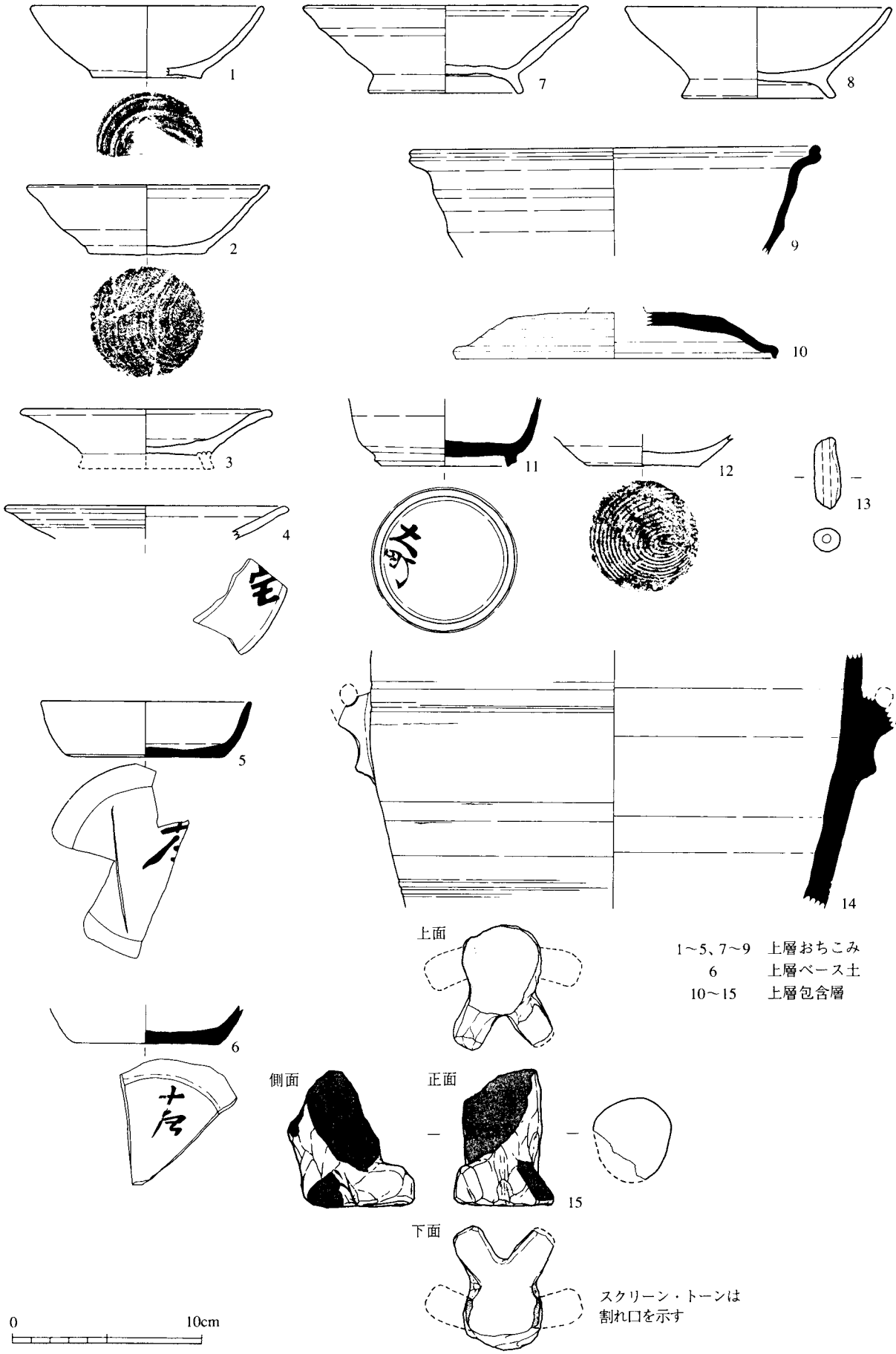
ａ．土　　器

３号溝

第11図45の土師器有台皿が出土している。器高3.3㎝、口径13.3㎝を測り、赤橙色を呈する。ロクロひだを顕著に残す身部に、薄手で高い台部をつける。10世紀前半に位置付けられる。

拡張区１号溝

第10図29～32が出土している。29は鳥屋窯跡群産と考えられる須恵器無台杯である。器高3.6㎝、口径11.2㎝を測り、身の深い印象を受ける。体部下半は丸味を有し、底部外面にはヘラ切り後にナデ調整を加える。また底部外面にヘラ記号および判読できないものの墨書が記される。８世紀中葉に位置付けられ、出土遺物の中で最も



第８図　出土遺物実測図１（Ｓ＝1/3）

古相を呈する。30は須恵器無台皿で、器高2.6cm、口径12.9cmを測る。底部やや台状を呈し、口縁端部は肥厚する。底部内外面とも使用による摩滅が著しく、外面には判読できないものの墨書1文字が記される。9世紀末葉～10世紀前半に位置付けられる。31は土師器有台椀と考えられ、口径16.5cmを測る。茶橙色を呈し、体部外面にロクロひだが残る。また体部外面には大きな文字で「前宅」と記される。10世紀前～中葉のものと考えられる。32は製塩土器で、尖底端部は平坦に仕上げる。赤橙色を呈し、胎土中に海面骨片、砂粒を多く含む。なお図化しなかったが、製塩土器胴部小片が5点出土しており、胎土より同一個体の可能性をもつ（図版10中央下）。

1号井戸

第10図27、28が覆土より出土している。27は第1、2層から出土した土師器無台椀で、器高3.8cm、口径13.6cmを測る。底部は台状を呈し、外面にロクロひだを残す体部は内湾気味にたちあがる。また底部内面には不整方向のナデ調整を加える。28は第5層から出土した薄手の土師器有台椀で、口径15.7cmを測る。底部外面は糸切り未調整で、体部は直線的に外傾する。体部外面に茶褐色の灯明痕が付着する。ともに10世紀前～中葉に位置付けられる。なお第5層からは3点の墨書土器細片が出土している。内訳は土師器椀類体部外面2点、内面黒色土師器椀類体部外面1点となる。

1号おちこみ

第8図1～5、7～9が出土している。土師器無台椀1は器高3.9cm、口径12.8cmを測る。底部は台状を呈し、底部内面は使用によると考えられる磨滅が認められる。土師器無台椀2は器高3.7cm、口径12.6cmを測る。1と同様に底部は台状を呈する。体部は直線的に外側にのび、口縁部は内側に肥厚する。土師器有台皿3は口径12.9cmを測る。体部は外反しながらのび、底部外面は回転糸切り未調整である。土師器有台皿4は口径14.7cmを測る。口縁端部面取りを丁寧におこなう。体部外面に「宅」と判読できる墨書が記される。須恵器無台杯5は口径11.0cm、器高3.0cmを測り、鳥屋窯跡群産と考えられる。体部と底部の境は明瞭に屈曲、体部はやや内湾気味にたちあがる。底部内外面とも不整方向のナデ調整を加える。底部外面にはヘラ記号および中央部に墨書（判読できず）が記される。7、8は土師器有台椀である。7は器高4.7cm、口径15.2cmを測る。細い台部を外展してつけ、底部外面の切り離し痕はナデ調整を加えるため確認できない。体部は直線的にのび、器厚は口縁部下端で一度薄くなる。色調は明橙色で、他の土師器個体とは異なった印象を受ける。8は器高4.9cm、口径14.0cmを測り、摩滅が著しい。体部は上半で内側に屈曲する。底部外面は糸切り痕が残り、焼成時の黒斑が認められる。9は薄手の須恵器鉢と考えられ、口径21.8cmを測る。胴部には成型時のロクロひだが明瞭に残る。端部を丸く仕上げる口縁部は嘴状に上方にのびる。5が9世紀初頭となる以外は、10世紀前～中葉に位置付けられる。

2号おちこみ

第10図33は須恵器無台杯で、底部外面に回転糸切り痕が認められる。底部は台状を呈し、焼成はあまりよくない。10世紀前半に位置付けられよう。

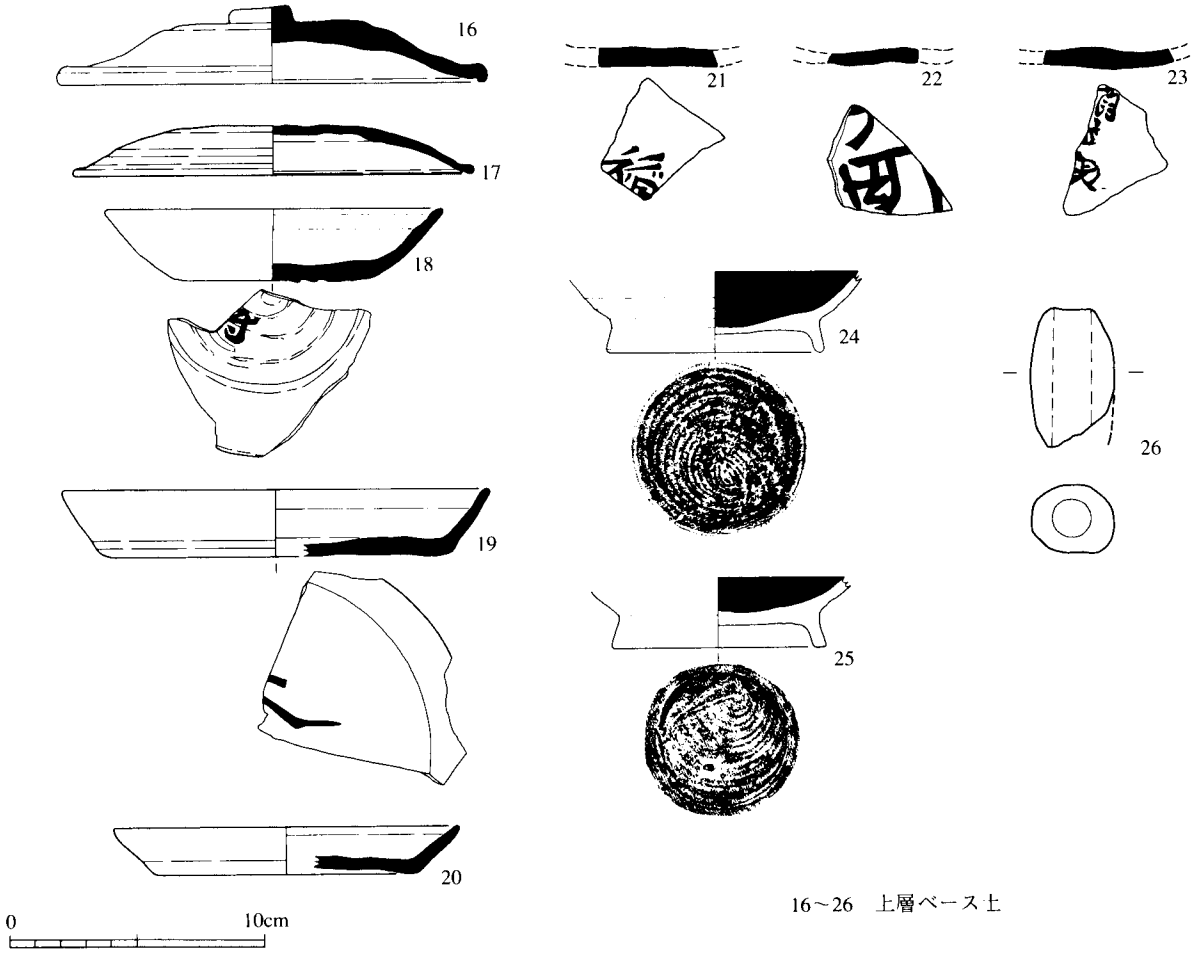
上層包含層

第8図10～15が出土している。10は須恵器杯蓋で口径16.9cmを測る。天井部外面はナデ調整を加え、口縁部は断面三角形を呈する。自然釉の状況からⅡb類重ね焼き（北野1988）がおこなわれ、天井部内面は使用によると考えられる器面の摩滅が著しい。9世紀前半に位置付けられる。11は須恵器有台杯で、体部はほとんど外傾しない。台部は底部外側につけられ、端部内側で接地する。底部外面に「大町」と判読できる墨書が記される。10と同様に鳥屋窯跡群産と考えられる。9世紀初頭に位置付けられる。12は底径6.2cm を測る土師器無台椀である。胎土中に赤色粒を含む。9世紀後半以降と考えられる。13は小形の土師質土錘で、残存長3.8cm、径1.4cm、孔径0.4cm、残存重量5.1gを測る。指による成型痕が明瞭に残る。14は鳥屋窯跡群産と考えられる須恵器双耳瓶胴部である。耳部付近の胴部に沈線が確認でき、焼成はあまりよくない印象を受ける。15は土師質の脚であるが、どのような器種になるか不明である。径4.1 ～4.6cm を測る略円形の脚部に4本の指を貼り付けるが、うち2本

は脱落している。淡黄橙色を呈し、胎土中に石英、長石、海面骨片を多量に含む。４本の指であることから、牛の脚の可能性をもつ。

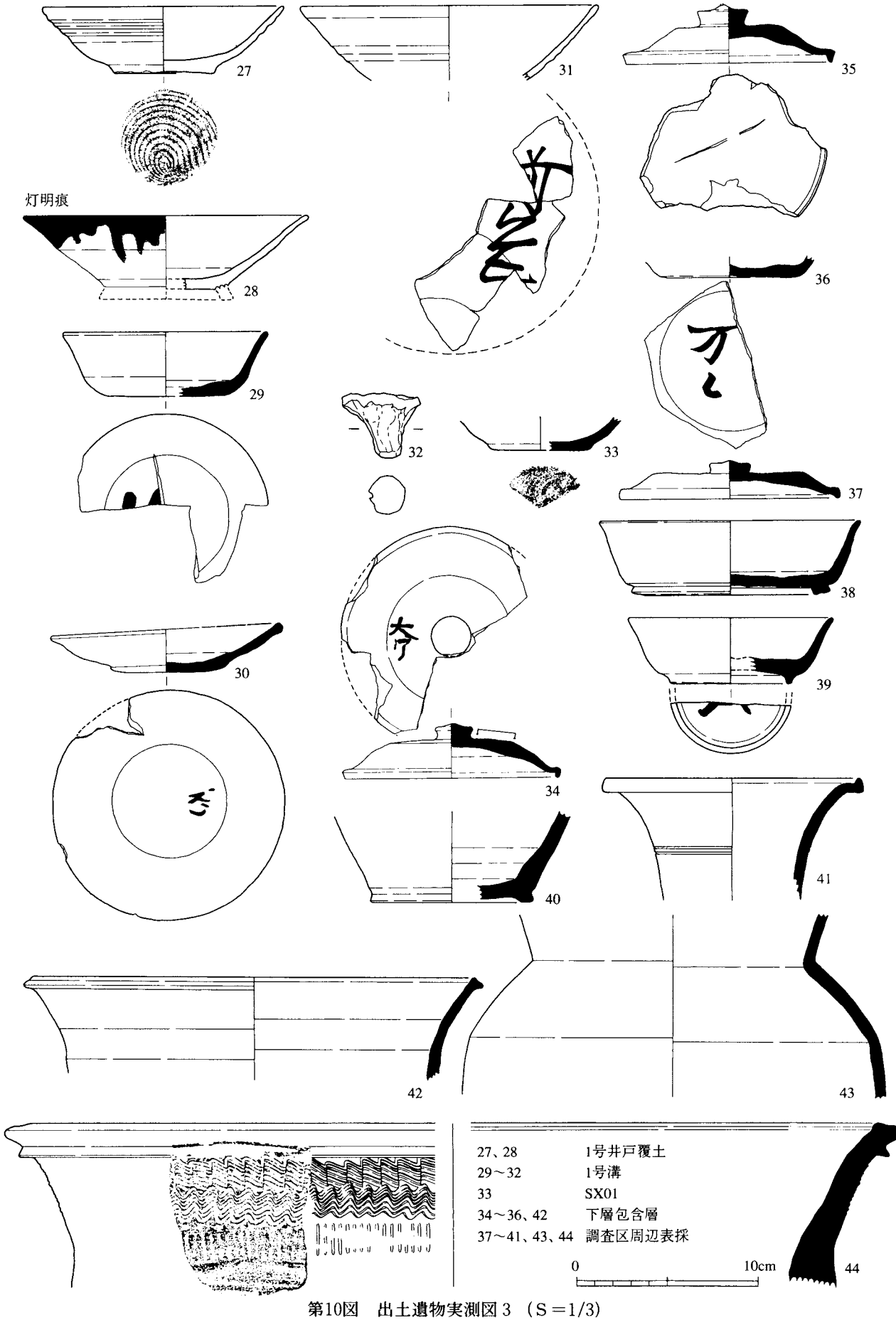
上層ベース土

第７図６、第８図16～26、第11図46が出土している。須恵器は全て鳥屋窯跡群産と考えられる。６は須恵器無台杯で、底部外面はヘラ切り未調整である。底部内面の使用によると考えられる摩滅が認められる。また底部外面には判読できないものの墨書１文字が記される。９世紀前葉に位置付けられる。16は須恵器杯蓋で、器高3.1cm、口径16.8cmを測る。ボタン状の鈕をつけ、天井部外面にナデ調整を加える。口縁端部は丸くおさめる。自然釉の状況からⅡｂ類重ね焼きと考えられる。９世紀後半に位置付けられよう。17は無鈕の須恵器杯蓋で、器高2.0cm、口径15.6cmを測る。器厚は薄く、口縁端部はわずかに肥厚するのみである。天井部外面はヘラ切り後、ナデ調整を加える。10世紀前半に位置付けられる。18は須恵器無台杯で、器高2.9cm 、口径13.2cmを測る。体部は直線的に外傾し、底部外面はヘラ切り未調整のままである。焼成は甘く、底部外面中央部付近に墨書１文字（「得」？）



16～26　上層ベース土

第９図　出土遺物実測図２（Ｓ＝1/3）



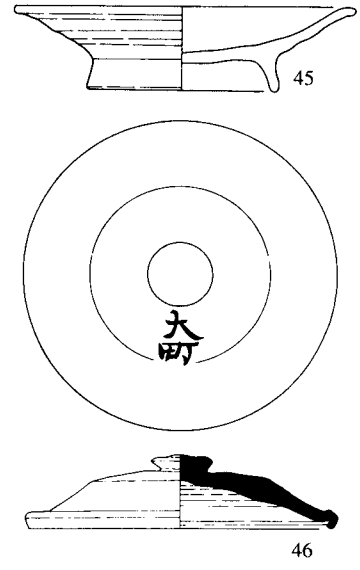
第10図　出土遺物実測図３（S＝1/3）

第２表　出土遺物観察表

図版No	実測No	器　　種	器高(cm)	口径(cm)	胎土分類	色　　調	焼成	備　　考
8－1	35	土師器無台椀	3.9	12.8	D	黄橙色	良　好	
8－2	34	土師器無台椀	3.7	12.6	A	にぶい橙色	良　好	
8－3	33	土師器有台皿	—	12.9	C	黄橙色	良　好	
8－4	36	〃	—	14.7	B	淡橙色	良　好	墨書「宅」
8－5	50	須恵器無台杯	3.0	11.0	D	青灰色	良　好	墨書１文字判読できず
8－6	31	〃	—	—	B	淡灰色	良　好	〃
8－7	49	土師器有台椀	4.7	15.2	D	明橙色	良　好	
8－8	5	〃	4.9	14.0	B	淡黄橙色	良　好	焼成時の黒斑
8－9	48	須恵器鉢	—	21.8	B	淡灰色	やや良	
8－10	4	須恵器杯蓋	—	16.9	C	〃	良　好	重ね焼きⅡｂ類
8－11	20	須恵器有台杯	—	—	B	青灰色	良　好	墨書「大町」
8－12	52	土師器無台椀	—	—	B 類 似	淡橙色	良　好	
8－13	23	土師質土錘	3.8	径　1.4	C	淡黄橙色	良　好	残存重量5.1ｇ
8－14	25	須恵器双耳瓶	—	—	C	にぶい灰色	やや良	
8－15	3	土師質脚	—	—	A 類 似	淡黄橙色	良　好	４本の指を表現
9－16	51	須恵器杯蓋	3.1	16.8	B	青灰色	良　好	重ね焼きⅡｂ類
9－17	44	〃	2.0	15.6	B	にぶい灰色	良　好	無鈕
9－18	39	須恵器無台杯	2.9	13.2	C	淡灰色	やや良	墨書「得」か？
9－19	46	須恵器無台盤	2.7	16.7	B	青灰色	良　好	墨書「大」
9－20	45	〃	1.9	13.5	C	灰色	良　好	外面に火だすき
9－21	41	須恵器無台杯	—	—	B	青灰色	良　好	墨書「稲」
9－22	47	須恵器杯類	—	—	C	淡灰色	良　好	墨書「大町」
9－23	40	〃	—	—	B	〃	良　好	墨書３文字判読できず
9－24	14	黒色土師器有台椀	—	—	D	黄橙色	良　好	
9－25	21	〃	—	—	D	〃	良　好	
9－26	38	土師質土錘	—	径　3.3	C 類 似	淡黄橙色	良　好	残存重量36.5ｇ
10－27	43	土師器無台椀	3.8	13.6	C	明橙色	良　好	
10－28	42	土師器有台椀	4.2～	15.7	C	にぶい淡黄色	良　好	外面灯明痕
10－29	30	須恵器無台杯	3.6	11.2	B	淡灰色	良　好	墨書判読できず
10－30	24	須恵器無台Ⅲ	2.6	12.9	A	淡灰色	良　好	墨書１文字判読できず
10－31	22	土師器有台椀	—	16.5	C	茶橙色	良　好	墨書「前宅」
10－32	32	製塩土器	—	—	砂粒多い	赤橙色	良　好	尖底
10－33	33	須恵器無台杯	—	—	A	淡灰色	やや良	底部外面糸きり
10－34	1	須恵器杯蓋	3.1	12.0	B	淡灰色	良　好	墨書「大町」
10－35	2	〃	3.3	11.4	B	青灰色	良　好	正位に焼成
10－36	19	須恵器無台杯	—	—	D	青灰色	良　好	墨書「万呂」
10－37	55	須恵器杯蓋	2.2	12.0	C	淡灰色	良　好	二次焼成受ける
10－38	26	須恵器有台杯	4.2	14.3	B	淡灰色	良　好	底部外面回転ケズリ調整
10－39	27	〃	3.7	11.2	C	青灰色	良　好	墨書判読できず
10－40	53	須恵器瓶類	—	—	C	青灰色	良　好	断面明橙色
10－41	28	〃	—	14.0	C	淡灰色	良　好	自然釉付着
10－42	54	〃	—	24.7	B	淡灰色	良　好	
10－43	37	〃	—	—	C	青灰色	良　好	
10－44	16	須恵器甕	—	70～	C	淡灰色	良　好	外面２段の波状文

胎土分類　A－石英、長石、海面骨片が多く混じる。　B－石英、長石が多く混じる。
C－石英細粒子、長石細粒子が混じる。　D－石英細粒子、長石細粒子、海面骨片がまじる。

が記される。9世紀後半に位置付けられる。19は須恵器無台盤で、器高2.7cm、口径16.7cmを測る。体部と底部の屈曲は明瞭で、体部は直線的に外傾する。また底部内外面に不整方向ナデ調整が施される。底部外面中央部には大きな文字で「大」と墨書される。9世紀前葉に位置付けられる。20も須恵器無台盤で、器高1.9cm、口径13.5cmを測る。体部は屈曲しながら外側に開く。底部内面は若干摩滅している。19より後出的な形態を呈する。21～23は須恵器無台杯底部と考えられる。いずれも内面に使用と考えられる摩滅が、また外面に墨書が記される。21は中央部に「稲」の文字が記される。22も中央部に大きく「大町」と記される。23の中央部付近には3文字が確認できるが、判読できない。最後の文字は「長」の可能性をもつ。24、25は内面黒色土師器有台椀である。24の外展する台部は細長くのび、体部はあまり外傾せずにたちあがる。底部外面にかすかに墨痕が認められることから墨書土器と考えられるが、文字は判読できない。25の体部下端の面取りをしっかりとする。ともに台径8.4cmを測り、10世紀前半に位置付けられよう。26は淡黄橙色を呈した土師質土錘で、孔径1.5cm、残存重量26.5gを測る。器面は滑らかに仕上げ、胎土中には砂粒をあまり含まない。46は須恵器杯蓋で、器高3.0cm、口径11.9cmを測る。天井部外面はナデ調整を加え、口縁端部は内側に屈曲する。天井部外面に「大町」と墨書される。また内面にもかすかに墨痕が残る。9世紀中葉に位置付けられる。



第11図　出土遺物実測図（S＝1/3）

なお図化しなかったが、上記の他に墨書土器14点が出土している。内訳は須恵器無台杯底部外面9点、同底部内面1点、同体部外面1点、須恵器有台杯底部外面1点、土師器椀体部内面1点、内面黒色土師器有台椀底部外面1点となる。写真図版9－bの須恵器無台杯底部外面の文字が「ネ口」の可能性をもつほかは、かすかに墨痕が残るのみである。また図版9－gの須恵器無台杯底部内面には朱墨痕が残る。

下層包含層

第10図34～36、42が出している。34、35は須恵器杯蓋で、鳥屋窯跡群産と考えられる。34は器高3.1cm、口径12.0cmを測る。口縁基部に平坦面を有し、端部は下方に嘴状に短くのびる。天井部外面は回転ケズリ調整が認められ、肩部に「大町」と墨書が記される。重ね焼きの状況は不明である。9世紀初頭～前葉に位置付けられる。35は器高3.3cm、口径11.4cmを測る。丁寧につくられた鈕をつける他、各部の面取りもしっかりしている。天井部内面中央部にヘラ記号が認められる。正位で堅緻に焼き上げられ、胎土中に黒色粒を含む。9世紀前半か。36は須恵器無台杯で底径7.8cmを測る。底部内面には使用による摩滅が、外面中央部付近には「万呂」と墨書される。9世紀前葉に位置付けられよう。42は薄手の瓶類口縁部で、口径24.7cmを測る。口縁部は外側に肥厚する。

調査区周辺表面採取

第10図37～41、43、44は須恵器で鳥屋窯跡群産と考えられる。37は焼成のあまい杯蓋で、器高2.2cm、口径12.0cmを測り、天井部外面にナデ調整を加える。ボタン状の鈕を付し、肩部は明瞭に屈曲する。天井部内面に使用による摩滅が認められる。9世紀末～10世紀初頭に位置付けられる。38、39は有台杯である。38は器高4.2cm、口径14.3cmを測り、底部内面に不整方向ナデ調整、外側に回転ケズリ調整を加える。低い台部は外展気味につく。8世紀末～9世紀初頭に位置付けられる。39は器高3.9cm、口径11.2cmを測る。体部は下半で丸味を有し、上半は外反する。底部外面に判読できないものの墨書文字が認められ、内面に煤が付着する。38とほぼ同時期と思われる。41は瓶類口縁部で、口径14.0cmを測る。口縁端部は上方にのび、下半に2条の沈線を施す。43は薄手の瓶類胴部で、青灰色を呈する。44は甕口縁部で、口径70cm以上を測る。口縁部外面に1条の突帯、2単位の波状文で加飾する。また図化しなかったが図版9－aの須恵器杯蓋肩部外面には「廣成」と判読できる墨書が記される。9世紀前半に位置付けられ、鳥屋窯跡群産と考えられる。口径15.0cmを測る。

b．木　製　品

井戸枠

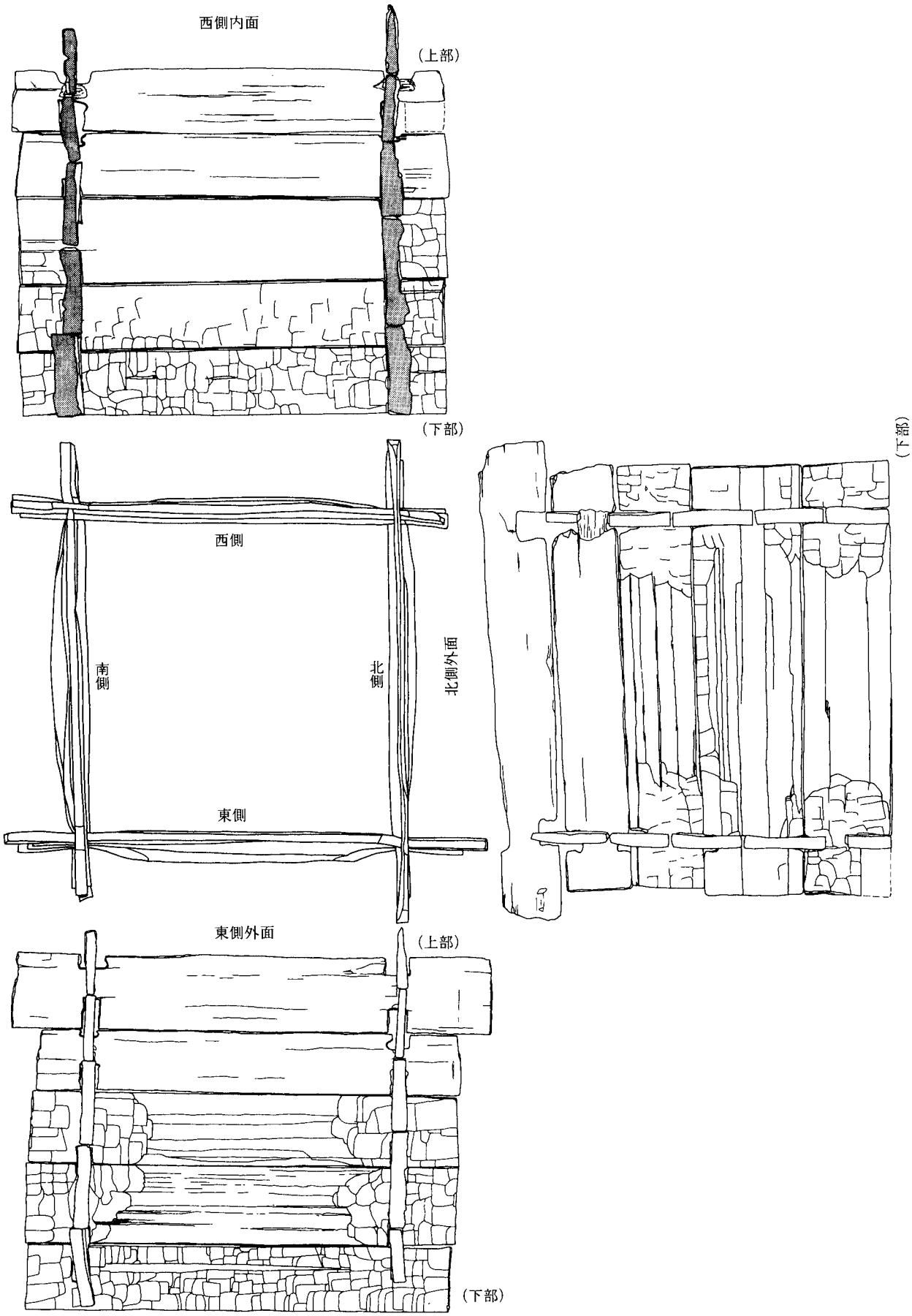
第13～19図の21枚がある。各横板は取り上げ時に、北・南・東側の横板は上部より１→５と、西側は０→５と順にナンバーをふっているので、それに従って記述する。例えば東側－２は、東側の井戸枠・上より２段目（下より４段目）の横板となる。

各横板は両端をかなり粗く切断している。２～５段目の中央部の長さは、125～133cm（主体128cm前後）、幅18～25cm（最大幅31.2cm）とかなり規格化されている。また上部より１段目は北側－１で142.6cm、東側－１で141.6cmを測るように総じて長く、２～５段目と明らかに規格が異なる。このことから１段目は地上部分に出ていた可能性をもつ。また横板の厚さは中央部で2.7cm～７cm弱を測り、材の劣化を差し引いても、上段に向かうほど薄くなる傾向をもつ。横板の加工は木目方向にそって行っておって、内側は平滑に、また外側は仕口部分のみ薄くする。その加工は比較的粗いものといえ、加工具の刃先幅は12～14cmに復元できる。また西側－４の外面の仕口部分は、当初の木目平行方向の成形だけでは組むことができなかったためか、さらに円形状に加工を加えて厚さを減じている。

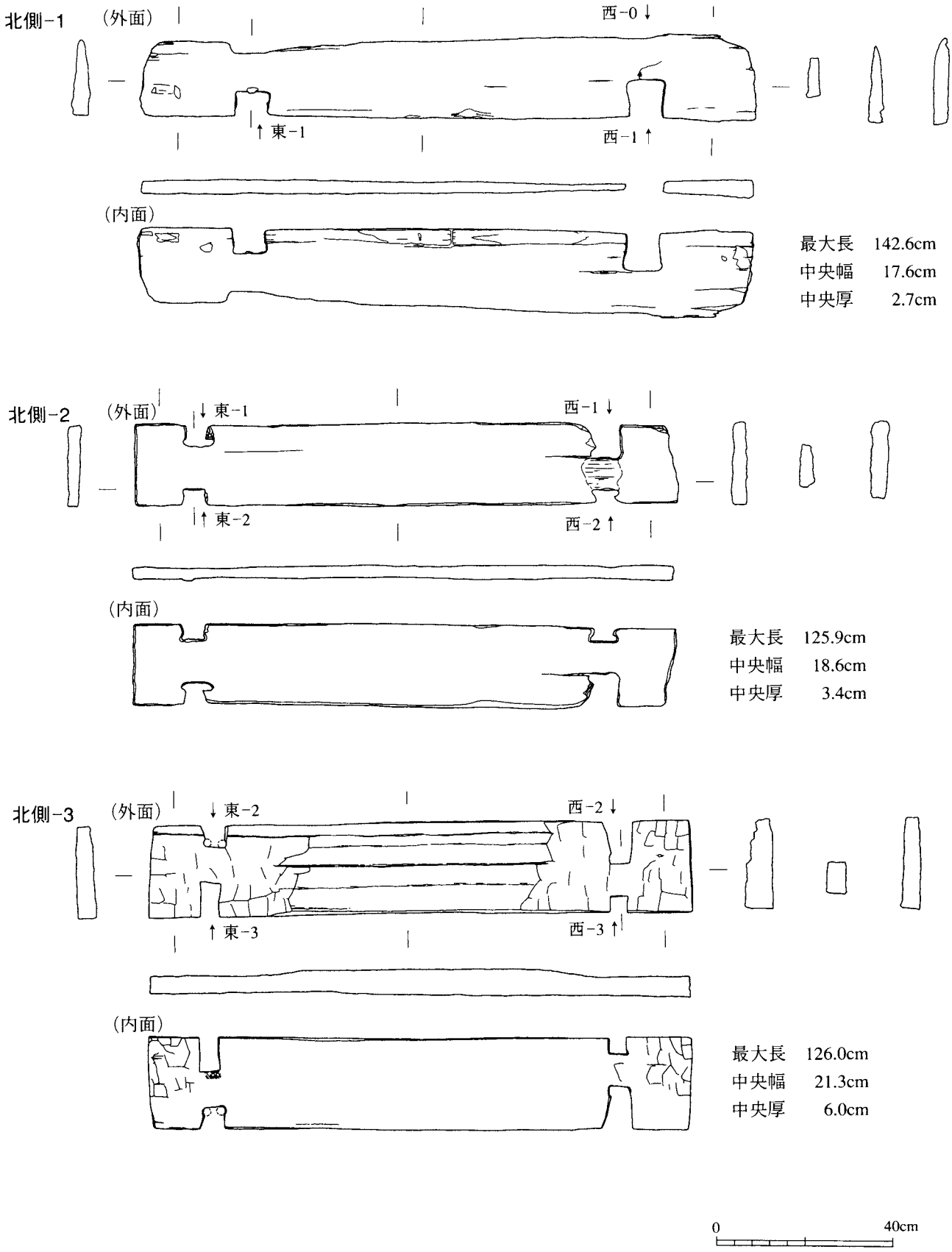
仕口は上下で深さを違わせ、一つの横板の一端を浅くした場合、もう一端は深くする。ただし明確な法則性は認めがたい。各横板が基本的に平面長方形を呈するものの、左右両端の幅が必ずしもは一定でないことから、組み上げた時に各横板の据え付けが水平になるように、その都度深さを調整したと考えるほうが妥当であろう。仕口のつくり方は、切断のみでつくる場合と、切断のおよぶ深さに径１～２cmの孔を穿った後に切断を加える場合とに分けられる。後者に属する横板としては、北側－１～３、東側－１、２、南側－１～３、西側－１、２があげられ、井戸枠上方に集中している。その使用を意図的に異ならせた可能性が高い。なお横板は転用材の痕跡はなく、樹種同定は実施していないものの広葉樹と考えられる。

その他

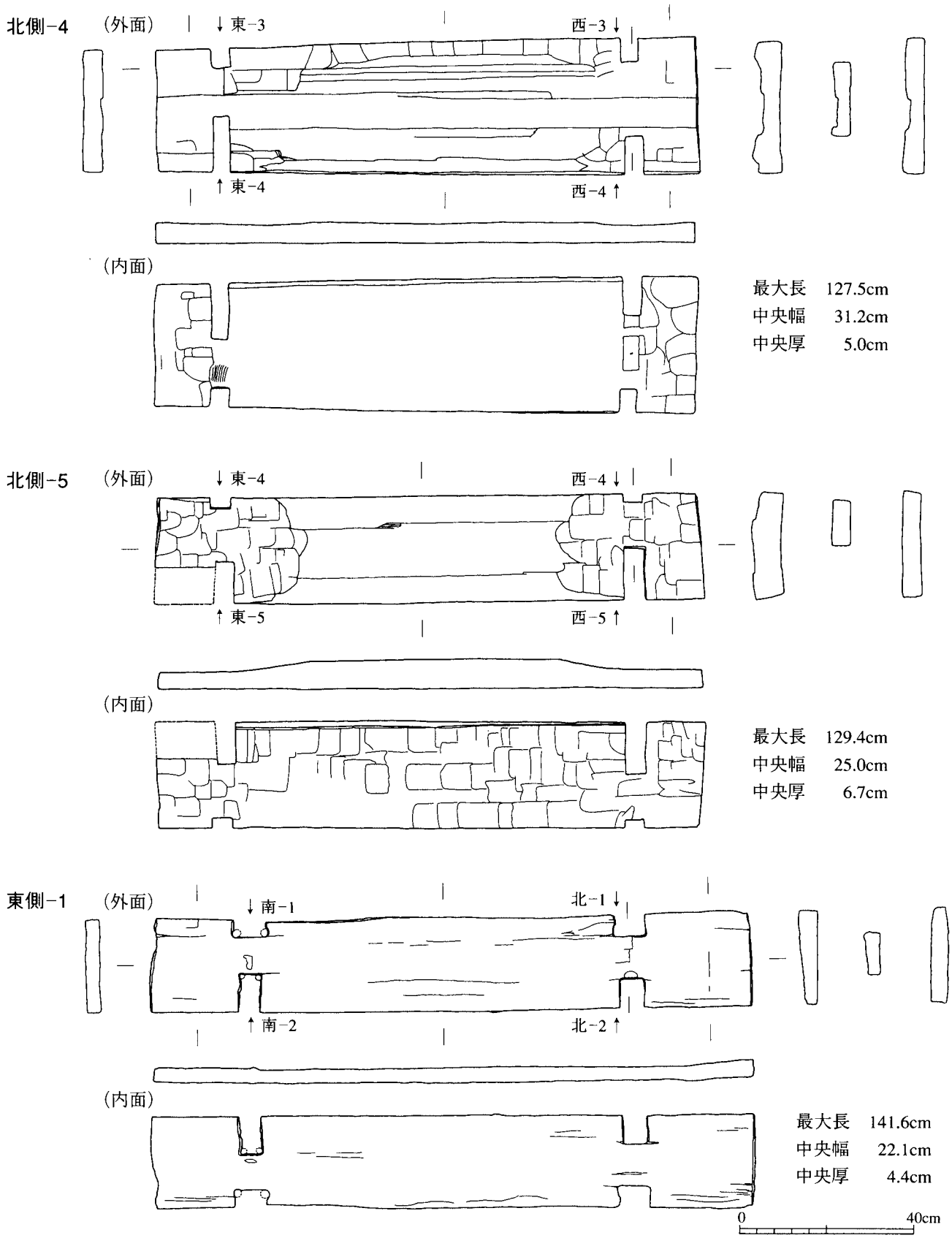
第20～22図にのせた木製品は、１号井戸覆土第４層より出している。１は箸状木製品で残存長15.6cm、径0.7cmを測る。図の上端は使用によると考えられる摩耗が認められる。２、３は方形の加工材である。２で長さ6.2cm、幅4.8cm、厚さ3.3cmを、３で長さ14.9cm、幅8.4cm、厚さ5.4cmを測る。井戸枠材の仕口の切り離された部分の可能性が高い。４は板材で、長さ46.1cm、幅7.9cm、厚さ3.4cmを測る。５は井戸枠材の一部と考えられる。残存長27.6cm、幅16.0cm、厚さ2.8cmを測り、仕口の一部が認められる。６も同様な加工材と考えられる。残存長16.2cm、幅17.8cm、厚さ5.3cmを測る。７は長さ69.9cm、幅16.4cm、厚さ5.8cmを測る加工材である。スクリーントーン表示部分は、他の材と接していたため変色する。８も井戸枠材と考えられる。残存長63.5cm、幅11.2cm、厚さ1.9cmを測る。９は長方形を呈した板材で、残存長42.7cm、幅17.8cm、厚さ2.9cmを測る。スクリーントーン表示部分は黒褐色に変色、他の材と接していたと考えられる。また破断部分中央寄りに孔を穿つ。10は腐食の進んだ板材である。残存長28.3cm、残存幅7.9cm、最大厚3.3cmを測る。11は井戸枠材の仕口の切り離された部分と考えられる。長さ11.9cm、幅7.4cm、厚さ3.5cmを測る。



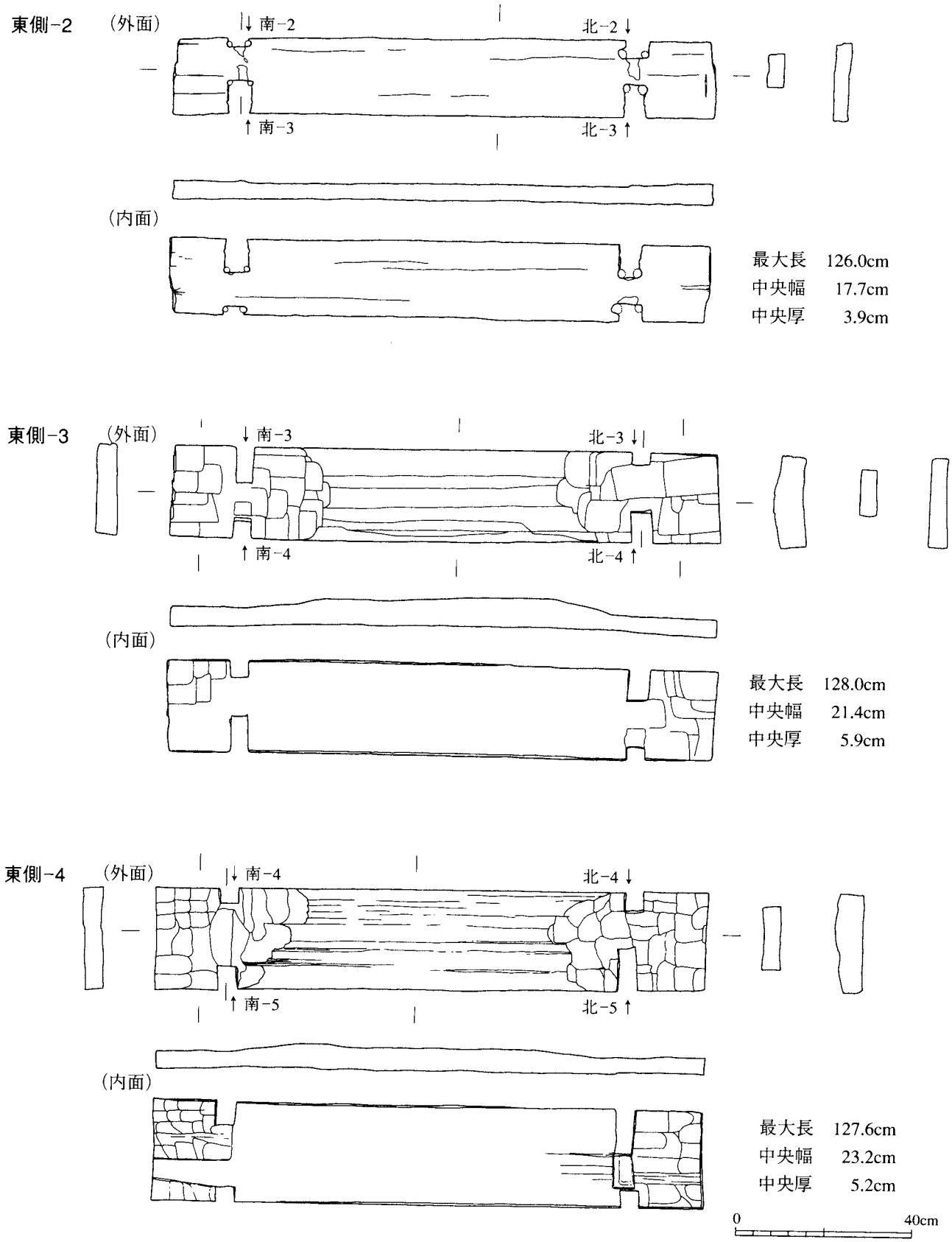
第12図　1号井戸実測図（S＝1/15）



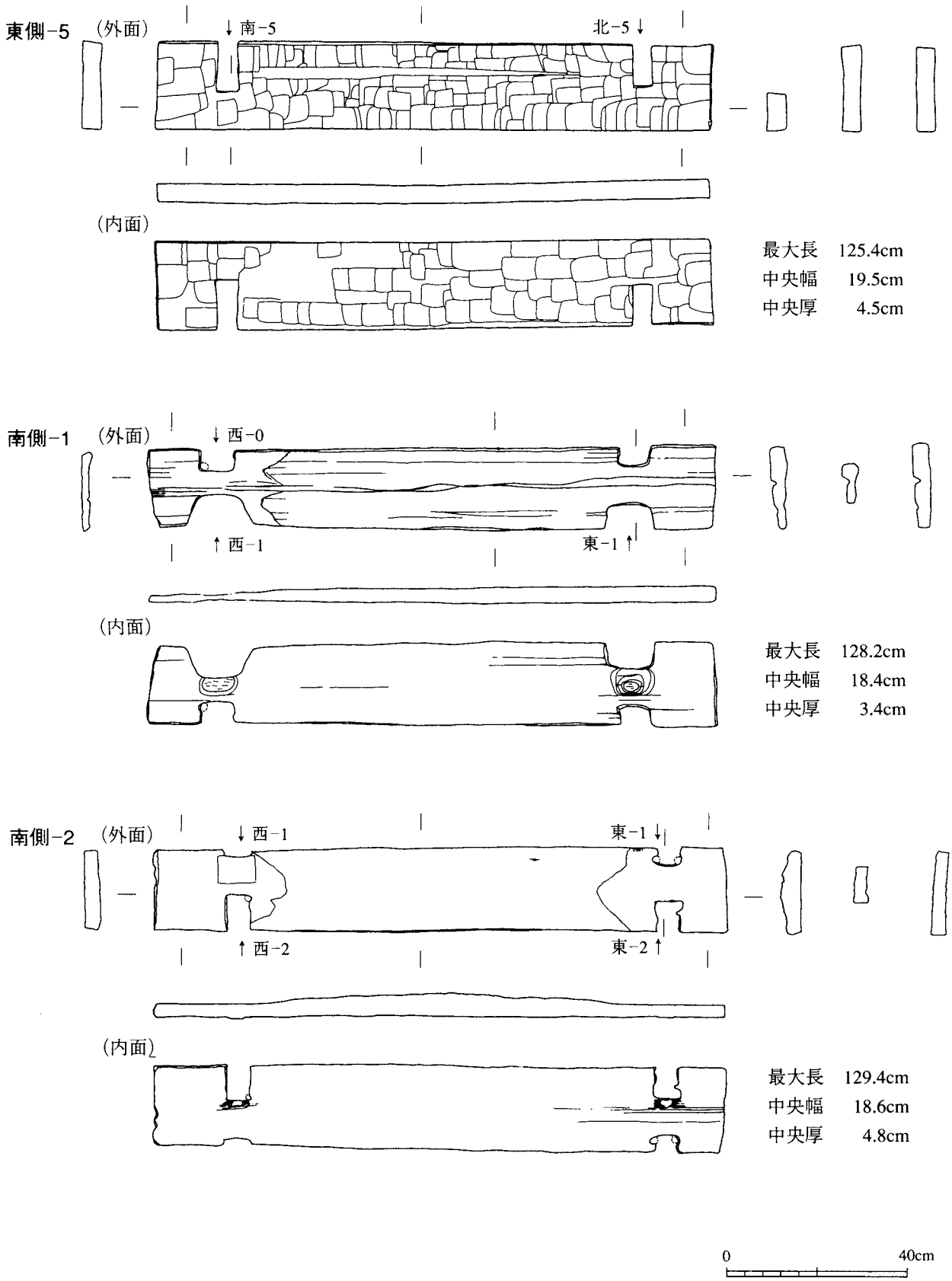
第13図　1号井戸側材1（S＝1/12）



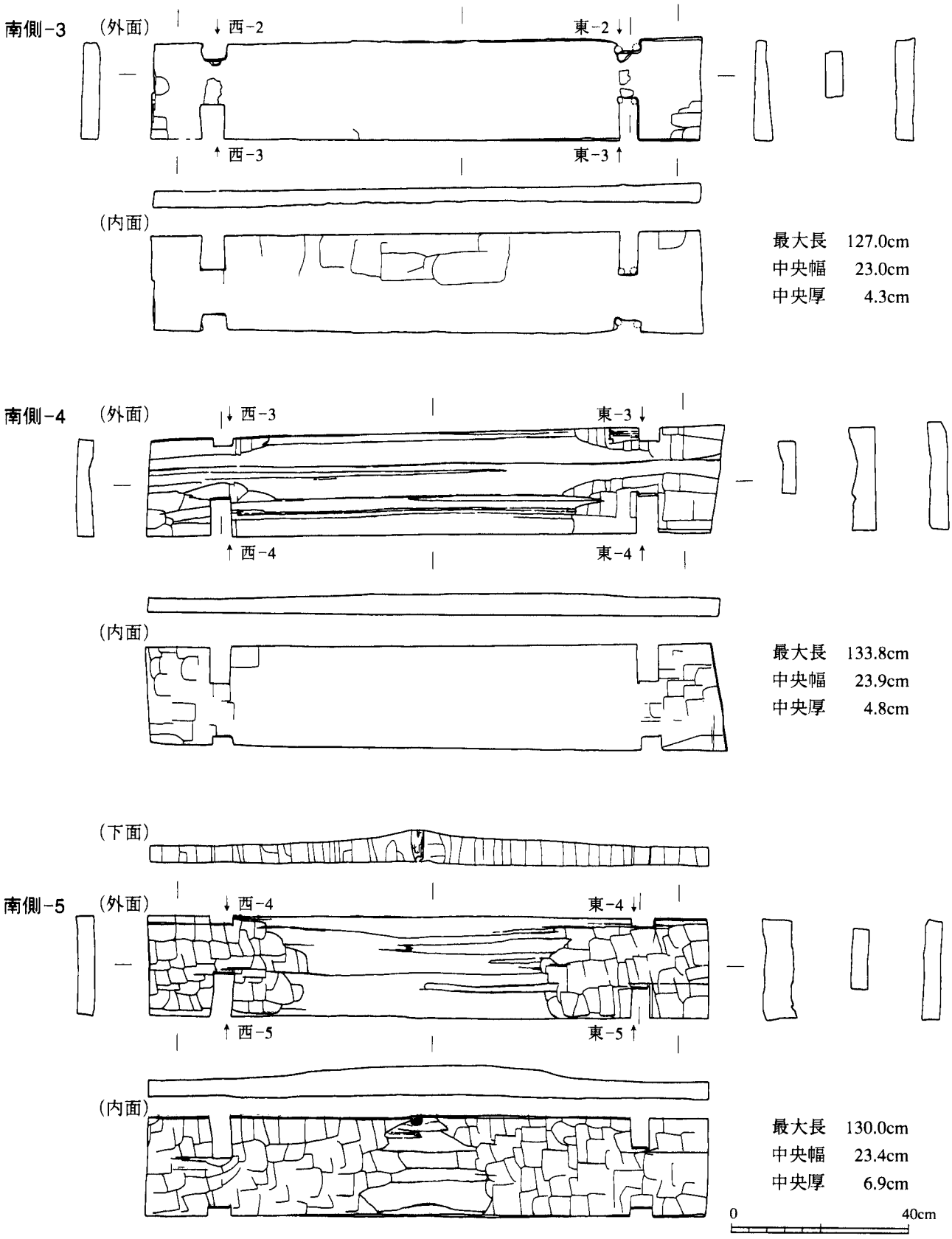
第14図　1号井戸側材実測図2（S＝1/12）



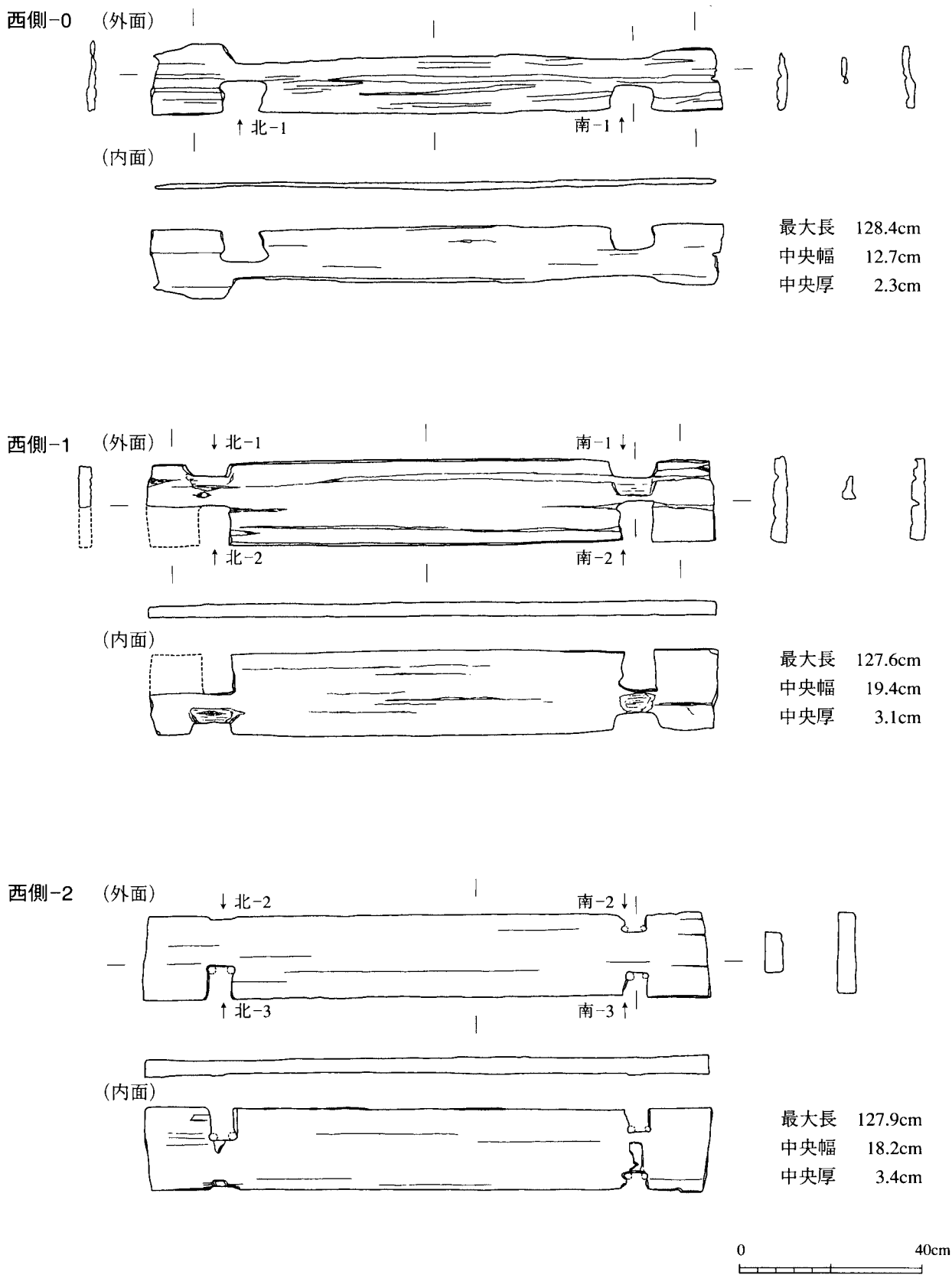
第15図　1号井戸側材実測図3（S＝1/12）



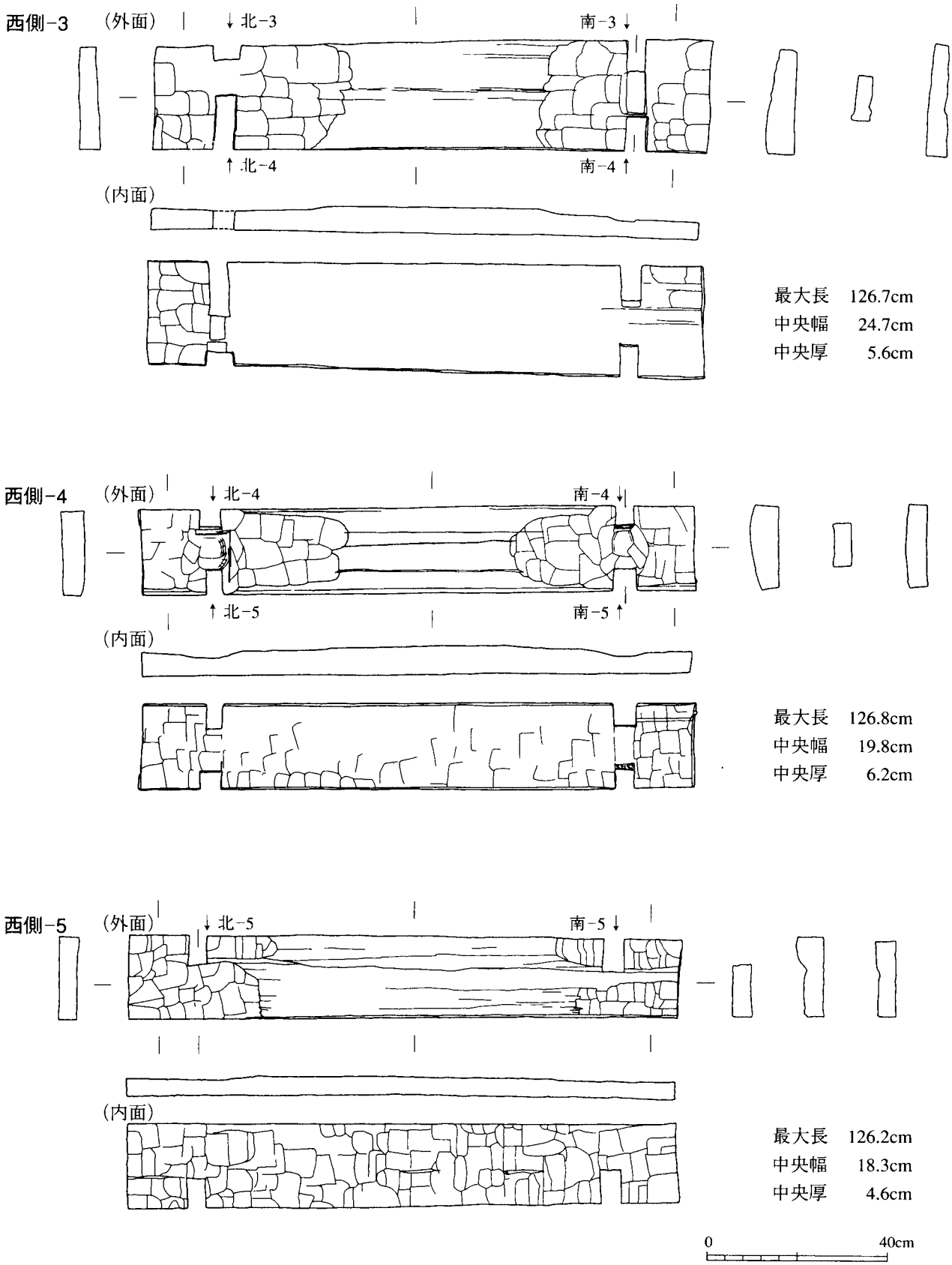
第16図　1号井戸側材実測図4 (S＝1/12)



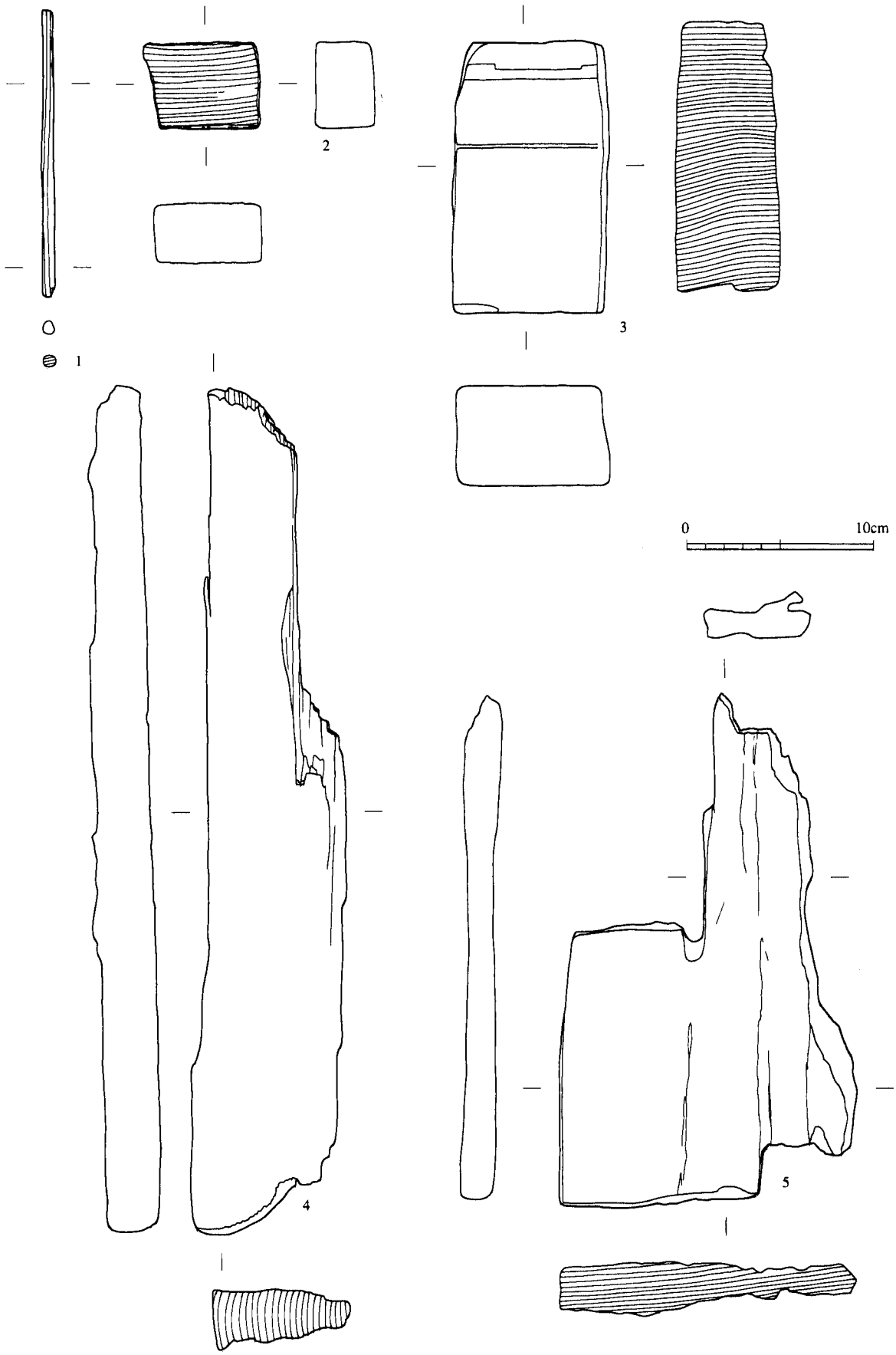
第17図　1号井戸側材実測図5（S＝1/12）



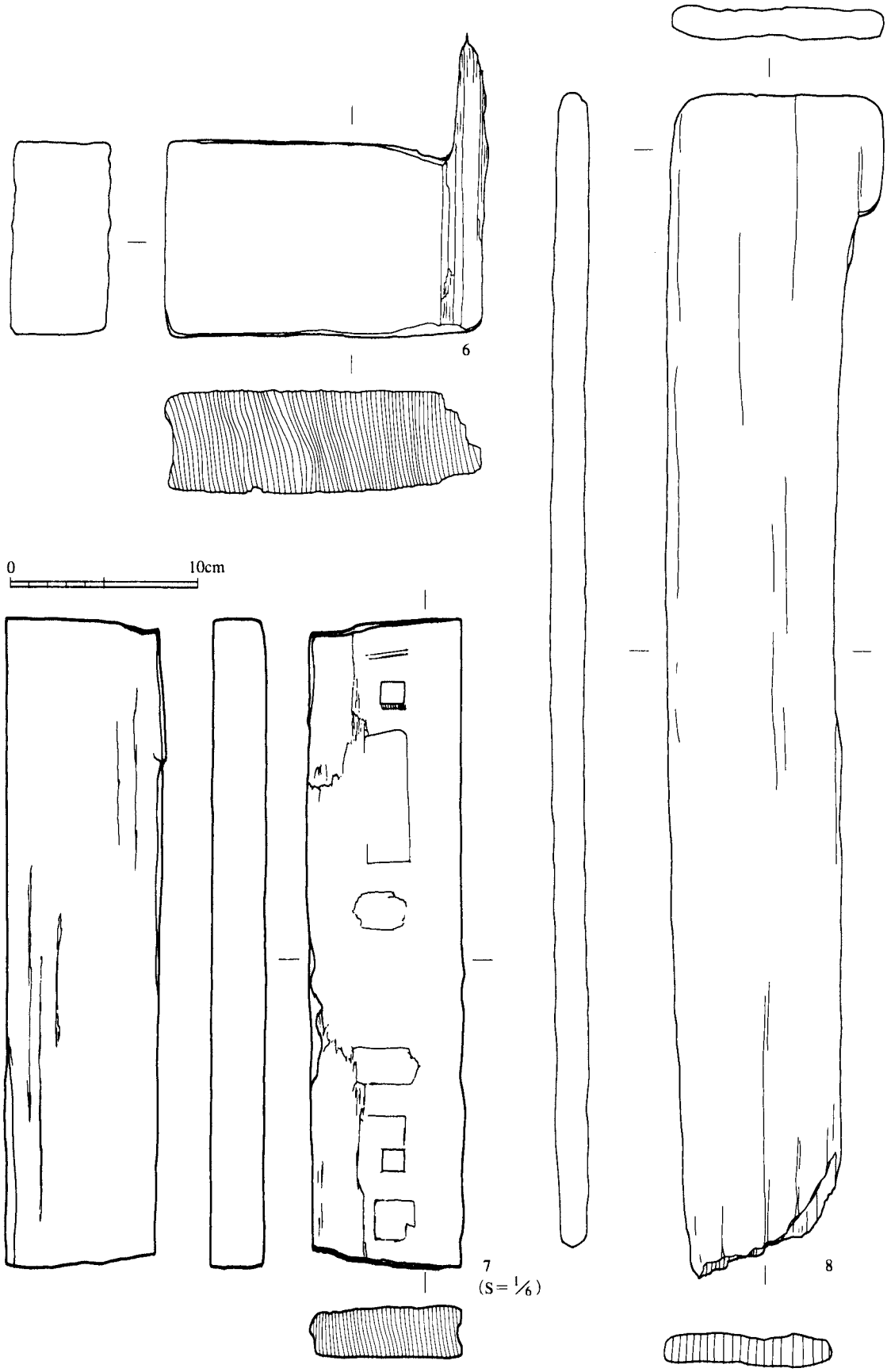
第18図　1号井戸側材実測図6（S＝1/12）



第19図　1号井戸側材実測図7（S＝1/12）



第20図　1号井戸第4層出土木製品実測図1（S＝1/3）



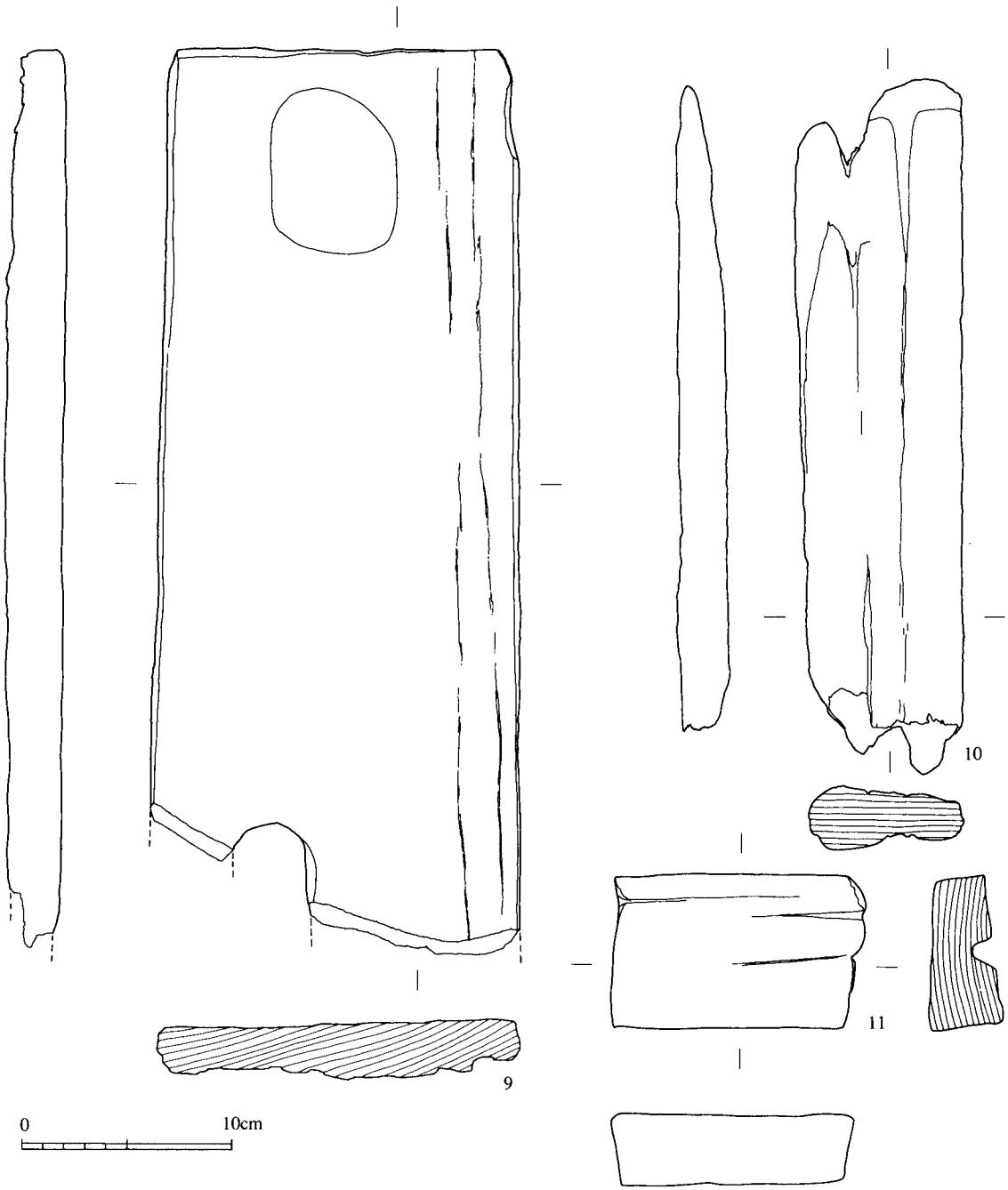
第21図　1号井戸第4層出土木製品実測図2（S＝1/3、7のみS＝1/6）

第5節　小　　結

今回の調査は小規模調査のため、遺跡の性格に関して言及できる部分は少ない。以下に確認できる点や問題点を記すことで、小結としたい。

(1)邑知潟・長曽川に隣接した低地に営まれた奈良時代後半～平安時代前期の比較的小規模な遺跡である。周囲の他遺跡の状況からみて、かなり特異な立地といえる。内水面交通との関連が指摘可能である。

(2)検出した遺構は少ないものの、一定の方向性をもつ溝と、一般的集落ではあまり確認できない相欠き仕口横板組みの井戸が存在する。



第22図　1号井戸出土木製品実測図3（S＝1/3）

(3)墨書土器の出土比率が比較的高い。その中には「宅」、「前宅」など公的施設を想像させる文字が含まれる。また「万呂」、「稲」などの人名と考えられる墨書も存在する。都合4点出土した「大町」の墨書が地名を記したものとの前提に立てば、現存する大町の地名は少なくとも9世紀代には成立していた可能性をもつ。

(4)出土遺物には土師質脚や朱墨の残る須恵器片など特殊なものを含む。また計量等は実施していないが、土師器供膳具（内黒土師器供膳具を含む）の割合が比較的高いと考えられる。

(5)以上のことから、本調査区は内水面交通に関係する何らかの公的施設の一部の可能性をもつ。また、その盛期は10世紀前半代にあると考えられる。

引用参考文献

黒崎　直　1995「藤原京の井戸」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会

北野博司　1988「第3節　古代」『辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター

第３章　小金森ヘイナイメ(Ａ・Ｂ)遺跡

第１節　調査の概要

小金森ヘイナイメＡ・Ｂ遺跡は、今回の県営圃場整備事業余喜地区に伴って実施された事前の試掘で確認されたもので、背後（東側）の碁石ケ峰山地を開析した地獄谷川の形成する小扇状地上に立地した遺跡である。扇頂部域にあたる両遺跡は極めて隣接して所在しするが、明らかな時代的隔たりをもっている。ヘイナイメＡ遺跡（古代）では、現地獄谷川にちかい自然堤防上となるか比較的安定した高所にあって南北側で約110ｍ・東西側で約80ｍの区域が遺跡の範囲と推定されている。一方、ヘイナイメＢ遺跡（縄文）では当該期基盤面は北東方から南西方への傾斜地であるようにみうけられ、試掘調査時では鹿島バイパス建設予定地を若干越える西方（第24図）でも散発的に土器片の採取があったが、遺跡がのるような面的基盤は確認できず、むしろ急傾斜地ないしは窪地状地形地に急激な土砂の堆積が推測される不整脈の土砂塊群の競合的な堆積によって構成されているので、傾斜下手側にあたるこの地区までの、遺跡（一般的にいう遺跡）の延びはないものと判断でき、ほぼ上記バイパス予定地の東側に所在するものとなるが、この圃場整備地区外となる東側と南端側の延びは確認できていない。西端側へは、当該発掘区（排水路部分）より西方約80ｍまでの範囲が分布域として把握されてきている。

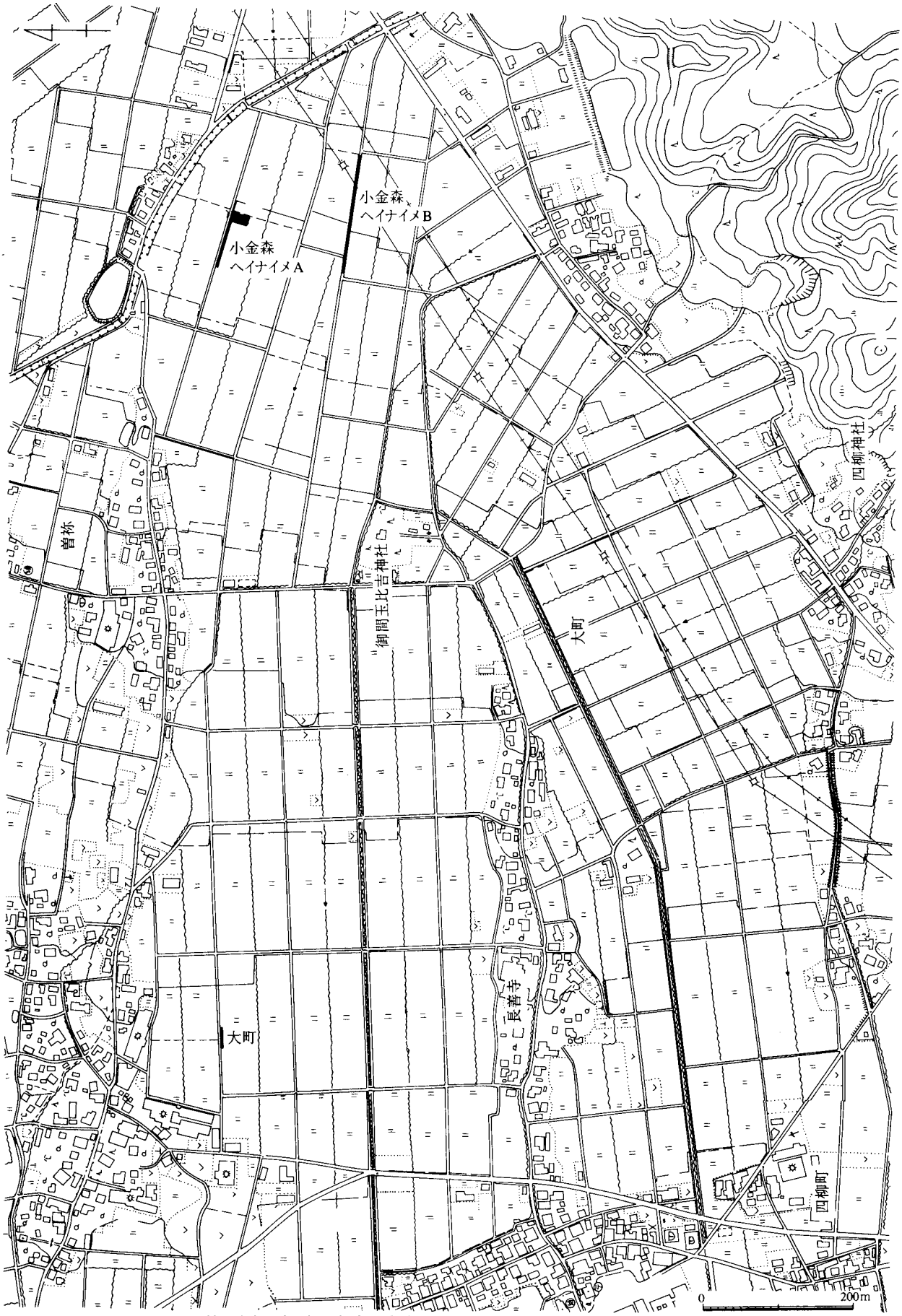
発掘調査はいずれも、盛土工法などによる遺跡の保存処置が困難となる部分を対象とし、圃場整備事業ではほぼ用排水路部分に限定できうるケースが多いが、ヘイナイメＡ（古代）遺跡では南東隅に当たる一部が、一筆区画の拡大と地形形質上の制約とも重なって、影響を蒙ることが調査途中段階（工事実施設計図との照応）で判明したため、急遽、石川県羽咋土地改良事務所に連絡し、協議の結果当該部分を今調査に含めることで合意にいたった。

小扇状地形はそれなりの傾斜勾配をもっており、従前よりの水田など平坦地の確保には山手側を削平して谷側へ盛り出す造成がとられて来ており、上記当該地もまたこうした形質のなかにあって、検討された素材としては当該一筆区画の客土嵩上げによる調査回避方策と発掘調査実施の場合との、費用・期間・事業面などからくる相互的・相対的な省力的有効性の検討であった。

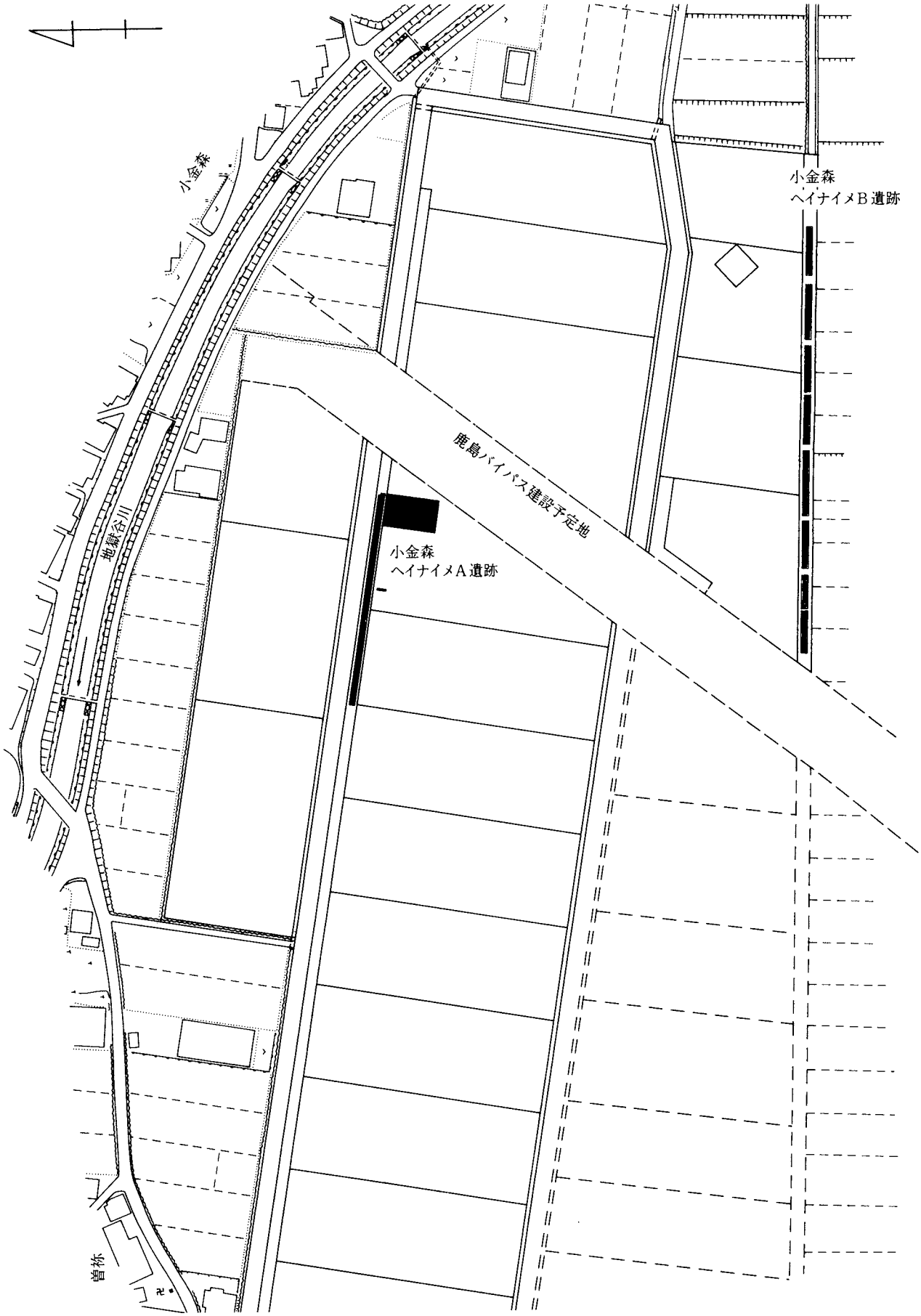
事業（工事）面の課題としては、隣接するバイパス（予定地）の計画路面高との関係・用水路勾配と取水に係わる問題点が抽出され、発掘調査とする場合では主たる部分として以後に計画されている、別地区の各圃場整備事業とに係わる年間的調査行程予定の変更手続きであり、遺跡自体上では東南端辺の小区域であり、また、従前の水田圃場開削によって幾分かの削平も伴っている区画であったため、大幅な変更に至らない現実的方策として発掘調査で対処することに決した。

従って、ヘイナイメＡ遺跡では、排水路工事に係わる幅約２ｍ×延長約80ｍと、面工事に係わる幅約11.5ｍ×20ｍの長方形区画の計約390㎡の調査となった。

ヘイナイメＢ遺跡では、当該圃場整備地区外（南側）との境界にある現排水路を北側へ３ｍ平行移設される部分に係わる幅約２ｍ×延長180ｍを対象として実施したが、東端（山手側）の約24ｍ区間は重機掘削直後に壁体の崩落が起こり、機能中の現況排水路および地区外水田への波及も危惧される状況となったため、調査を断念して即埋め戻しを行った。この東端（180ｍの地点）の現地表面からの深度は約2.3ｍで暗茶褐色の縄文時代晩期の遺物を含む層が約0.3ｍ厚前後で続いており、掘削時に露呈した土器片の何点かを採集したのみとなった。よって、不充分ながらの一応の発掘および図化した範囲は、バイパス用地（界杭）から東側へ６ｍを０点として、東側へ155ｍの地点までとなった。



第23図　大町Ｃ遺跡，小金森ヘイナイメＡ・Ｂ遺跡発掘地点



第24図　小金森ヘイナイメA・B遺跡発掘地点（S＝1/500）

第２節　ヘイナイメ(A)遺跡の遺構と遺物

(1)　調査区の概要

調査区は当初、上述のとおり排水路（１号）部分がその対象となって着手しており、北側より10ｍ間隔で南側へ第１区～第８区と設定した。次いで、第１区横並びの水田区画が新施工一筆区画中の最高所にあって、面工事により影響が及ぶために調査対象となった発掘区画を、第１区南（調査）区として一括呼称（区画）とした。また、第４区中の34.5ｍ地点の南側に小トレンチを設けており、これを第４区南拡張区と呼ぶことにした。

自然地形的には北東方から南西方への地山面の緩傾斜があり、第１区～第１区南地区にまたがる南北方の直線溝（近世か近現代）がほぼ等高（第25図）線上にある溝で、こうした方向を採る比較的に新らしい溝は３区・４区・６区・８区でも存在しており、旧地形に即したかあるいはうまく合致できたためか、南北方のほ場？の旧区画の状況を提示しているものと想われる。なお、排水路部分調査区での状況では現状水田区画ごとに段落差をとって、それぞれに平坦化された様相が顕著となっていて、地山面では区画変換点ごとに0.2ｍ前後の段差（削平）となっていた。

出土遺物は発掘面積に比例したものかそう多くは無いが、第１区南調査区で散布的状況にあって包含層出土として取り上げた一群と、４区東端から同南拡張区を経て５区東端へと繋がるとみられる溝中内および、これに囲繞された範囲内とにほぼ集約できる出土状況があった。第１区南調査区では黄灰色砂質系土が地山面を構成し、やや濁りのあるものを極力発掘したがいずれも浅く、建物・土坑などと明示できるものは発見できなかった。第２区西端～第３区東端では地山土が幾分削平を受け、現耕作土即下に攪拌土が薄く乗った下部より深みのある小土坑が群在して検出された。第４区～第５区では上記の隅円方形状に巡る溝があり、この中央部付近には焼土と炭粒を含む灰層が残っていた。この層を整理した結果、下部より炉の残欠ととれる焼跡が出現し、溝と一体をなすひとつの遺構であることが判った。また、この遺構に隣接した南側に掘立柱建物跡とみられる柱穴列の一部が検出され、柱根の残るものもあった。この残根の最も太い底付近の径で約13cm程度であり、比較的軽易な建物であったように想われる。６区～８区では小溝などがあるが不鮮明で、時期も含めてよく判らなかった。

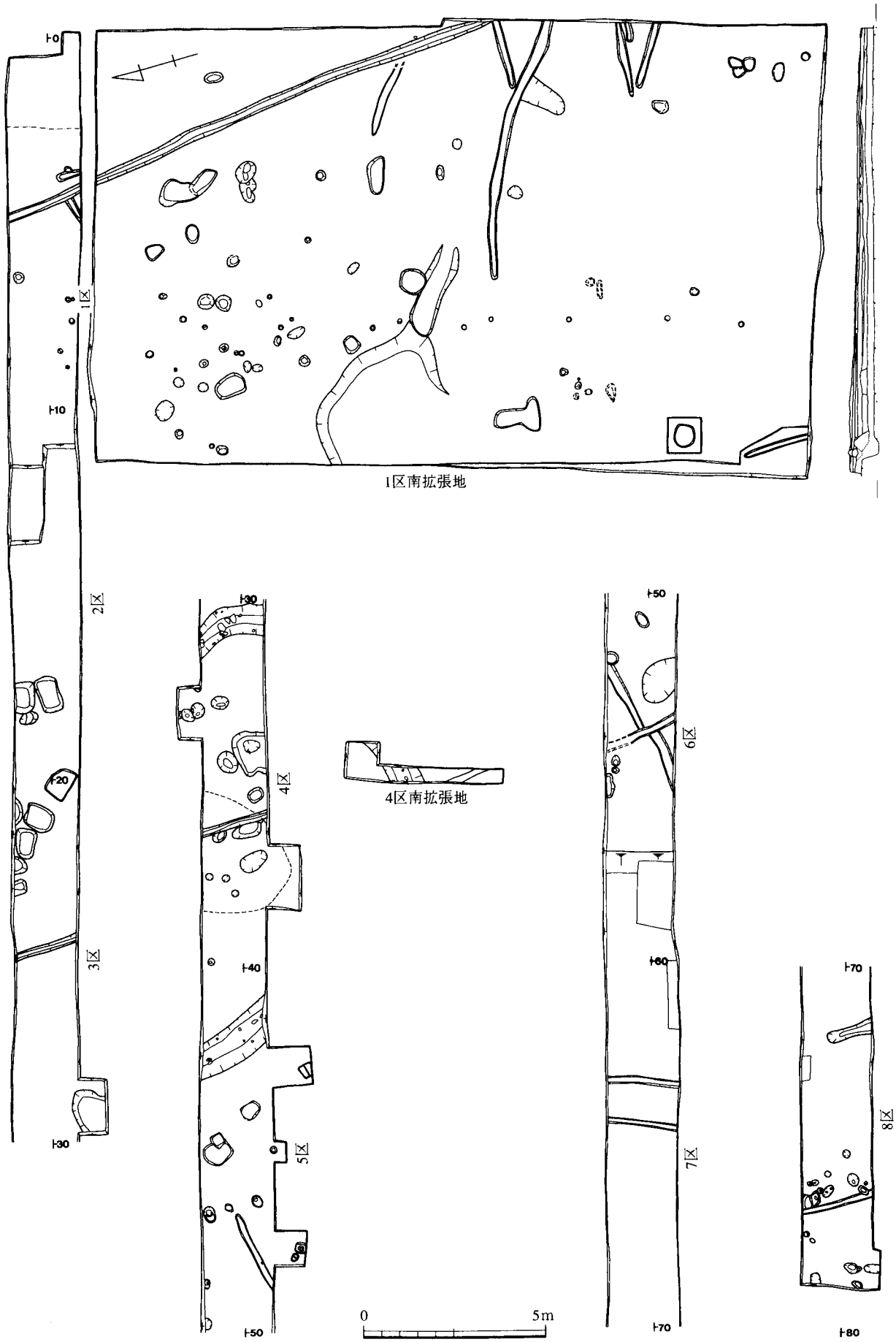
(2)　遺構と遺物

土坑（第28図）

第２区で群集的な状況に在った小土坑の８坑で、いずれも多分にしっかりとした掘り込みがある。第１区西端より－20cm強の削平による段差があり、連続した層序的な結び付きが追えない個別的な状況にあり、第28図中の第12層は灰色砂質土と暗灰色粘質土との混合土であったため、その下の灰色粗粒砂面まで当初に掘り下げてしまい、ここからの遺構検出と発掘になってしまった。年代的には伴出遺物が無く不明であるが、南北方直線溝には先行している。

掘立柱建物（第29図）

第５図で検出した柱列の一部であるが、東西方２間分・南北方２間分の、建物北東角部分のようである。この建物は一部上述したが、周溝で区画された炉跡（施設）に隣接してあり、隅円長方形をなすと想われるこの施設体の方位性にも合致があるため併設状況に在った建物と推測される。そうであるとした場合、桁行を南北方（N-12°-W）にとる小建物（２間×３間ないし４間程度）と考えられ、径約13cmの円柱（残根）や柱間間隔の不揃い的様相などからも、住居跡と採るよりも炉作業に連関した作業小屋ないしは資材小屋などが予想される。



第25図　ヘイナイメA遺跡発掘区実測図

炉施設（第26図・第27図）

炉は、末底基部の残欠となるが、淡黄褐色砂質系地山土に極浅い隅円長方形（約65cm×45cm）の掘り込みがあり、ここに拳大の小円礫を敷き詰めて粘土を被覆して押圧を加えた（礫は地山土に一部くい込み、礫間の隙間に粘土の充填と被覆）その上面部分が黄橙色化した被熱部分となっており、次いで、その上部には灰白色粘土（非熱変色）があり、これに埋め込まれたように再び小円礫があり（この段の礫は歯抜け状態的で点在的）礫の上面が熱変色によると想われるややくすんだ赤味が伴っていた。この第２段目礫の上部層では淡茶褐色土と淡黄赤～黄赤褐色の細かい焼土との混土からなる比較的締まりのあるもので、現況のこの表面が焼けているとは認めがたいが、南北方土層観察用畦では確実に上面部から流下する２条の炭灰層（線）が認められる。こうした炭灰層は、最下部の被熱面とその上層の非熱変色粘土層間の間層（５㎜前後の薄層）にも存在し、また第２段目礫上面でも途中から始まる炭層があり、これらと焼土の混じる灰層および粘土層が端部側へ互層的ながら入り組み重なり合って堆積しており、炉体の基底とその位置をほぼ継承しつつ嵩上げ的な改築が、最低でも２回は行われているものと考えられる。第27図中の外輪長波線は炭灰の広がりで発掘当初黒っぽく見えた範囲で、内輪の短波線は、そのなかでぽっかりと島状に赤（１′層）く見えていた上面での線であり、実線で示した穴等は最下部認識・発掘したものを示したが、炉下基礎部分に係わる礫の組み込みでは大半が上下二段中の下段部のものであるが上段に係わるものも重ねて図示してしまったものであることを断っておきたい。

炉に隣接する、区画溝内部のその他の遺構では、柱穴大の小穴がいくつかあるが、検出面より－４cm程度の皿状のものと、－10cm前後の鉢状のものとがあるが、第５区（区画溝外）検出の建物柱穴の形態を参考とすれば、いずれも浅く開放的な掘遺となっているものばかりであり、柱穴を想定することは難かしい。その他では、不整形な土坑が２基存在する。その内の、炉に約50cmと近接してある土坑は深さが約80cmあり、坑中には炉側から流入したような黄褐色の粘性土塊があり、その上に須恵器断片１を含む小円礫少量が乗り掛かったように出土している。炉材の一部かと推測されるが、未使用材か改築時の解体廃材であるかは特定できないが、熱変色したものは含まれていなかった。なお、この土坑も早い段階で埋まっているものと考えられ、炭灰層の広がりはこの坑上においても面的な状態をもって被覆していた。

区画（囲郭）溝は、上面幅で約0.8ｍ～１ｍ、底面幅で約0.2ｍ～0.4ｍ、深さ約0.4ｍとなっており、内郭の台状部を約７ｍ×13ｍ前後に確保されているように想われる。が、確証はない。

出土遺物（第30図・第31図）

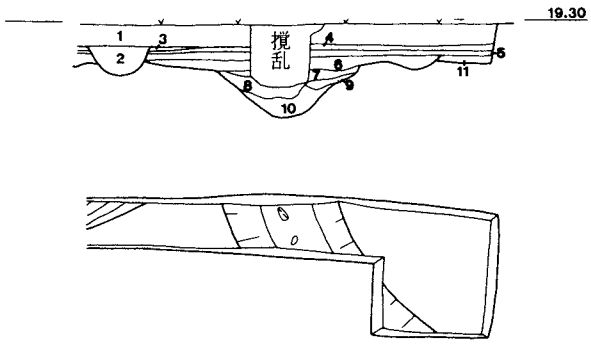
第30図上段の１～14は第１区南調査区内より出土したもので、特に良好な遺物包含層というものも無かったが、遺構もまた明確に把握しきれなかったという状況も手伝って、包含層中よりとして取り上げた遺物となるが、いずれも分散・孤立的な出土状況をもっている。

１～10は須恵器、11・12は土師器、13は珠洲陶、14は越前陶である。１は口径15.2cm、現存高2.9cmに図上復元される杯蓋で、編平な天井部外面はヘラ調整後と想われるナデがみられる。短く垂下させた口唇の造作にはシャープさに欠ける。２は口径13.5cm、器高3.7cmで、底面と体部立ち上がりとの稜線が明瞭ではなく、円みをもって立ち上げる体中位から微かに外反気味の口縁部とする無高台杯である。３～９は高台付杯となるが、大まかに３と５に代表される二法量（類）がある。３は口径13.5cm、器高4.4cm、高台高0.5cm、高台径8.1cmで、５は口径14.4cm、器高５cm、高台高0.5cm、高台径9.6cmとなっている。６は体部から口縁部が直線的にのびる体形をとるため、角張った印象を与えている。10は口径29.8cm、口頸高6.2cmの大振りの壷のようで、口唇部が先細りして小さく外反する。11は内面黒色の土師器で、推定口径17.3cm、器高2.9cmの杯形をなすようで、口唇部の僅かな外反がある。12は、口径19.1cmの土師器甕で体部内外面にハケ状具調整がある。

第30図下段の15～22は、囲繞溝の内郭部分にあたる炉の周辺および東接ピット中の遺物を一括掲載した。東接ピット中のものは16・21の２点で、その他の物は出土状況に沿って灰炭層の上面部よりの物と地山面に程近い下

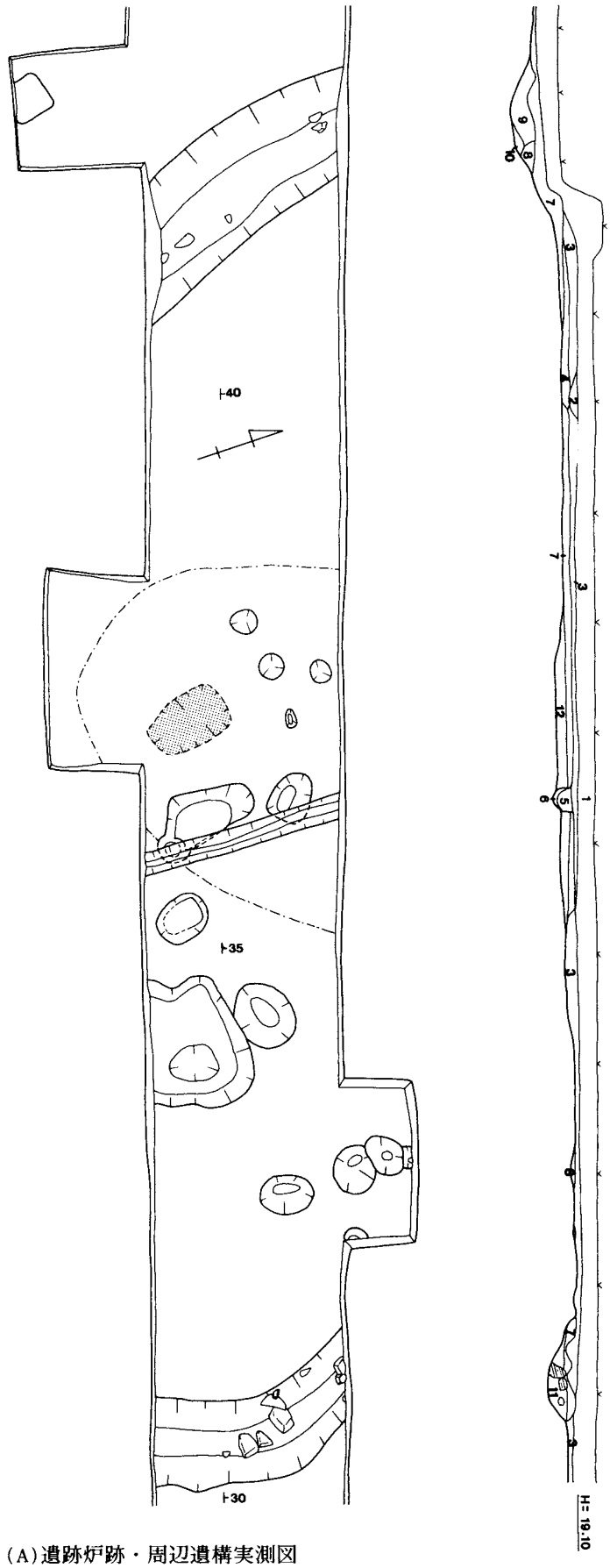
東西方土層断面

1　耕土（床土含）
2　明灰色砂質土
3　灰色砂質土
4　暗灰色砂質土
5　灰色砂質土
6　5層と同質でやや濁る
7　濁青灰色砂質土
8　濁灰色砂
9　暗灰色土（食物遺体含）
10　濁灰褐色砂質土
11　暗灰褐色粘質土
12　炭粒を含む灰層と粘土の互層



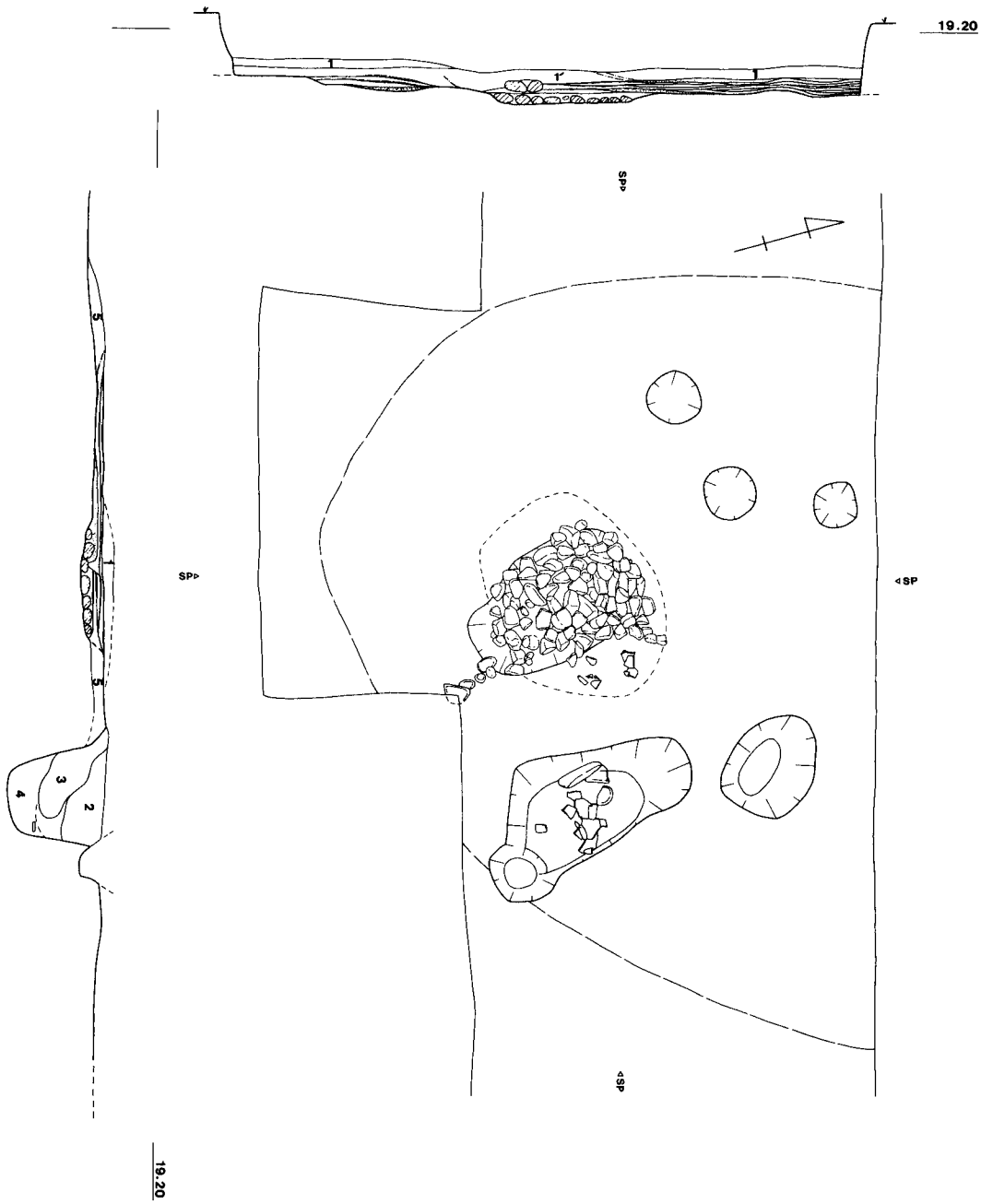
南側拡張部土層断面

1　耕作土（含床土）
2　黒褐色と灰白色砂の混土
3　淡茶褐色土
4　黒褐色土
5　淡灰青～灰緑色粘砂混土
6　暗灰青色砂質土
7　灰褐色粘砂土
8　淡褐色砂質土
9　淡褐色砂質土に灰色砂混じる
10　褐色粘質土
11　淡黄褐色粗粒砂



0　2m

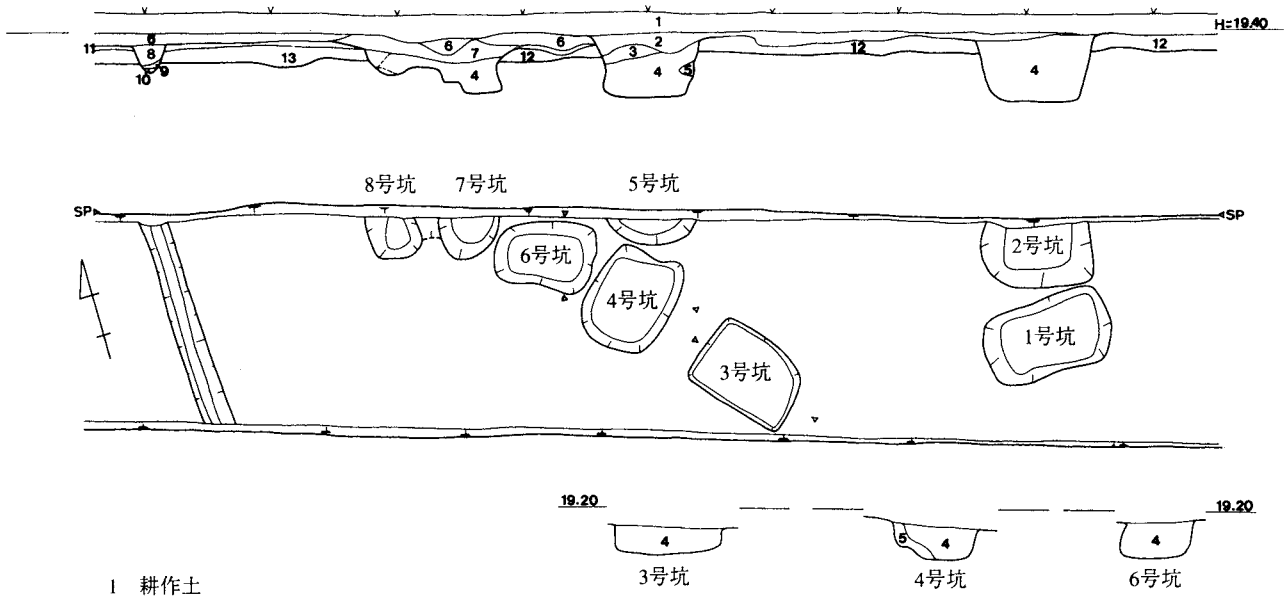
第26図　ヘイナイメ(A)遺跡炉跡・周辺遺構実測図



1　淡茶褐色土
1'　淡茶褐色土に焼土細粒を含
2　淡灰褐色砂質土
3　黄褐色粘性土
4　黒褐色粘性混土
5　淡茶褐色土

0　1m

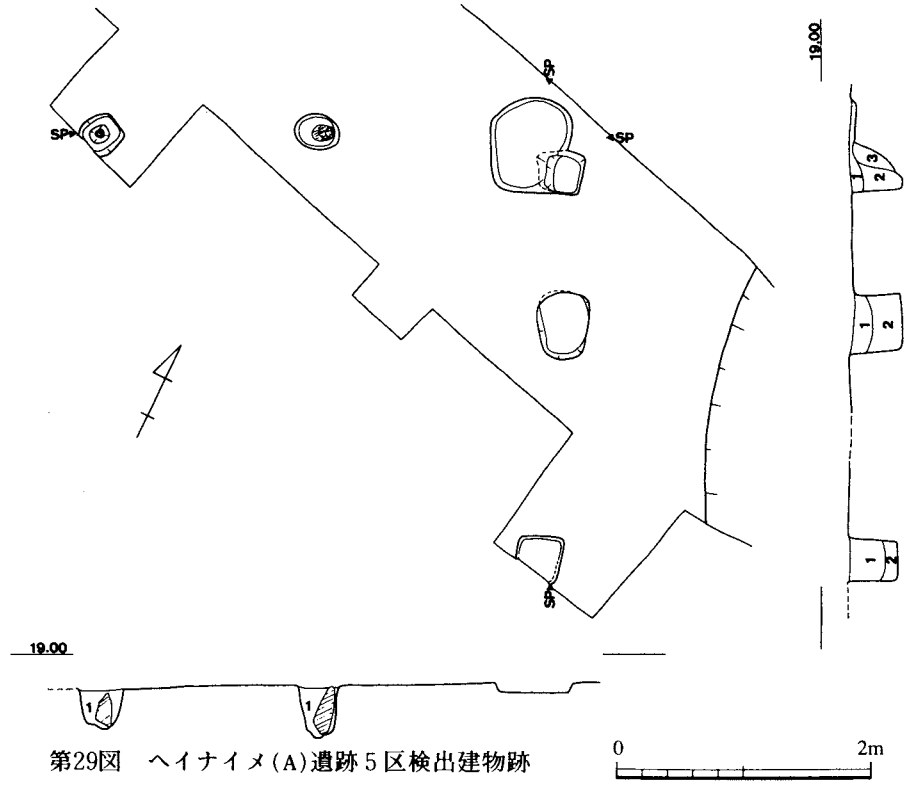
第27図　ヘイナイメ(A)遺跡炉跡部分実測図



1 耕作土
2 暗灰褐色粘質土に青灰色砂質土でロックが混じる
3 淡灰色砂質土
4 濁灰色粗粒砂土
5 灰褐色粒質土と灰色砂の混土
6 灰色砂質土
7 2層と6層の混土
8 灰色砂質土
9 8層と地山土の混土
10 暗灰色砂質土
11 暗灰褐色砂質土
12 3層に暗灰褐色粘質土ブロック含
13 濁青灰色砂質土

0 2m

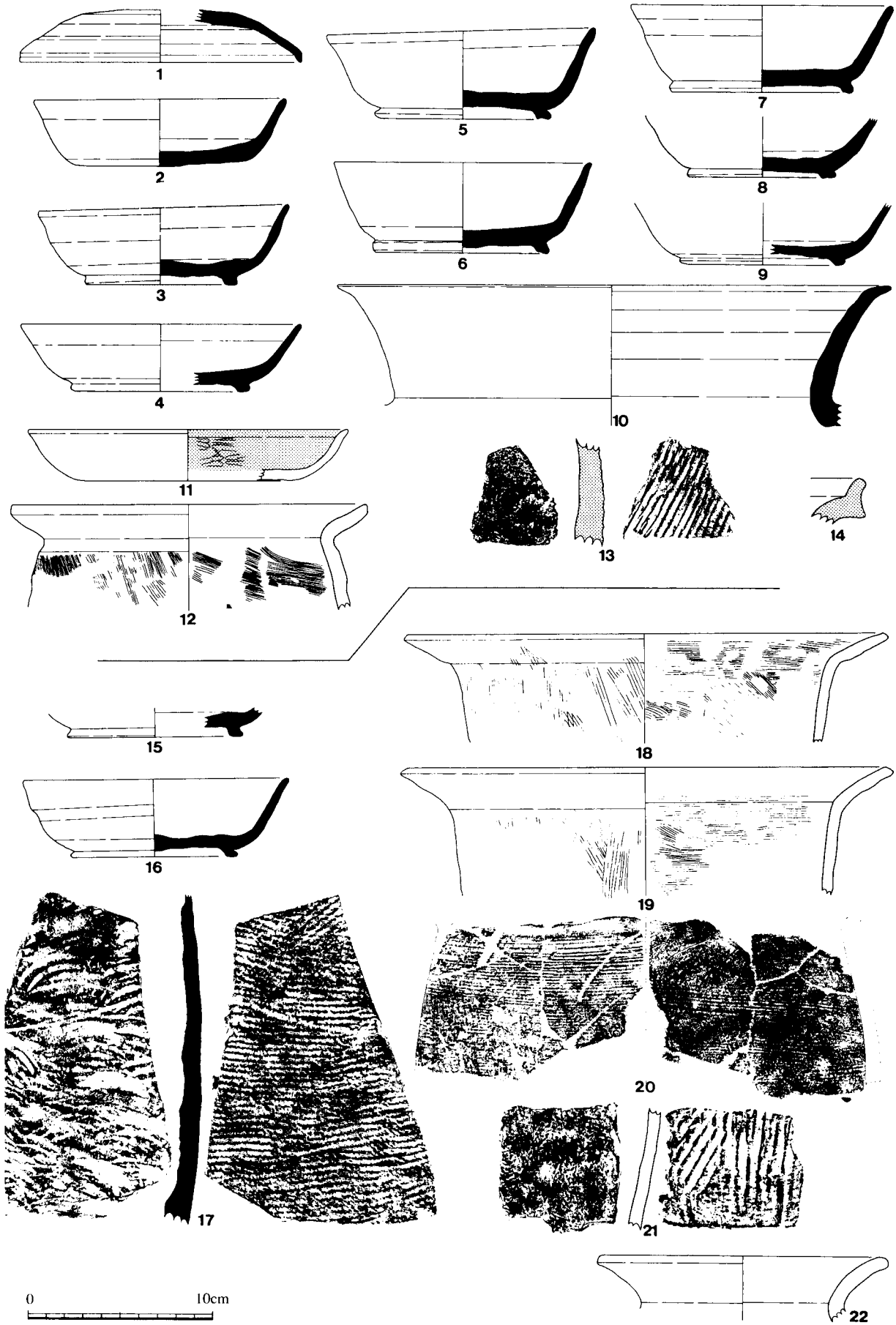
第28図　ヘイナイメ(A)遺跡2区検出遺構



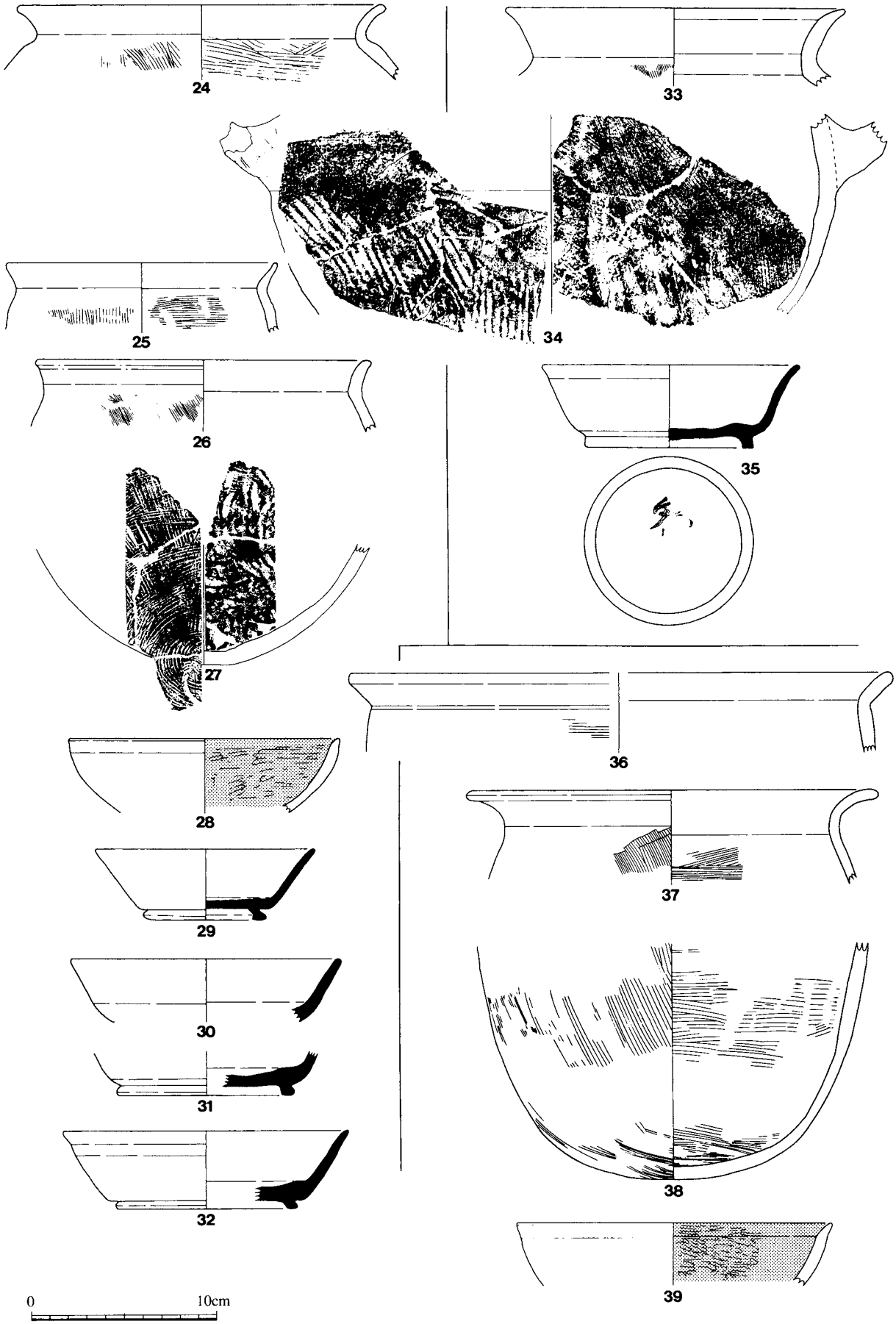
1 濁青灰色砂質土
2 濁暗灰色砂質土
3 黒灰色砂質土

0 2m

第29図　ヘイナイメ(A)遺跡5区検出建物跡



第30図　ヘイナイメ(A)遺跡出土遺物（1区南拡張区1～14、4区炉周辺15～22）



第31図　ヘイナイメ(A)遺跡出土遺物（炉外周構内出土、東側24～32、西側33～35、南側36～39）

部よりのものとを分割して取り上げているが、とくに19・20では相互に接合できる断片があり、17では東側溝内の断片と接合されている。従って、出土位置の提示は主たる破片の出土位置を代表させている。16は口径14.4cm、器高4.4cm、高台高4.4cmの付高台杯で、底部～体部はナデ調整であるがやや粗く、外底面ではヘラ切り痕が残っている。17は甕体部であろうか、外面でのタタキ痕は平行状具状の斜め方向十横方向の重ねがみられる。18・19は土師器の鍋様の土器で、口径約26cm前後の広口の器形となるがススの痕跡はないようである。

1区北壁土層（0より6ｍ地点）
1．盛土（現表土・耕土層）
2．盛土（濁黄灰色土）
3．旧耕土
4．暗灰色砂質土
5．淡灰色砂質土
6．灰色砂質土（炭化物粒含）
7．淡灰オリーブ色シルト質土
8．灰オリーブ色シルト質土
9．淡灰オリーブ色砂質土
10．灰オリーブ色砂質土
11．灰褐色粘質土

2区西端北壁土層
1．盛土（現表土・耕土層）
2．盛土
3．旧耕土
4．暗灰色砂質土
5．淡灰色砂質土
6．灰色砂質土（炭化物粒含）
7．淡灰オリーブ色シルト質土
8．灰オリーブ色シルト質土
9′．淡灰オリーブ色砂利層
11′．暗灰褐色粘土と砂の混土（条痕文土器・炭化物を含）
12．灰オリーブ色粗粒砂質土
13．淡暗灰色砂質土（荒砂）

3区南壁・3区東壁土層
1．盛土
2．濁灰色土
3．旧耕土（灰色砂質土）
4．旧耕土（黄灰色砂質土）
5．暗灰色粘質土
6．淡灰オリーブ色シルト質土
7．淡灰オリーブ色粗粒砂
8．灰色粘質土（炭化物・粗砂混じる）
9．濁暗灰色粘質土
10．灰色粗粒砂
11．黒灰色粘質土
12．灰色シルト質土
13．淡灰色シルト質土
14．淡灰色砂（やや荒い）
14′．灰色砂
15．淡灰オリーブ色細砂
16．淡灰茶色粗粒砂
17．13と同質（やや色浅い）
18．淡灰オリーブ色粘質土（植物遺体混じる）
19．濁明灰色細砂と暗灰色粘質土（層状をなす）
20．暗灰色粘質土（炭化的・植物遺体混じる）
21．暗灰色粘質土（粗粒砂・炭化的多く混じる）
21′．暗灰色粘質土（縄文土器片出土）
22．19と同質（粗粒砂多く混じる）
23．粗粒砂を主とした19層との混土
24・23層と25層の層状堆積
25．暗灰褐色ピート質土
26．26と同質土

5区北壁
1．盛土
2．旧耕土
3．暗灰色粘砂土（炭化物混じる）
4．濁灰色粗粒砂
4′．濁灰色砂質土
5．淡灰オリーブ色シルト質土（やや汚れ、炭化物混じる）
6．暗灰色弱粘質土と粗砂の混土（植物遺体混じる）
7．黒灰色粘質土
8．濁灰色粗粒砂
9．暗灰色弱質土と粗粒砂の混土

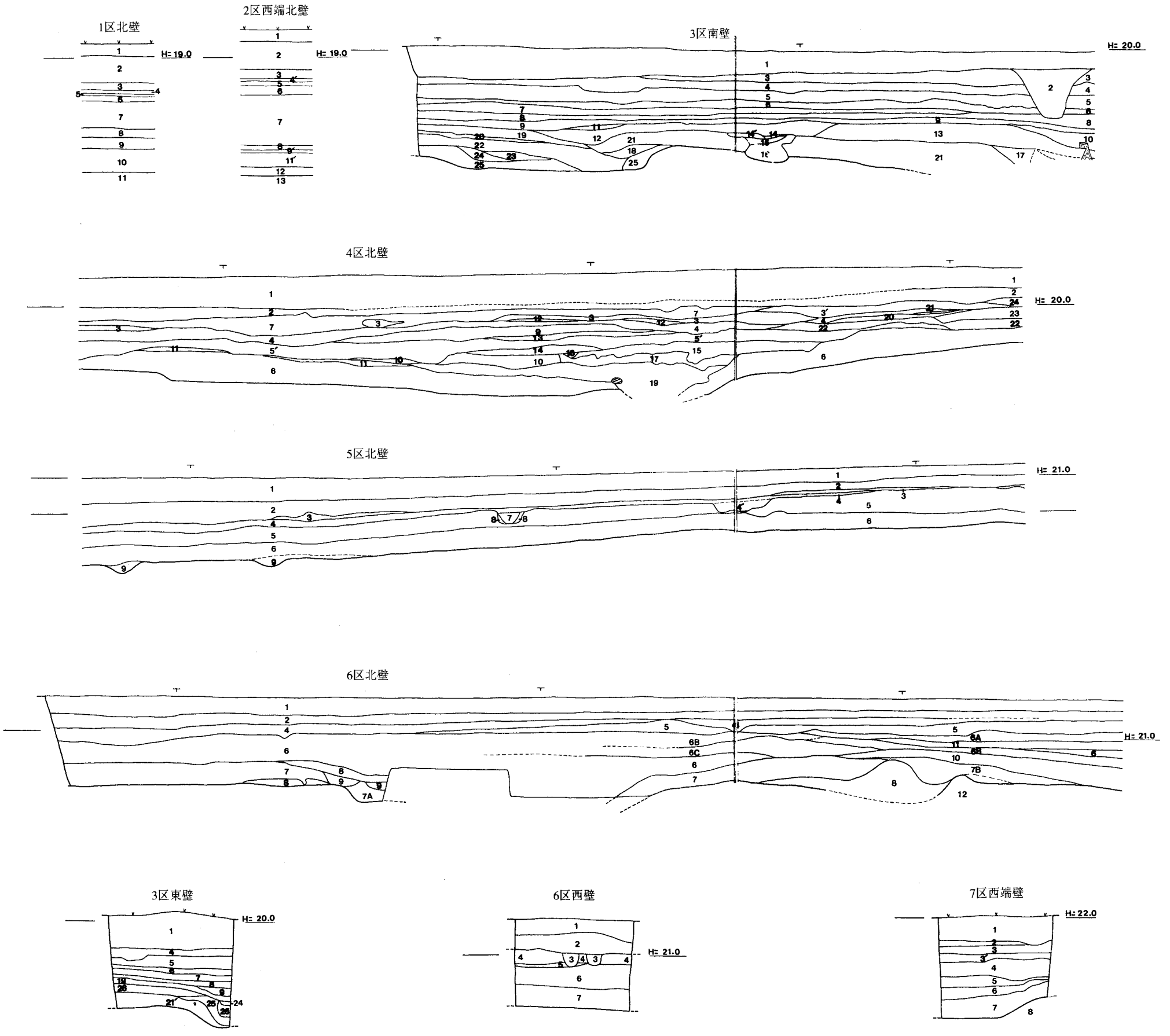
4区北壁（63ｍ～76ｍ間土層）
1．盛土～旧耕土
2．暗灰色粘質土
3．淡灰オリーブ色シルト質土（3区土層9）
3′．淡灰オリーブ色シルト質土（かなり汚れる）
4．濁淡灰茶色粗粒砂（3区土層7）
5．淡灰色粘質土
5′．淡茶灰色ピート質土
6．暗灰色砂質土（炭化物・粗粒砂～砂利混じる）
7．濁灰オリーブ色シルト質土（粗粒砂混じる）
8．淡灰オリーブ色シルト質土と4′層の互層
9．淡青灰色粗粒砂
10．8層と同系質の互層
11．暗褐色ピート（粗粒砂混じる）
12．灰茶色粗粒砂
13．淡茶色ピート質土と淡灰色シルト質土の互層
14．淡灰青色砂
15．14層と淡茶色ピートの互層
16．暗褐色ピート
17．淡灰青色細粒砂と暗褐色ピートの混層
18．暗褐色ピートを主に灰色砂が若干混じる
19．淡灰青色細砂（10cm大の礫を含む）
20．暗灰色粗粒砂
21．淡灰茶色細粒砂
22．淡灰色弱粘質土（粗粒砂多く混じる）
23．濁灰色粗粒砂
24．濁灰オリーブ色シルトに黒色粘質土ブロック混

6区北壁土層
1．盛土
2．旧耕土
4．暗灰褐色粘質土
5．灰黄色砂質土
6．灰オリーブ色シルト質土
6A．淡灰黄オリーブ色シルト質土
6B．濁淡灰オリーブ色シルト質土
6C．濁灰色シルト質土
7．暗灰色弱粘質土（粗粒砂混じる）
7A．灰色砂層
7B．淡灰色砂層
8．にぶい灰褐色粘質土
9．明灰砂（7層土をブロック状に含む）
10．茶褐色ピート主体層
11．淡茶色砂層
12．灰色粗粒砂層

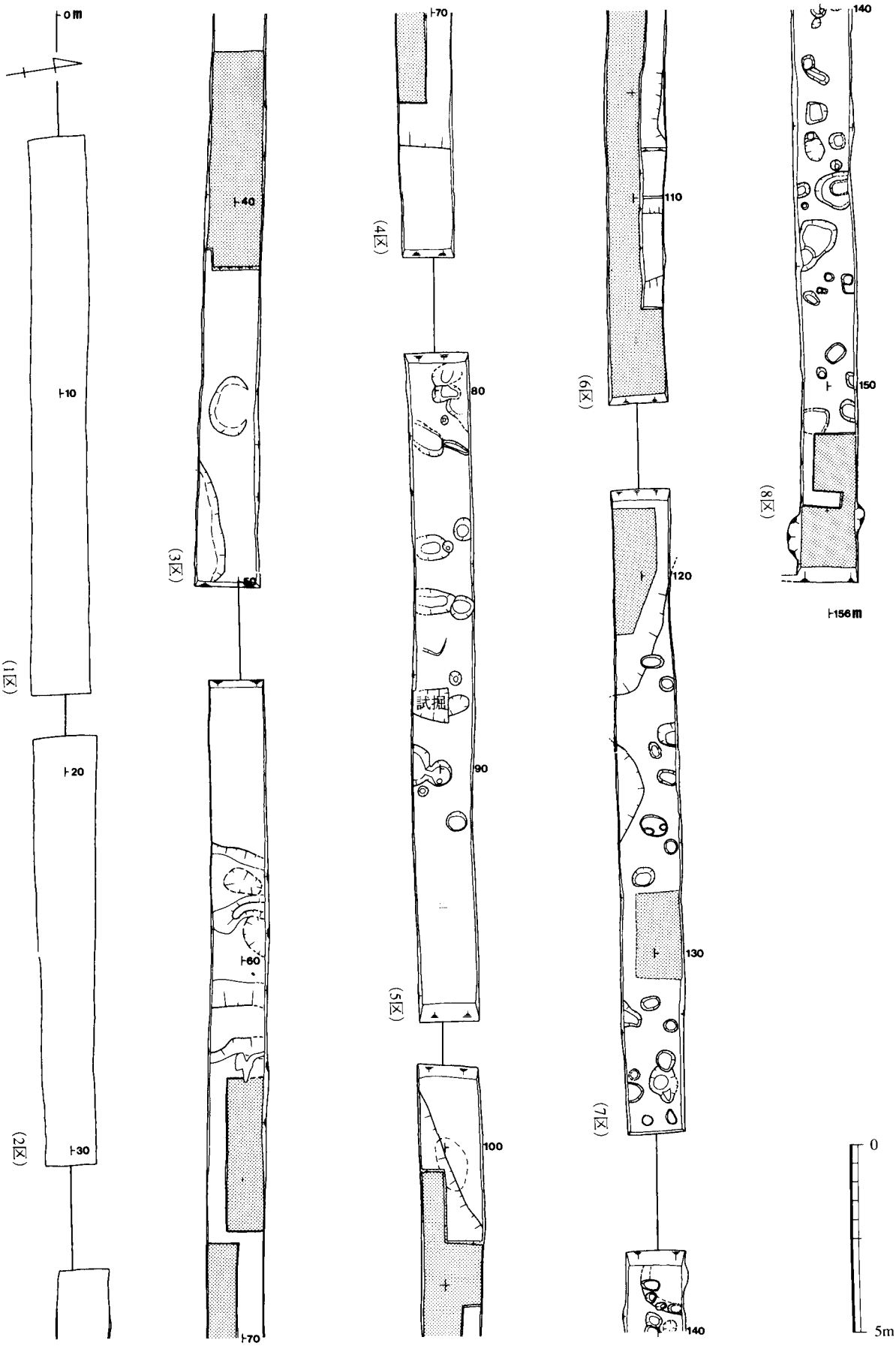
6区西壁土層々序
1．盛土
2．旧耕土（灰色砂質土）
3．灰色砂質土（やや粘）
4．暗灰褐色粘質土（粗砂混じる）
5．灰黄色砂潮
6．灰オリーブ色シルト質土（炭化物含）
7．暗灰色弱粘質土（粗砂混じる）

7区西端壁土層
1．盛土
2．灰色粘質土（旧耕土？）
3．暗灰褐色粘質土（粗粒砂若干含）
3′．暗灰褐色粘質土（やや暗い）
4．淡灰オリーブ色シルト質土
5．4層ら主体となり、炭化物を含む
6．淡灰褐色粘砂混土（炭化物含）
7．黒灰色粘質土（植物遺体・砂利混）
8．濁灰色粗粒砂層（縄文期基盤面）

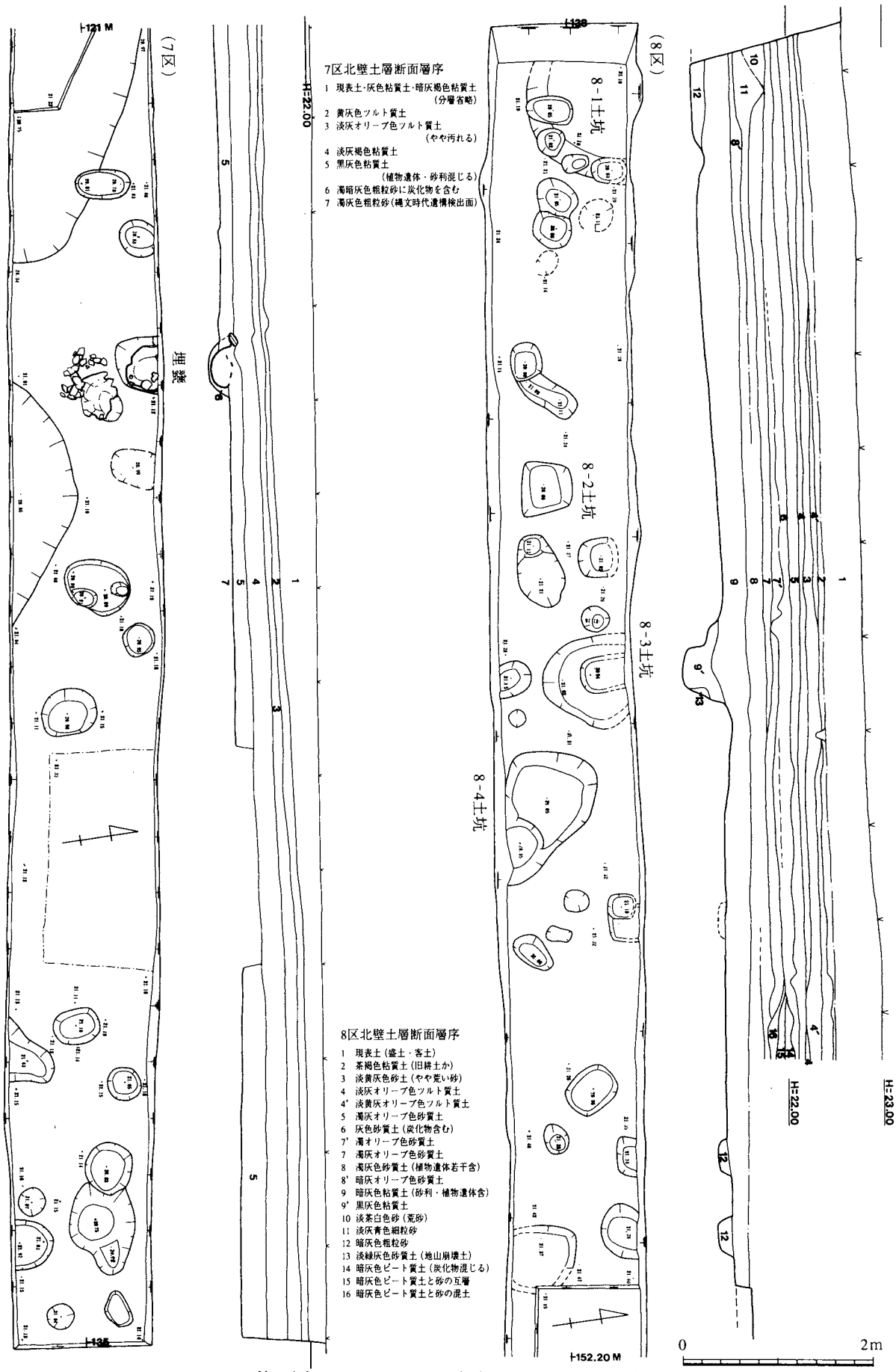
（ヘイナイメ(B)遺跡発掘区土層）



第32図　ヘイナイメ(B)遺跡発掘区土層層序



第33図　ヘイナイメ(B)遺跡発掘区実測図



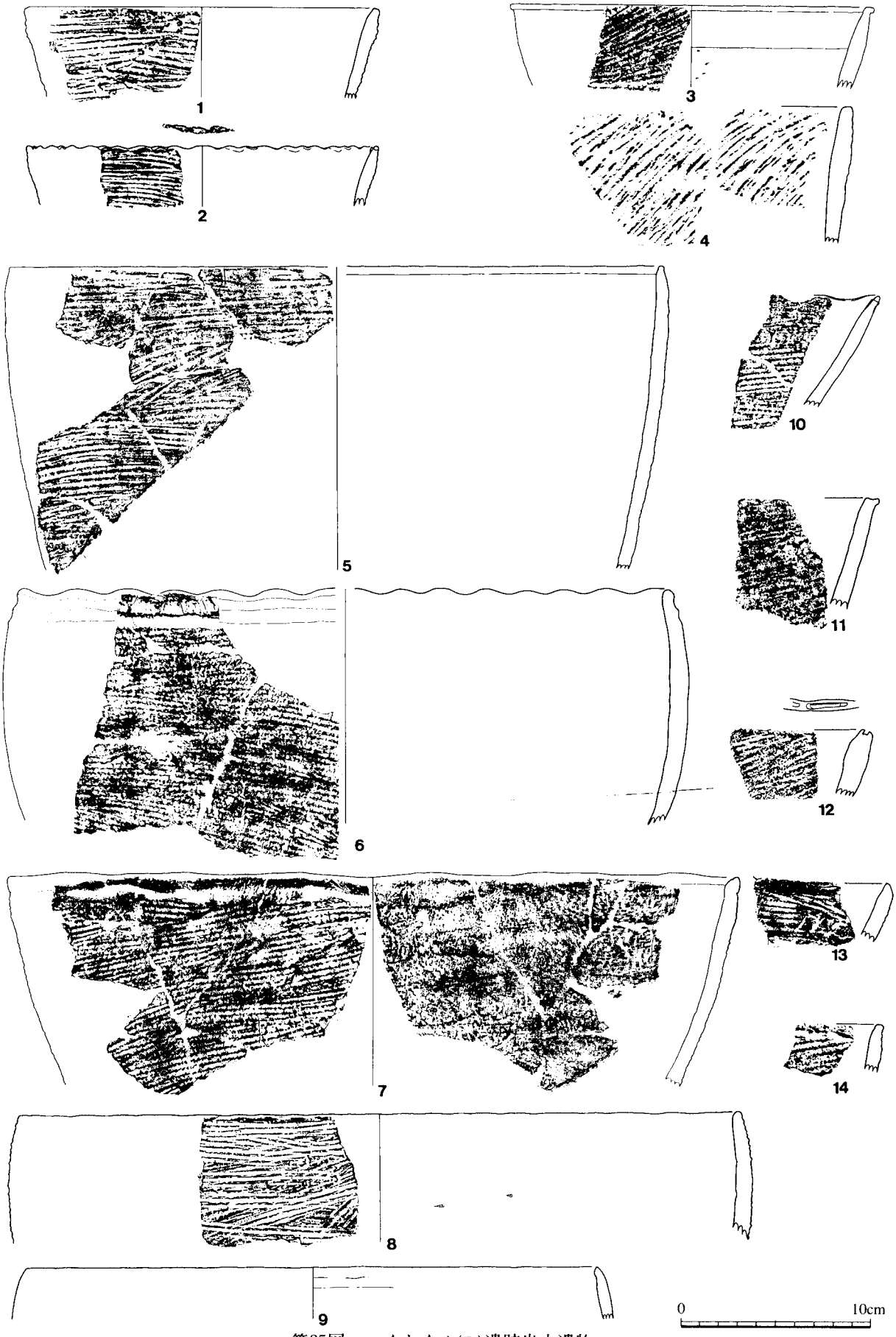
7区北壁土層断面層序

1 現表土・灰色粘質土・暗灰褐色粘質土（分層省略）
2 黄灰色ツルト質土
3 淡灰オリーブ色ツルト質土（やや汚れる）
4 淡灰褐色粘質土
5 黒灰色粘質土（植物遺体・砂利混じる）
6 濁暗灰色粗粒砂に炭化物を含む
7 濁灰色粗粒砂（縄文時代遺構検出面）

8区北壁土層断面層序

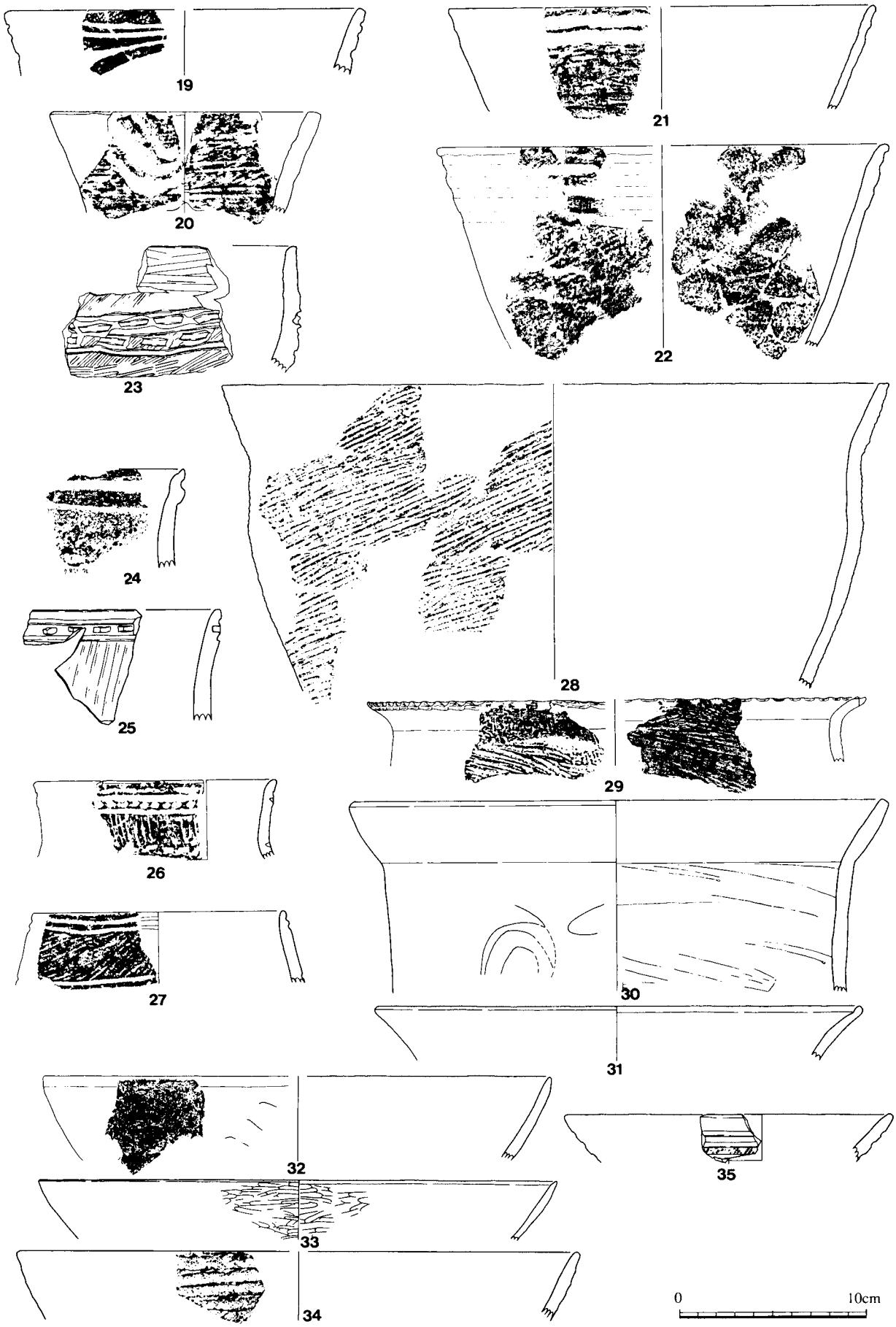
1 現表土（盛土・客土）
2 茶褐色粘質土（旧耕土か）
3 淡黄灰色砂土（やや荒い砂）
4 淡灰オリーブ色ツルト質土
4' 淡黄灰オリーブ色ツルト質土
5 濁灰オリーブ色砂質土
6 灰色砂質土（炭化物含む）
7' 濁オリーブ色砂質土
7 濁灰オリーブ色砂質土
8 濁灰色砂質土（植物遺体若干含）
8' 暗灰オリーブ色砂質土
9 暗灰色粘質土（砂利・植物遺体含）
9' 黒灰色粘質土
10 淡茶白色砂（荒砂）
11 淡灰青色細粒砂
12 暗灰色粗粒砂
13 淡緑灰色砂質土（地山崩壊土）
14 暗灰色ピート質土（炭化物混じる）
15 暗灰色ピート質土と砂の互層
16 暗灰色ピート質土と砂の混土

第34図　ヘイナイメ(B)遺跡実測図（7・8区）

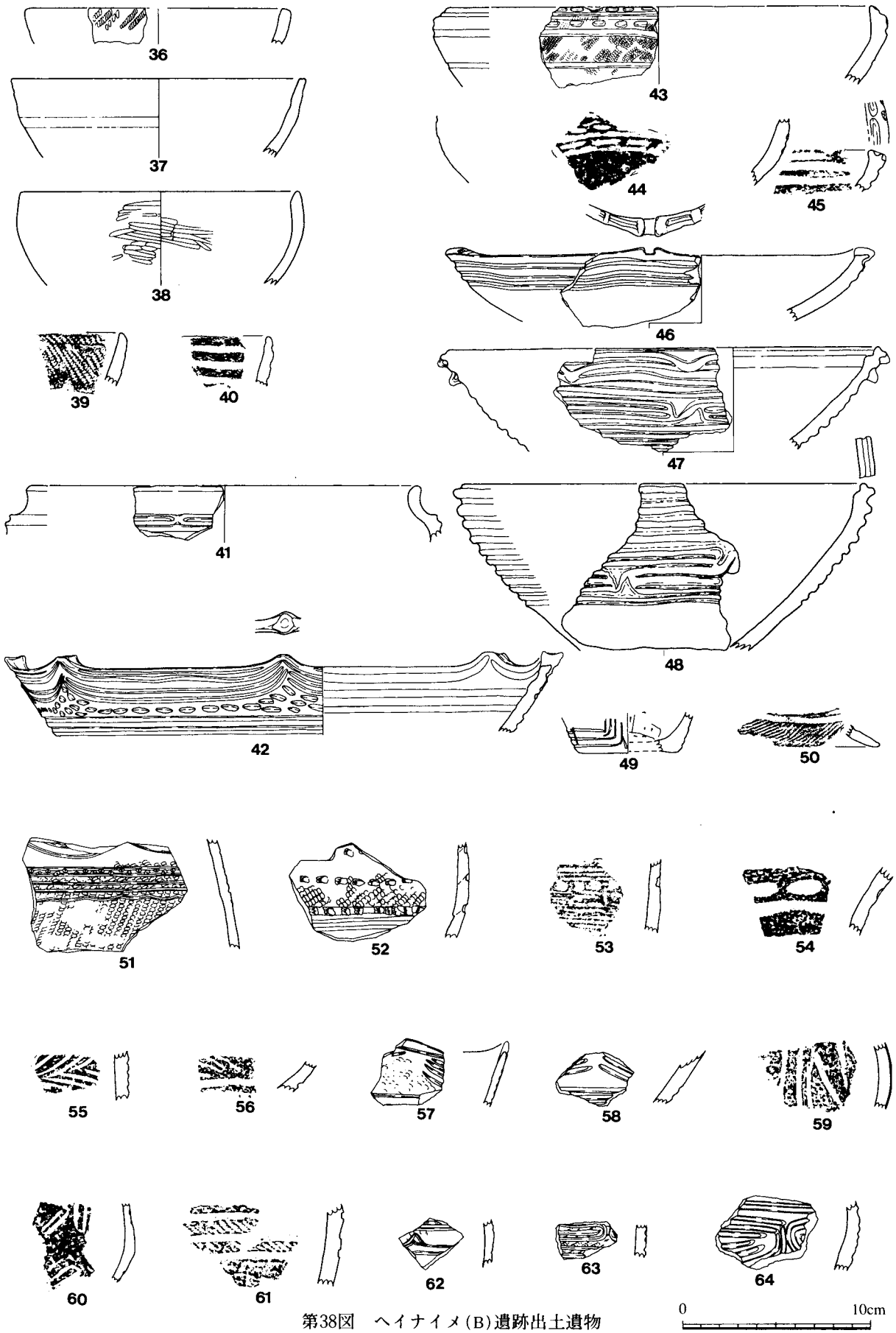


第35図　ヘイナイメ(B)遺跡出土遺物

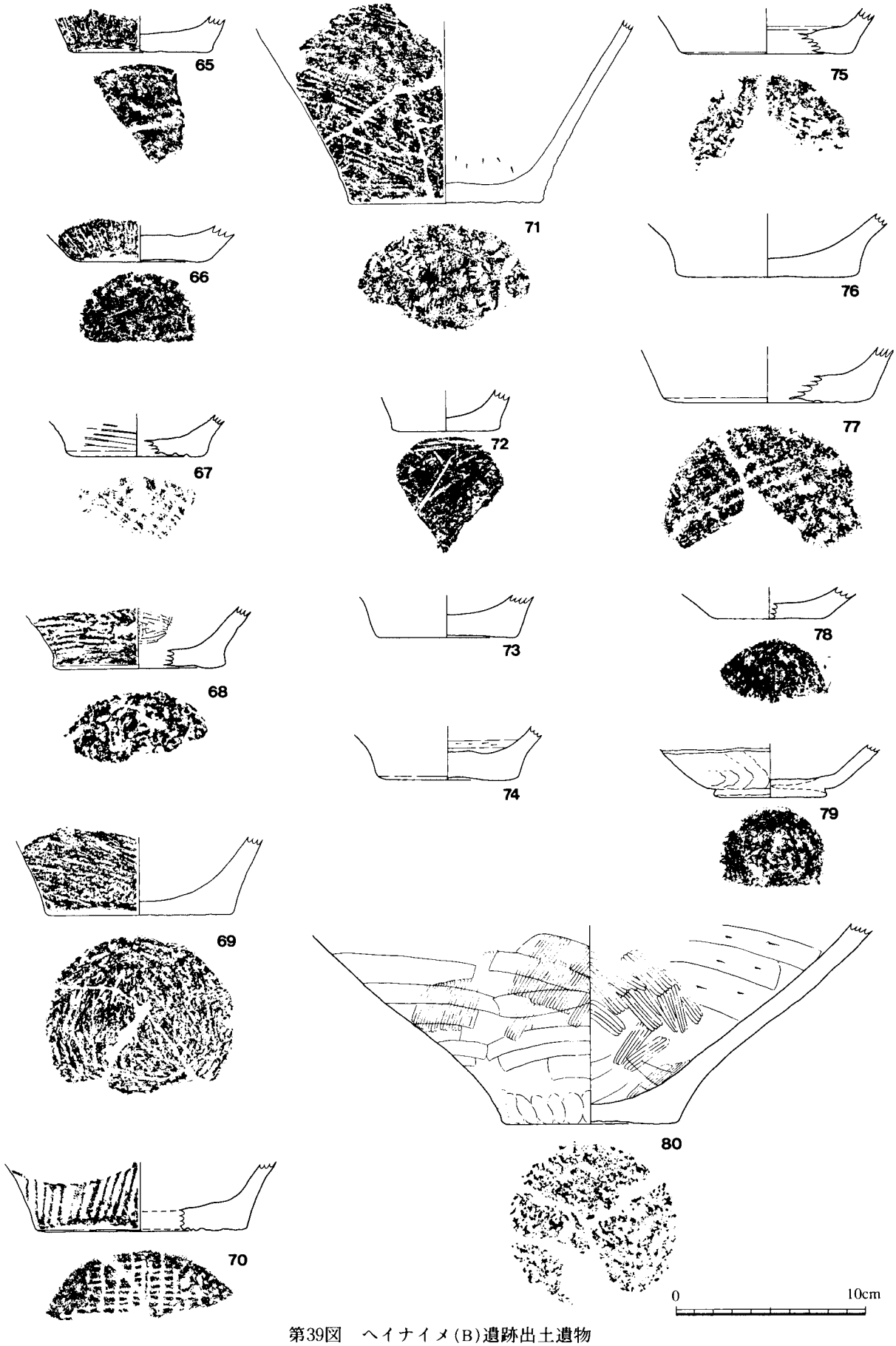
第36図　ヘイナイメ(B)遺跡出土遺物



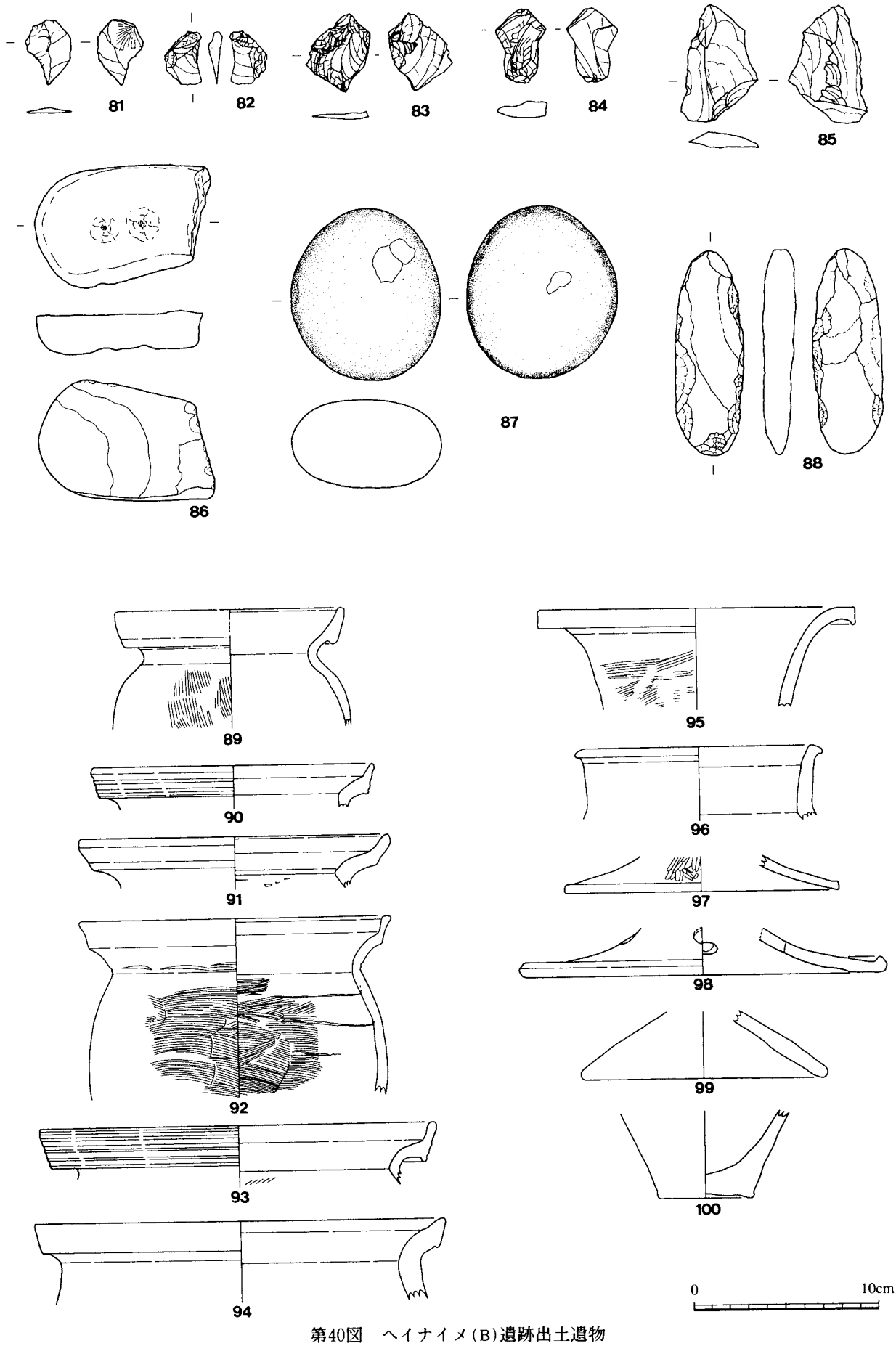
第37図　ヘイナイメ(B)遺跡出土遺物



第38図　ヘイナイメ(B)遺跡出土遺物



第39図　ヘイナイメ(B)遺跡出土遺物



第40図　ヘイナイメ(B)遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おおまち しい いせき　こがねもりへ い な い め えい ぴい いせき
書名	大町(C)遺跡・小金森ヘイナイメ(A・B)遺跡
副書名	県営ほ場整備事業余喜地区埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	川畑　誠、中島俊一
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所在地	〒921　石川県金沢市米泉4丁目133番地（TEL 0762－43－7692）
発行年月日	平成6年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大町C遺跡	いしかわけん はくいし 石川県羽咋市 おお まち 大町地内	17207	07125	36° 56′ 04″	136° 51′ 10″	19910430 ～0515	80	県営ほ場整備事業
こ がね もり 小金森ヘイナイメA・B遺跡	いしかわけん かしまぐん 石川県鹿島郡 かしままち こがねもり 鹿島町小金森地内	17404	34001	36° 56′ 04″	136° 51′ 56″	19920608 ～1016	660	県営ほ場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大町C遺跡	集落遺跡	平安	井戸・溝など	土師器、須恵器、木製品	「大町」の墨跡がある須恵器坏蓋出土
小金森ヘイナイメA・B遺跡	集落遺跡	縄文・奈良	掘立柱建物跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	

図版1　大町(C)遺跡その1

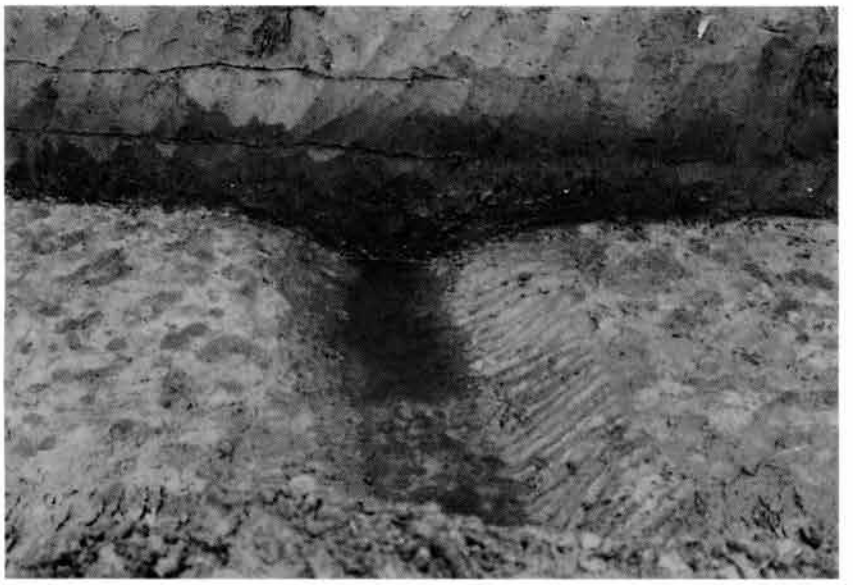
(1)　調査前風景（東から）

(2)　表土除去作業風景（東から）

(3)　調査作業風景（西から）

図版2　大町(C)遺跡その2

(1)　上層おちこみ土層断面（西から）

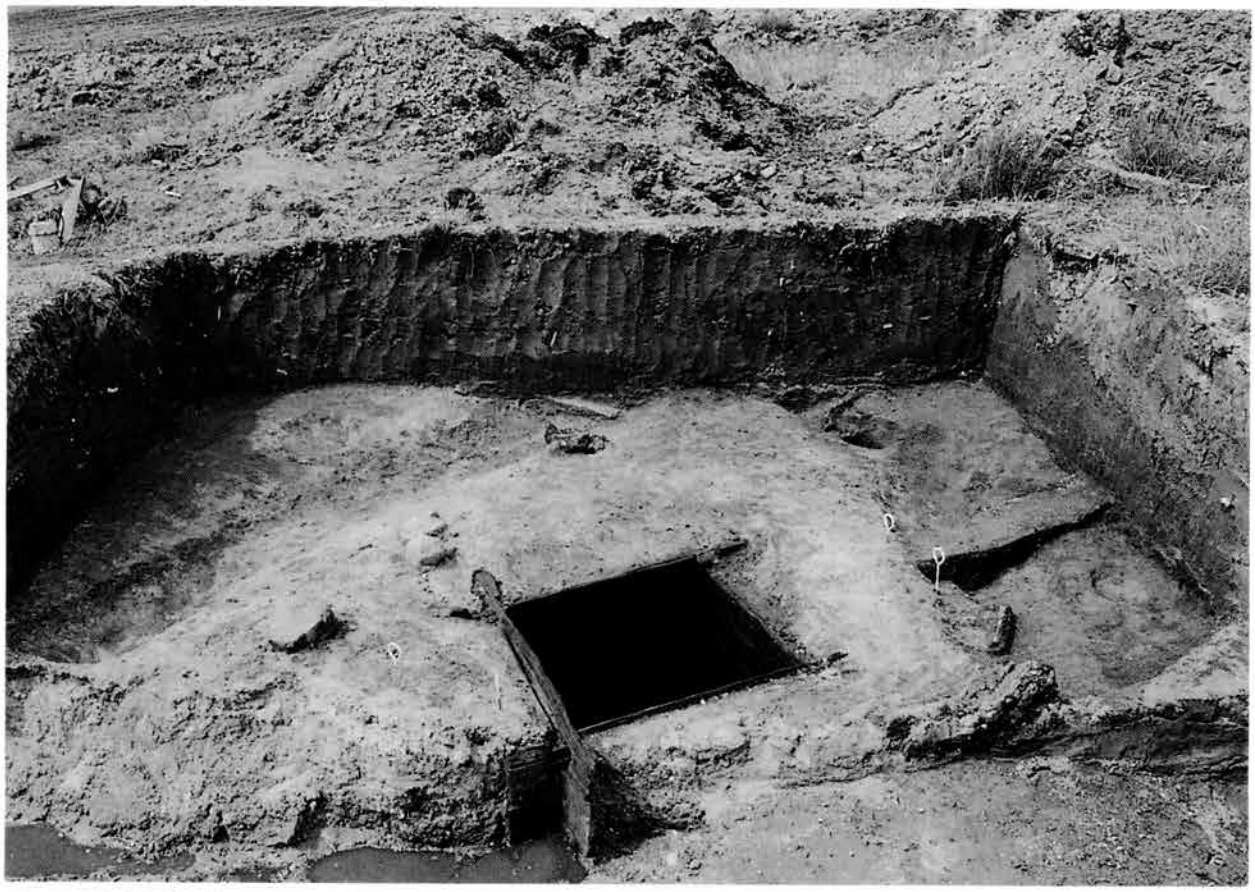


(2)　1号溝完掘状況（南から）

(3)　2号溝完掘状況（南から）

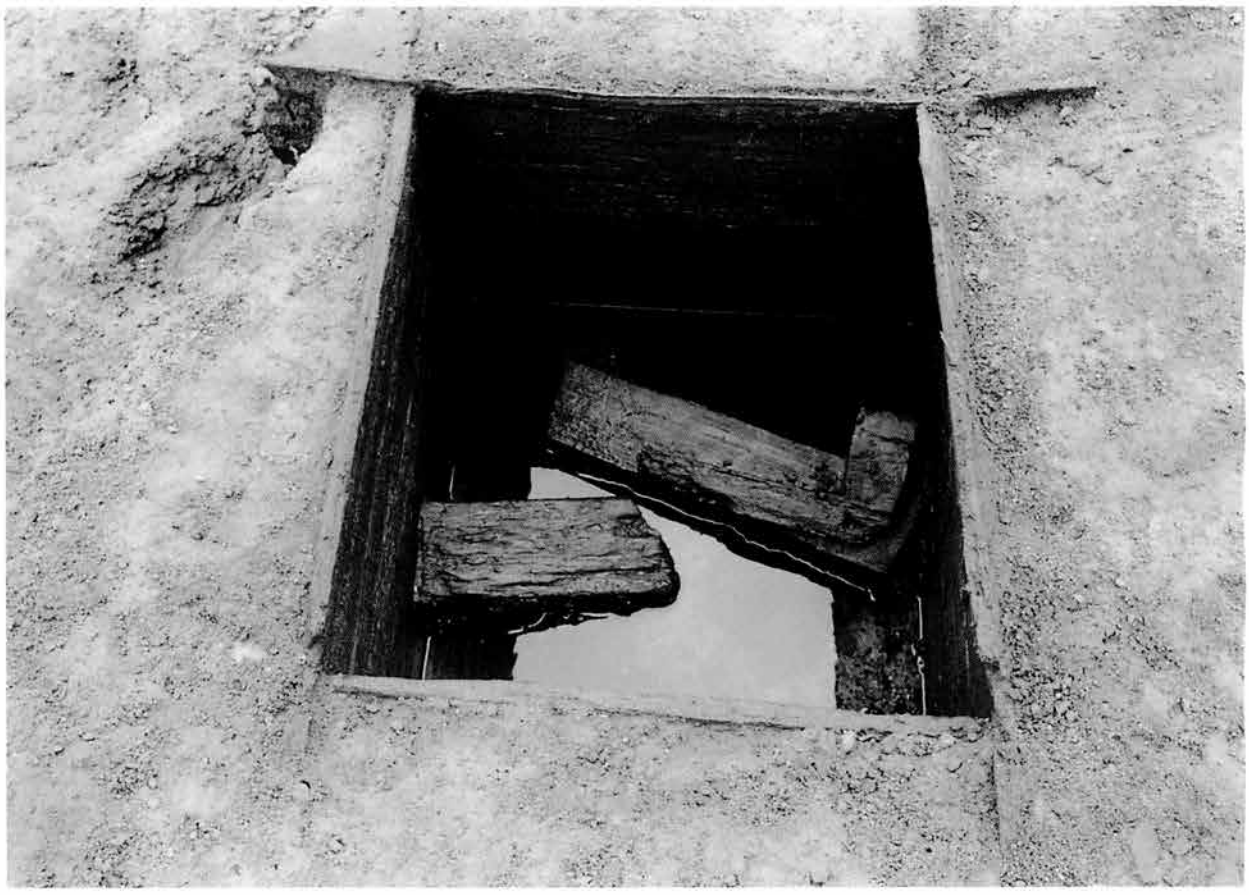
図版3　大町(C)遺跡その3

(1)　完掘状況（西から）



(2)　拡張区完掘状況（南から）

図版4　大町(C)遺跡その4



(1)　1号井戸完掘状況（南西から）

(2)　1号井戸掘り方（側財最下段を残した状態、南東から）

図版5　大町（C）遺跡その5

(1)　1号井戸掘り下げ作業風景（南から）

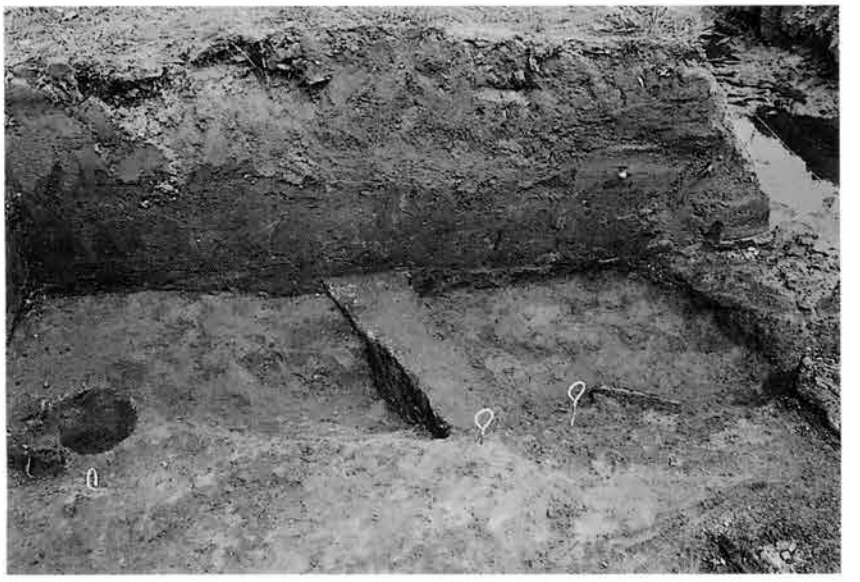
(2)　1号井戸完掘状況（西から）

(3)　1号井戸側財取りはずし作業風景（北から）

図版6　大町(C)遺跡その6

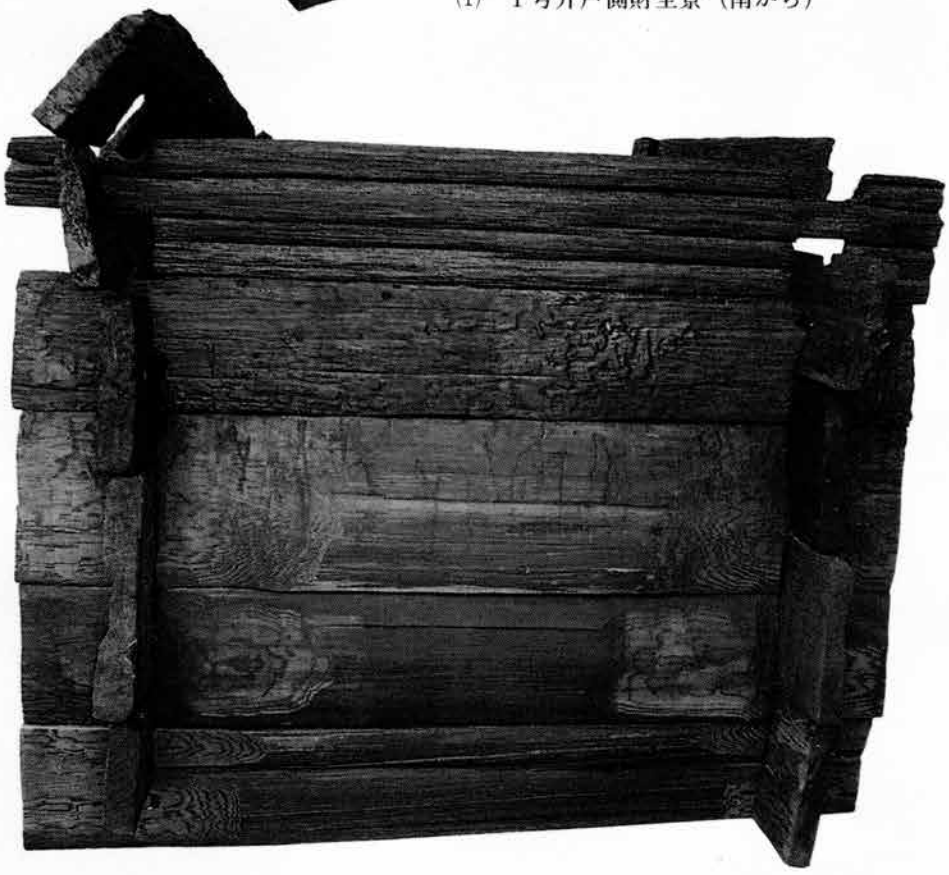
(1)　側財の組み合せ部分（北側、下段より２・３段目）

(2)　同上



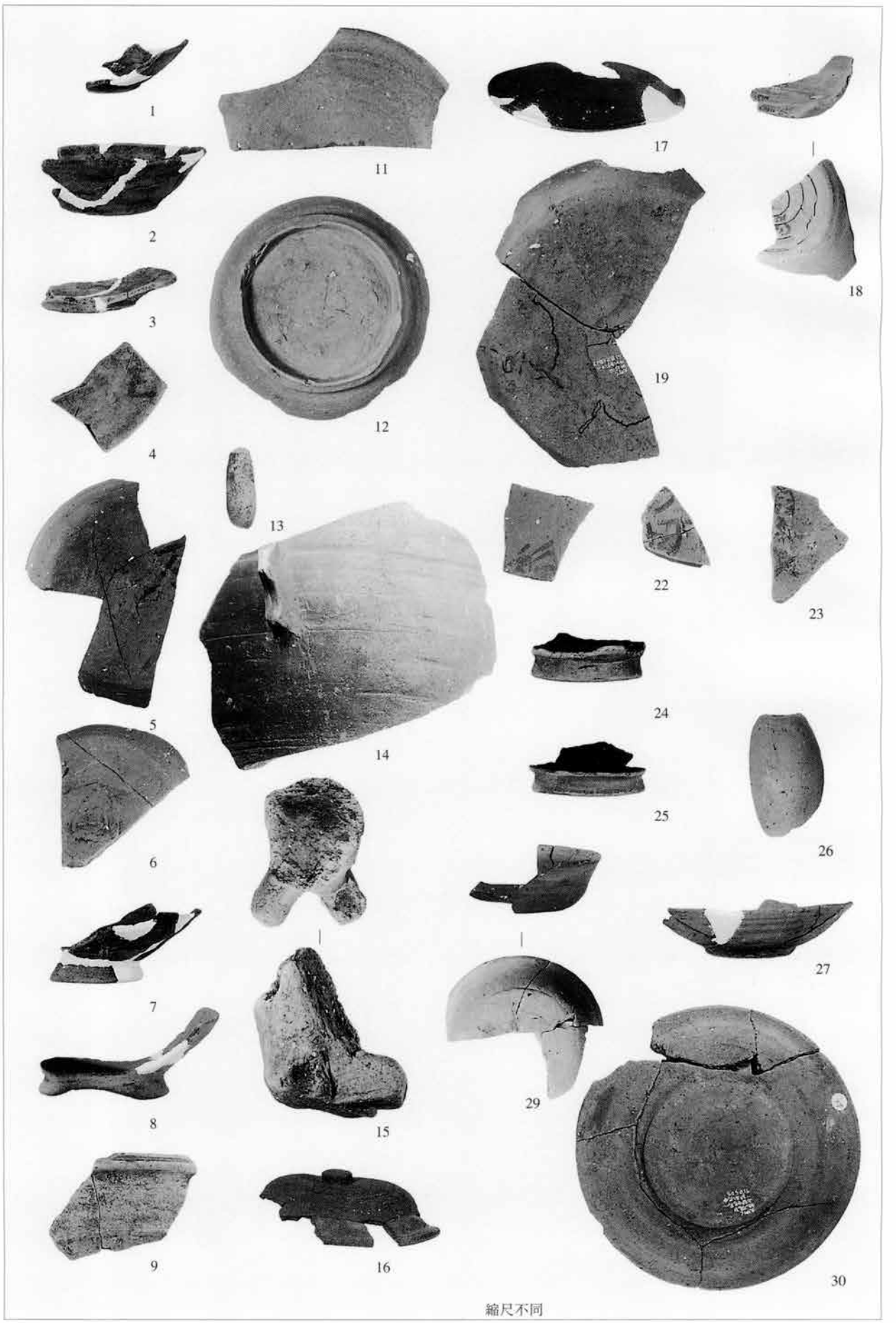
(3)　ＳＸ０１完掘状況（西から）

(1)　1号井戸側財全景（南から）



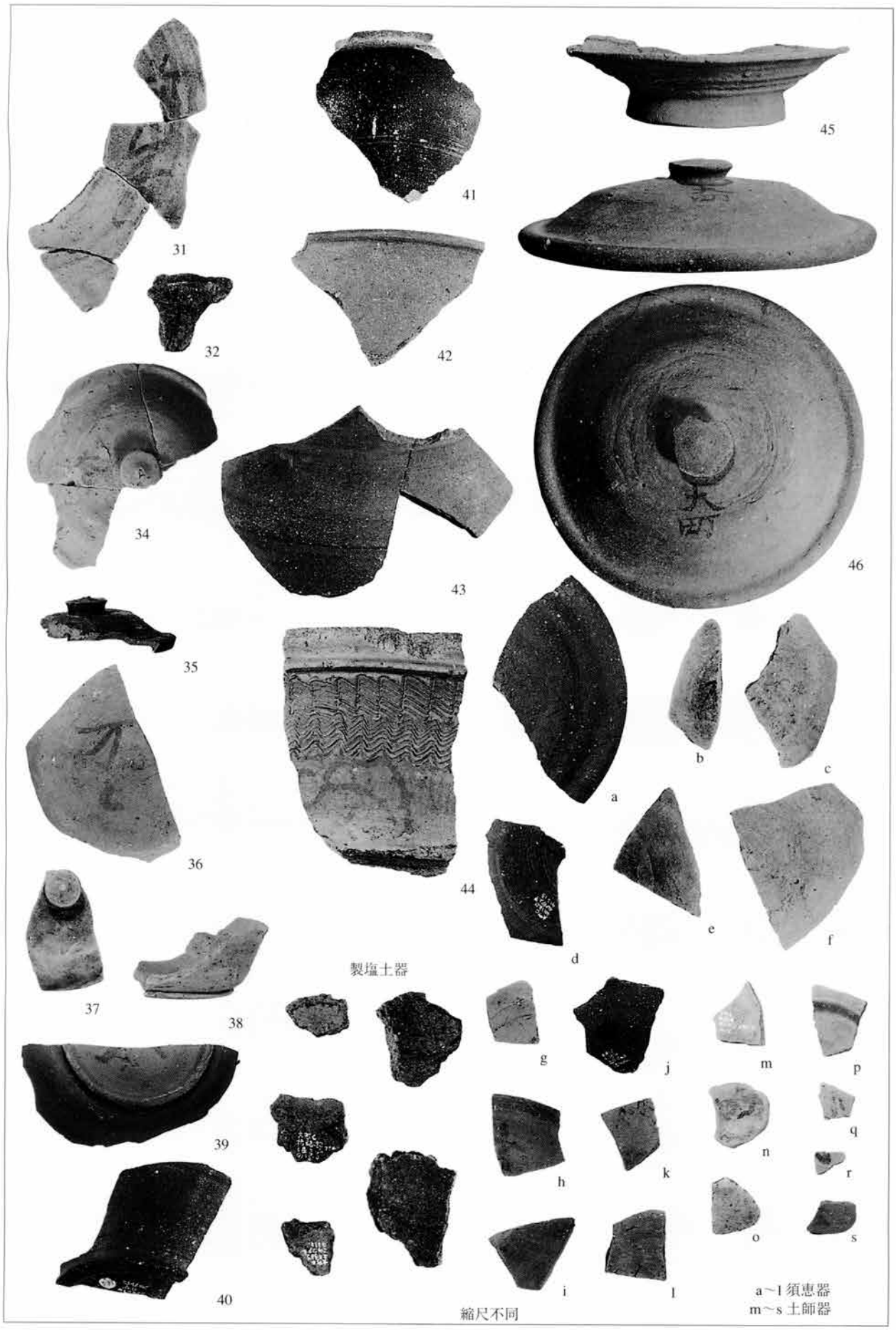
(2)　1号井戸側財全景（南東から）

図版8　大町(C)遺跡その8

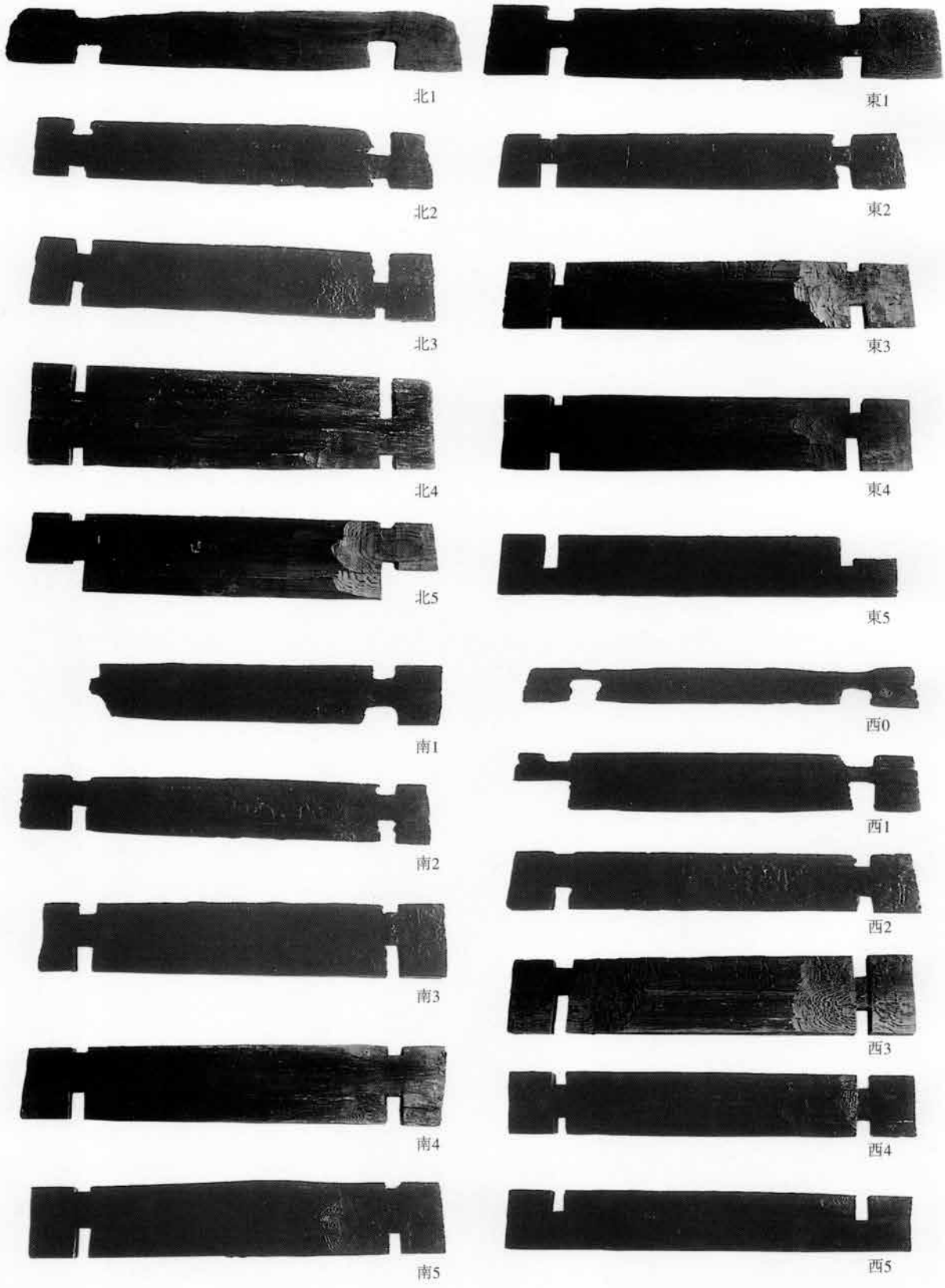


縮尺不同

図版9　大町(C)遺跡その9



図版10　大町(C)遺跡その10

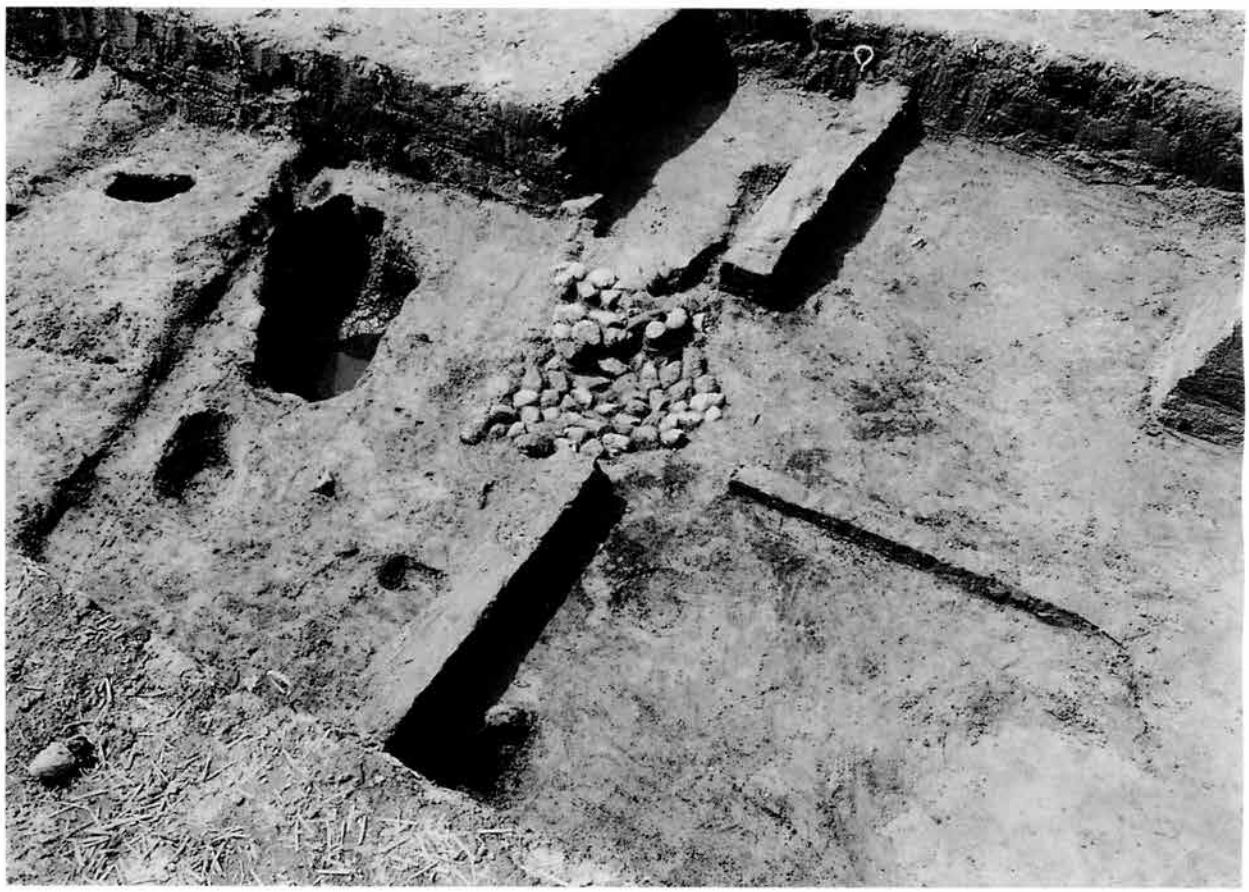


図版11　調査前風景（東方より）

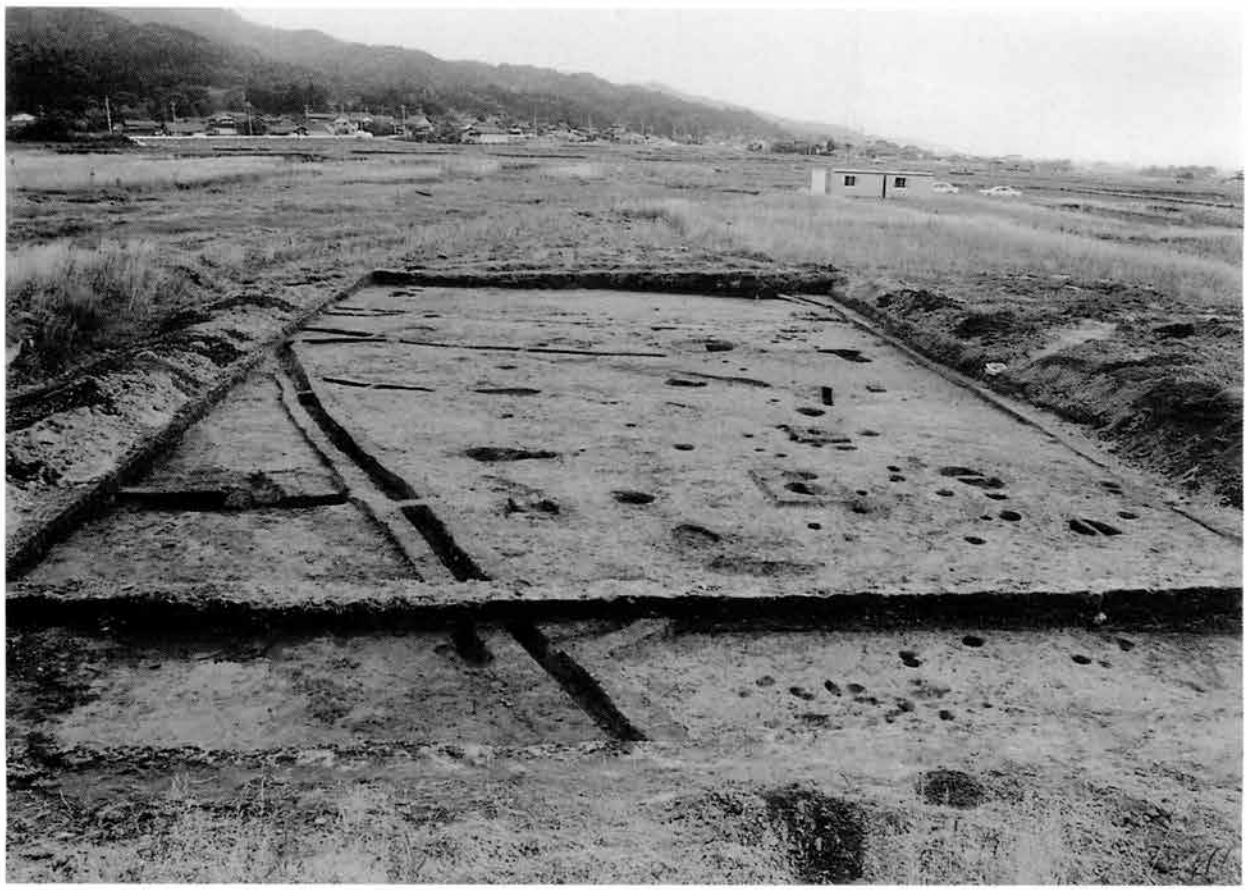
(1)　A地区　環状溝跡、掘立柱建物跡（東方より）

(2)　A地区　拡張調査区（北方より）

図版12　小金森ヘイナイメ遺跡(A)



(1)　A地区　炉跡（北西方より）



(2)　A地区　拡張調査区（北方より）

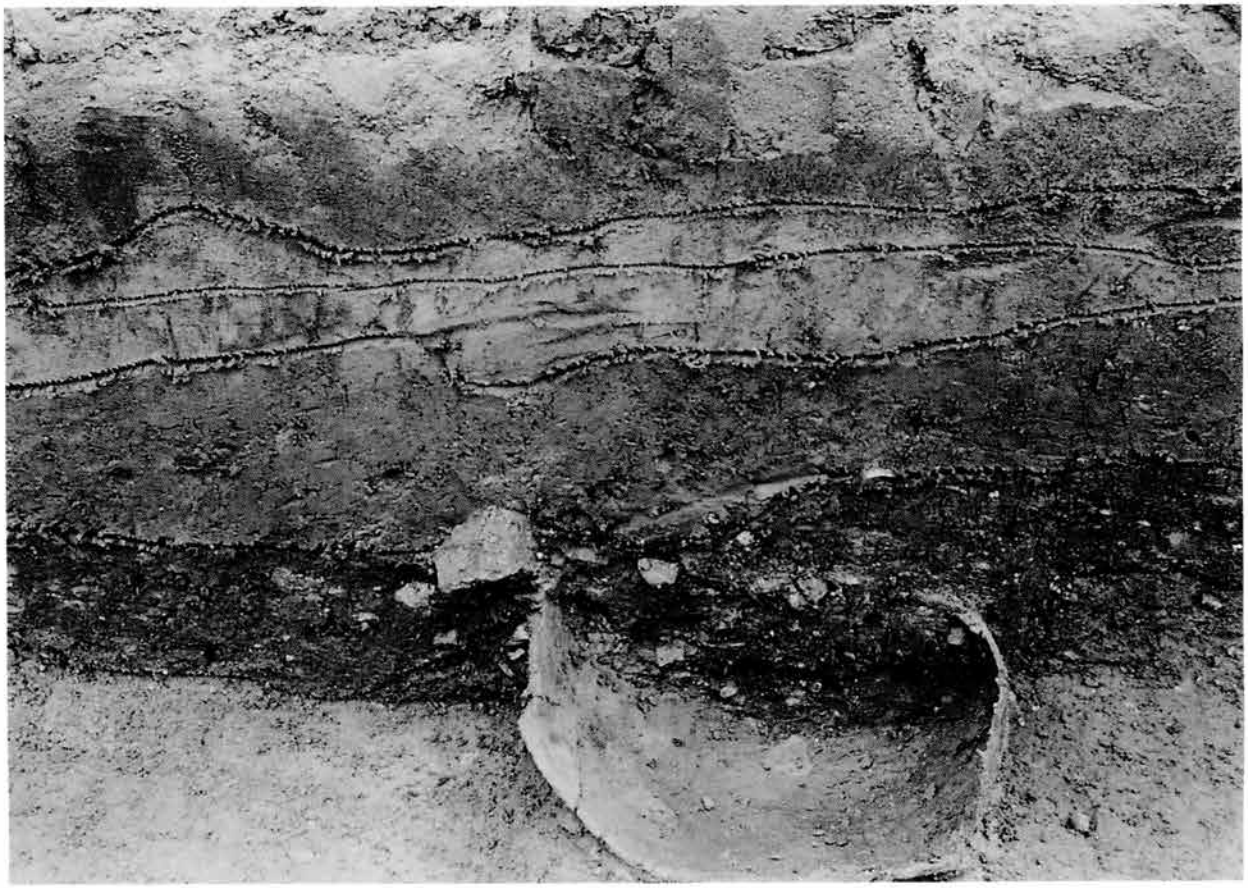
図版13　小金森ヘイナイメ遺跡(B)

(1)　B地区　第1区（東方より）

(2)　B地区　第2区（南西方より）

図版14　小金森ヘイナイメ遺跡(B)

(1)　B地区　第7区発掘作業風景（西方より）



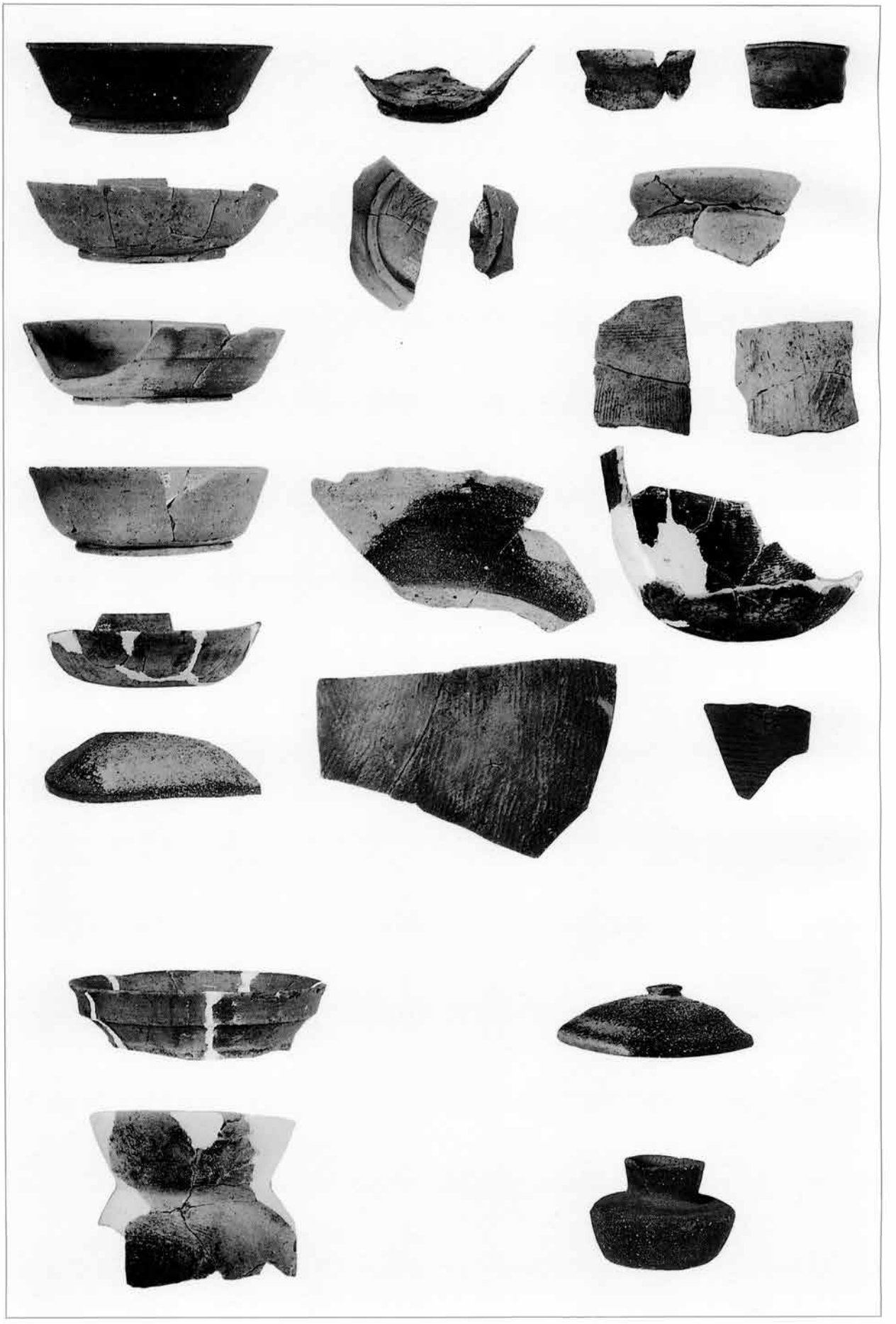
(2)　B地区　第7区同上土器出土状況

図版15　小金森ヘイナイメ遺跡(B)

B地区　第8区発掘作業風景（西方より）

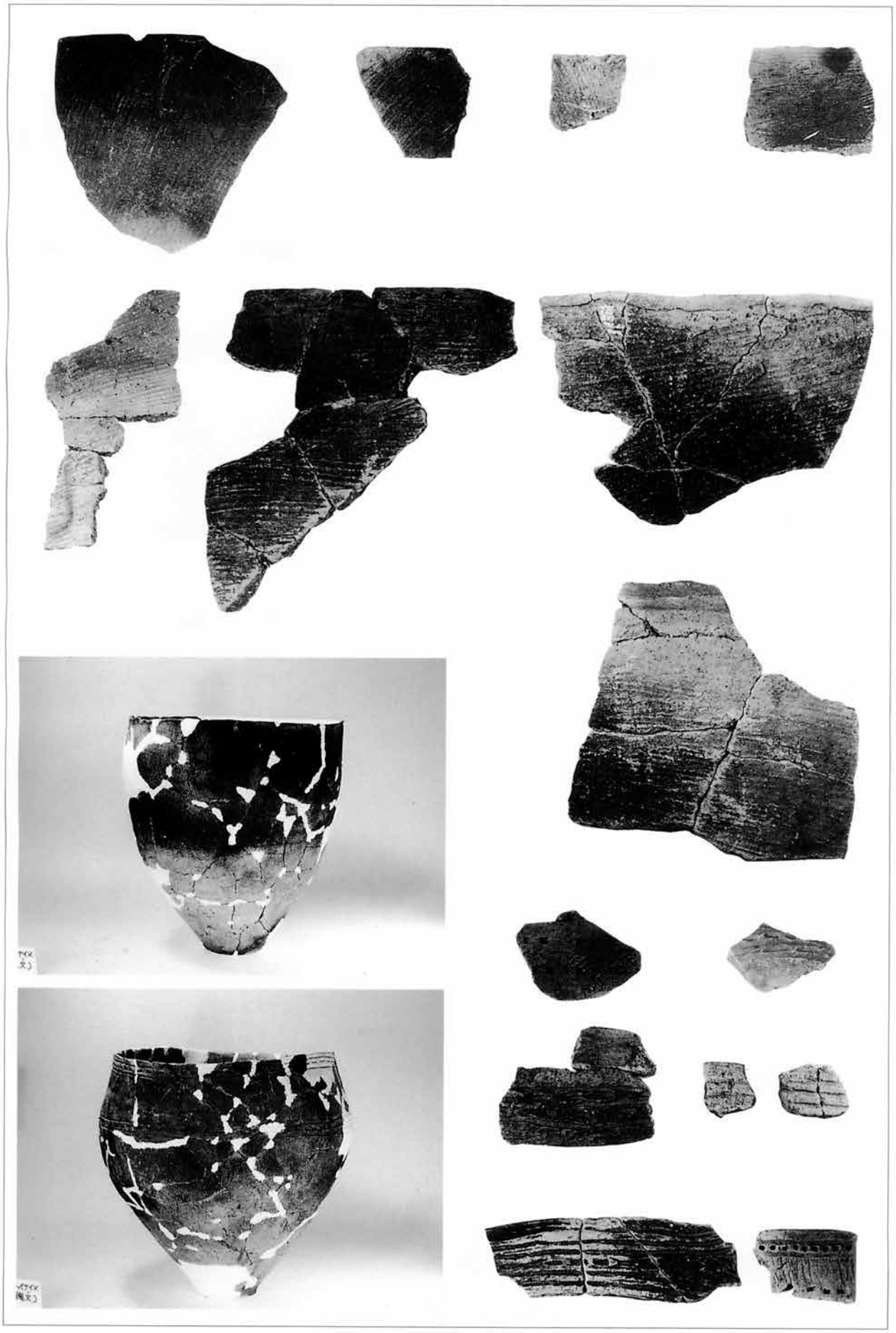
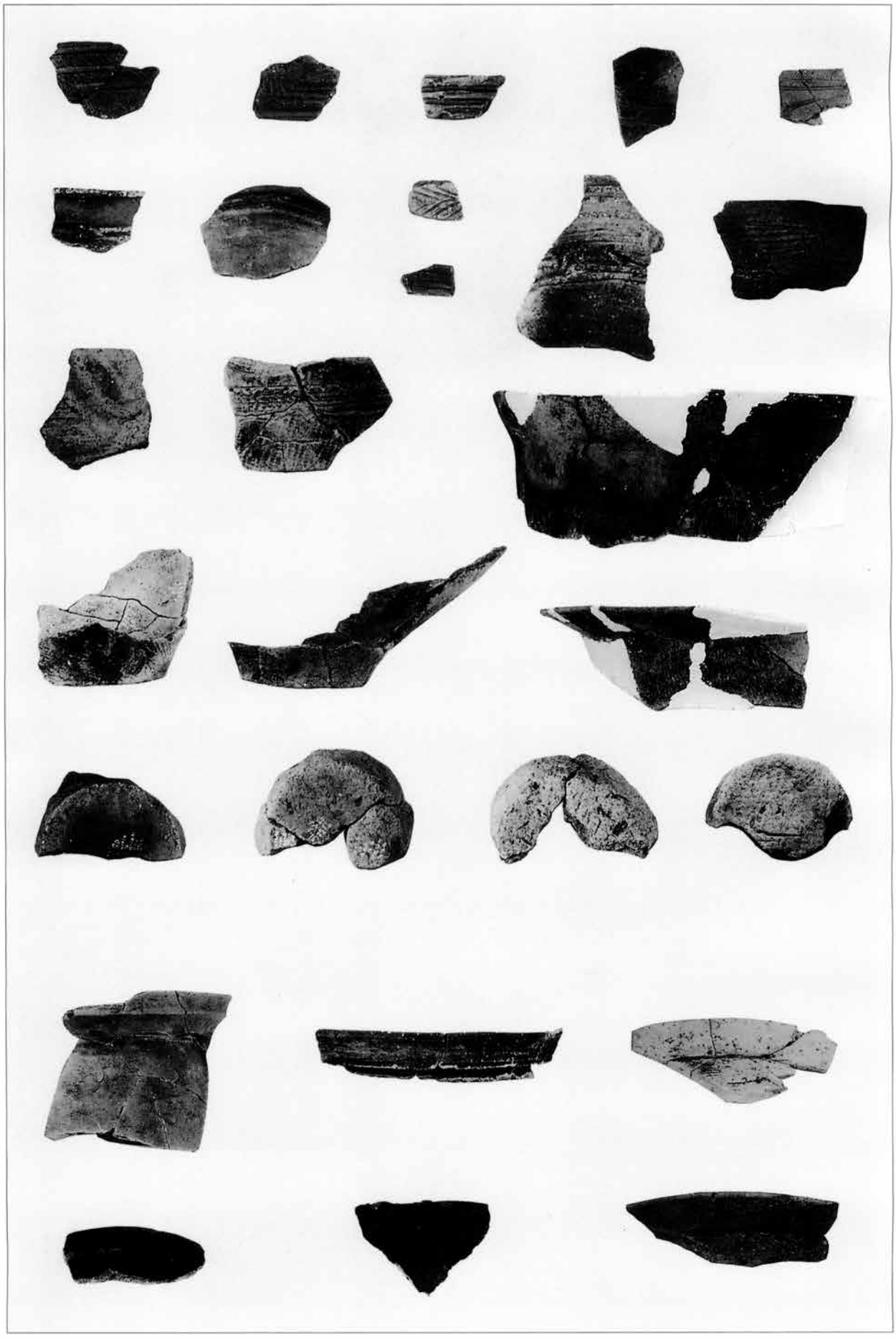
B調査地の状況（東方より）

図版16　小金森ヘイナイメ遺跡(A)



上段：調査区内出土土器、下段：従前の分布調査採集品

図版17　小金森ヘイナイメ遺跡(B)



図版18　小金森ヘイナイメ遺跡(B)